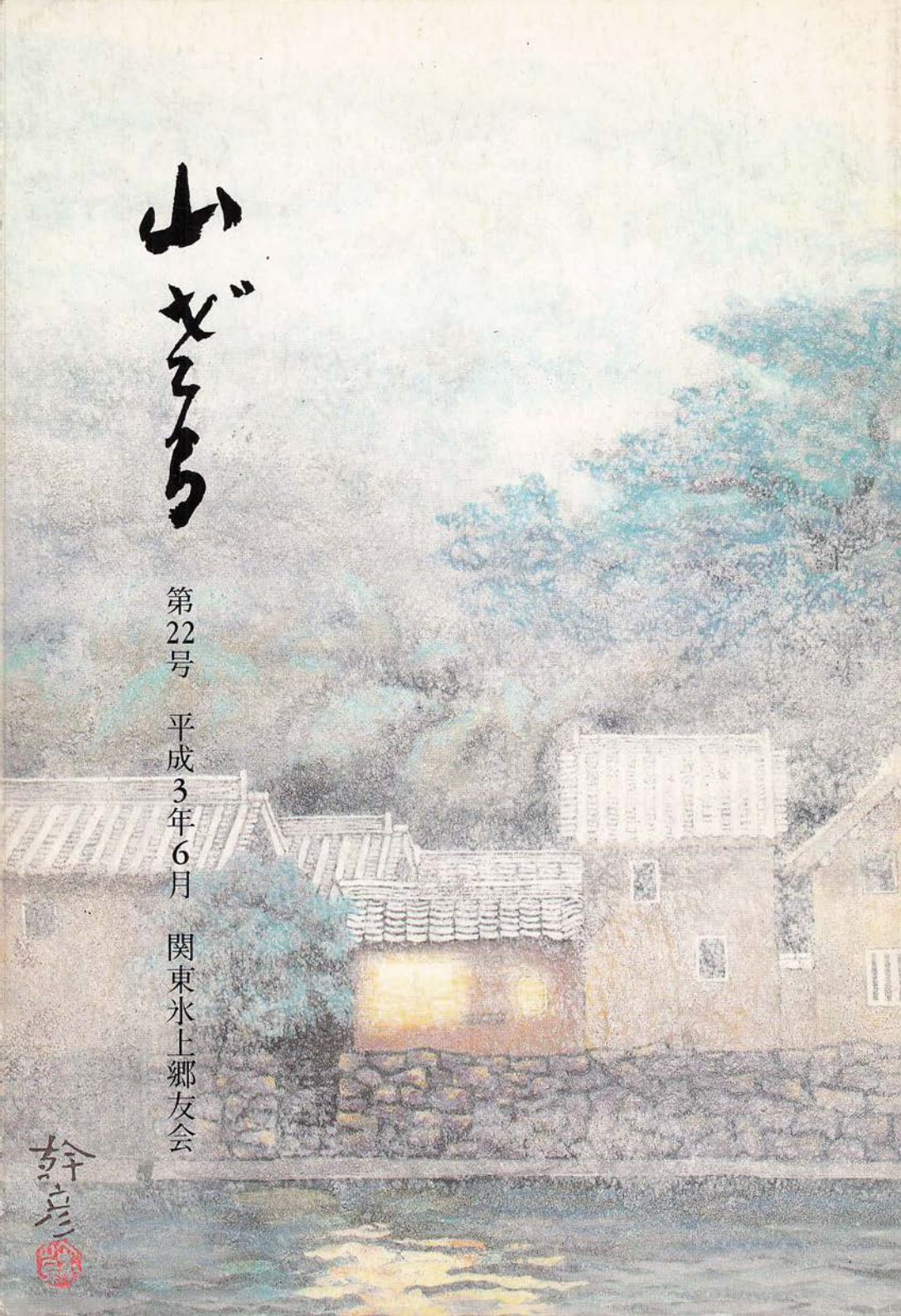
山ざくら

第22号　平成3年6月　関東氷上郷友会



DAIWA JITSUGYO GROUP

楽しさのバリエーション
多彩で華麗なナイトステージ。

エスカイヤクラブを頂点に、銀座をはじめ札幌から
鹿児島まで全国188店舗を誇る
多彩なフロアバリエーション。
独自のシステムで
鮮やかなナイトライフを描く
大和実業グループ。

日本で育まれた
会員制クラブの名門
エスカイヤクラブ

洗練された大人のためのプレイゾーン
- クラブV・O
- V・Oキューティ
- V・Oローズルーム
- セブンティクラブ
- 舞 妓
- ザ・トップクラブ
- ザ・トップクラブ ミュージックサルーン
- ザ・セラーズ
- すずめの学校
- めだかの学校

いけす活魚料理の本格味処。
やぐら亭

江戸前のイキの良さー。
ネタ自慢の味わい処。
やぐら寿司

心あたたまるバニーのサービス、
くつろぎのフロア。
ザ・ロイヤル

ワインをもっと自由に気軽に。
ちょっぴり気の利いた飲み方で。
ザ・ワインバー

楽しさいっぱいつめこんだ
西洋居酒屋。
やぐらふぁ〜むず

都会の中のふるさと気分、若者のお祭り広場。
櫓茶屋

モダンに飲んで、モダンに食べる。
ライト感覚串バー。
くしっこ

ライト&カジュアルライクな焼肉ハウス
焼肉ハウス298

おしゃれなヤングの小粋なたまり場。
ワンダーバー・ギャルズ

アメリカンカジュアルレストラン&バー。
ジェファーソンクラブ

気軽に飲んで、楽しく食べる。
カジュアルバー。
ジェファーソン

モダンでおしゃれなショットバー。
カフェパフ

ニューカルチャー派の
ファンタスティックカフェ・バー。
カフェ5/6

南国ムードたっぷり
トロピカルバー&レストラン。
プカプカ

レーザーが彩るファッショナブル
スーパーディスコ ラジオシティ

ウイスキーがウイスキーらしく
うまく飲れる本格派バー。
サントリージガーバー

ウイスキーがウイスキーらしく
うまいワンショット・バー。
エスプリ

最高の料理を最高の空間で。
本格派ダイニングバー。
ゲストハウスプレゴ

いいオトナのための
新・飲空間。
ダイニング・バーアクシム

新しくてなつかしい
西洋酒場。
白札屋

旬の味わいを、
心地良い和の風情の中で。
酒膳 醍醐

おしゃれで愉快な、
フードアンドビバレッジ。
パレット

大和実業株式会社 代表取締役社長 岡 田 一 男
本社：大阪市北区芝田2丁目1-18 西阪急ビル10F TEL.06(372)8571

山ぎろう
第22号

山ざる　第22号　目次

表紙絵……常岡幹彦画・平成二年作／口絵写真……池上隆一
草取歌・水車踏歌……青垣町史より……4
「山ざる誌」こそ会のかなめ……村上末吉……5
平成二年度総会・祝寿会・懇親会……6
'91氷上6町の課題……丹波新聞より……11
ふるさと市島未来塾・活動開始……芦田善也……14
村営発電所に再び命を……村上彰……17
柏原町歴史民族資料館へのいざない……藤本正也……19
大阪空港物語……梶原清……21
統一地方選挙めざして……足立良平……23
美しき老桜……須原清・須原初江……23
思い出すままに……森下千寿子……27
ふるさとは遠きにありて……野村節三……30
ふるさとは人生の友……伊田光男……33
〝花博〟を訪ねて……宮野近……34
石生の思い出……勢正彦……35
橋本先生と柏原……菊池洋子……37
柏中・柏女・柏高・今昔……植田憲雄……38
私のクエスト……吉田素子……41
細見綾子さんの『風』慶祝五〇〇号……宮野近……44

青春虚実……田中篤郎……45
ある転校生の思い出……斎藤美寿子……49
帰去来辞……小杉仙生……52
いけばなと私……志村慶子……54
故郷に帰って一年……田原敏男……55
ふるさと講演記……坂上五朗……56
哲学と私……足立静雄……58
私の健康法……井本義一……59
人生いつまでも青春……綾木健……61
インドネシアの古都から……上野重喜……62
〝時間の花〟を……足立さつき……66
羽ばたけ！足立さつき……吉見文憲……67
ふるさと〝ぎのこ美術館〟の夢……荻野美穂子……70
きめこみ人形に魅せられて……足立美矢子……72
「太平記」に登場する石龕寺……堀井隆川……74
ヤマノイモ談……奥田康夫……77
丹波の足立氏・芦田氏について……足立晴治……79
方言調査（氷上郡）……84
〈掲示板〉……97／〈クラブ活動等アンケート報告〉……104
〈文化同好会　ゴルフ会・囲碁会報告〉……112
'90丹波の動き……116／〈寄付者芳名録〉……129
〈会計報告〉……130／〈協賛広告〉……131

草取歌

今年や豊年　水田の上で　みどりの小波が　そよそよと
朝間はよから　田中に入りて　暑さこらえて草をとる
五月水ほど　こひしのばれて　今は秋田の落し水
娘　精をだせ　明けての春は　お手をひきよて・伊勢まいり
昼になつたら　歌などうとて　仕事あいたと思われな
昼は　田の草　四十日とらす　夜は　小麦を　五升ひかす

——（青垣町誌より）——

水車踏歌

とろりとろりと　ねむたい時は　馬に五十駄の金もいや
馬に五十駄の金さえあれば　なにがそんなに　ねむたかろう
人のこと言や　わがこと人が　まわる車の輪の如く

「山ざる誌」こそ会のかなめ

会長　村上末吉

会員の皆様、お元気でお過しでしょうか。世界特に湾岸戦争などに、日本はどう対処すべきか、皆様一人ひとりは深いお考えをお持ちでしょうが、このような時こそ日本人としてのしっかりした「哲学」が必要です。政府は右顧左眄することなく、身を賭して信じる方向に徹してこそ、世界の人々から信頼され尊敬されると思います。

さて「山ざる」22号をお届けできることに対し、会員の皆様と共に喜びたいと思います。編集・発刊に直接ご尽力くださった編集委員の方々に衷心より感謝の意を表しますとともに、広告出稿にご協力頂いた皆様にも厚く御礼申しあげます。

執筆者の皆様のご努力等、郷友会が「山ざる」を発刊できるのには、実に多くの方々のボランティアによって始めて実現されていることに深く思いをいたす次第です。このような立派な機関誌が、郷友の会で毎年発刊されている例は他にありません。財政的に豊かでもない当会の本誌が、号を重ねる毎に徐々に充実していくのは大変喜ばしいことです。

しかしその陰には、編集企画、執筆依頼、原稿整理、リライト、校正、印刷、製本、発送等の煩わしい仕事が消化されていることを知らねばなりません。しかもそれ等が総てボランティアであることに、その実情を知る者には涙する心境です。これ等のエネルギーは偶然ではないのでして、他では真似のできないシステムが形成されていることに因ります。

そしてその原動力の原点は、会員の皆様に喜んでいただくことであり、皆様が参加されることによって、自分達の「山ざる」だという意識を深めて頂けるものと信じていることです。そして生活の孤独の中に一つの光明がさし、少しでも心の慰めになればとの願いがこもっていることだと思います。

思いつきや、好き嫌いだけではこの厄介な仕事が続けられる筈はありません。会を存続、発展させていく大きな「かなめ」としての認識にたって、「皆様に少しでも」という大きな包容力がなければ、とっくの昔に絶えていたと思います。

郷友会は年に一度の総会や懇親会だけでは発展いたしません。縦の繋がりと横の結びつきは、何と申しましてもこの「山ざる」を充実させることによって皆様が情報を交換できますので、より深くなり、楽しいと思います。「山ざる誌」こそ会のかなめであろうと信じて疑いません。

平成二年度総会・祝寿会・懇親会報告

年次総会・祝寿会・懇親会は、平成二年十一月十七日、くだんの九段会館に於いて行われた。参集者は総勢七十五名。

総会では村上会長あいさつのあと、足立(和)理事から会計報告、坂上理事から会務報告が行われ、滞りなく議事を終えた。

また来賓としてご出席いただいた上井寛之氷上高校々長からは、郷里の近況と、同高校なかでも女子バレーボール部の活躍についてのお話をうかがった。(因みに、同校女子バレーボール部は、本年六月に行われた全国高校選手権大会において、念願の初優勝を遂げた。)

村上会長のあいさつのなかには、はじめて実施した郷友の趣味・クラブ活動、山ざるに関する意見等に関するアンケートの集計結果報告と、協力に対する謝辞が述べられたが、このアンケートの結果については紙面を変えて記載する。

祝寿会では、本年はつぎのかたがたに、会長より祝詞と記念品を贈呈した。今後もますますのご健康を維持されることをお祈りしたい。(五十音順)

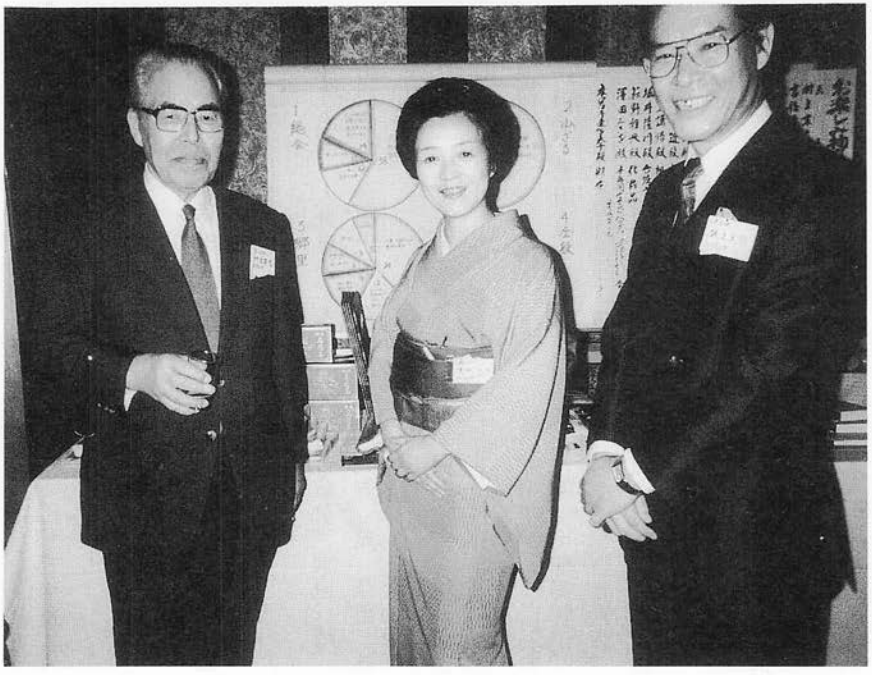
石田吉郎殿、植木格殿、小寺確郎殿、久安敏夫殿

懇親会はいつもの通り、丹波弁で盛りあがることになるが、当日は、郷里のほうでも会合があるということで、六町からの来賓がなかったのは一抹のさみしさを感じさせた。

アンケートにまつわる趣味の話など、いつもとひと味ちがう話題も方々で聞かれた会であったが、なんといっても究極の楽しみは、「お楽しみプレゼント」の当選番号発表である。

今回も多くの有志からバラエティに富んだ景品をご寄贈いただき、会場に花を添えることができた。深く感謝申し上げる。

(写真左・祝寿者小寺確郎氏、以下懇親会風景)



景品及び寄贈者の芳名は次の通りである。（順不同）

村上末吉殿　電卓（名刺型）　三〇本
吉住重造殿　長袖ポロシャツ　一〇本
渡辺隆男殿　故宮名画複製　五本
足立和巳殿　日高昆布　一〇本
鶴田　宏殿　明治チョコレート　一二〇枚
生田清弘殿　パーカーボールペン　五本
池畑豪士郎殿　明日香園銘茶　五〇本
可部美智子殿　陶彫人形　二本
安原三智子殿　マカデミアンナッツチョコレート　五本
田中篤郎殿　せりのみそ漬　一〇本
宮野　近殿　七宝ネックレス　五本
足立謙悟殿　押絵色紙　三本
堀井隆川殿　台湾ウーロン茶　一〇本
萩野雅央殿　化粧品　三本
澤田みさを殿　オルゴール他　三本
木呂子恵美子殿　財布　二本
◎郷友会賞　丹波山芋二kg　五本
丹波黒豆　参加賞全員

○

平成二年度総会・祝寿会・懇親会出席者（略敬称）

◎来賓

上井寛之（氷上高等学校々長）

◎祝寿者

小寺確郎

◎一般会員

△青垣町

足立和巳、足立静雄、足立誠一、芦田　坦、飯田光雄、安原三智子、大和季代子、横山幸之

△市島町

大槻作治郎、大野良夫、木村つた江、近藤勇、須原　清、鶴田ゆき子、余田士郎、萩野美穂子、大野　茂、萩野　武

△春日町

足立昌彦、木呂子恵美子、高橋博子、村上末吉、村上久夫、岡田一男、安田　功

△柏原町

足立和子、生田清弘、上山　顕、岡　吉明、可部美智子、久保田元子、志村勝郎、高尾久子、谷　達雄、常岡幹彦、出町京子、中江悦子、松下文雄、杉本源吉、宮野　近、村上善英、横田公子、吉田素子、澤田みさを

△山南町

小田明子、久保春雄、中居篤子、堀井隆川、山本紀子、若森敏郎、渡辺貴美子、仲　一聰、深田浩嗣

△氷上町

足立　勝、天野清子、綾木　健、木呂場明子、坂上五朗、坂上勝朗、祐安夏忠、新田博道、本城英明、渡辺隆男、安達健一郎、田辺信夫、足立謙悟

△多可郡

小糸イキ、笹倉郁子、藤田正雄　　以上

'91氷上6町の課題

――下水道整備等、快適な住環境をめざす――

一九九一年の幕開け、いま丹波は〝丹波の森〟構想を軸に、二十一世紀に向けて新しい地域づくりが展開されている。なかでも交通網の整備は丹波地域が願望する最大のプロジェクトだ。丹波地域に大きな飛躍をもたらすと期待される舞鶴自動車道は県内開通に続いて、今年は福知山から舞鶴までが完成し、これによって瀬戸内側から日本海側までの全線が開通するが、待望のJR福知山線の複線化はまだ丹波地域では実現していない。一方、北近畿豊岡自動車道の早期着工も望まれるところ。それに快適な住環境をめざす下水道の整備は急務。このように北近畿豊岡自動車道の早期着工とJR福知山線三田以北の複線化、下水道の整備は、今年、丹波地域が抱える最大の課題である。丹波の各町においても森構想の推進を軸に、下水道問題をはじめごみ処理施設や斎場問題、教育施設の整備、役場庁舎改築、道路整備、ゴルフ場開発、産業振興、観光対策、福祉の問題などハード、ソフト両面からの課題は多い。二十一世紀に入る二〇〇一年まであと十年になったが、新年を迎えて氷上6町の〝今年の課題〟をさぐってみる。

柏　原　町

懸案だった地域福祉センターとデイサービスセンターの建設計画がまとまり、いよいよ実現の運びになる。「誰もが住んでいてよかったと喜ばれるまち」づくりへ、ステップを進めることになる。

引き続いて下水道事業の推進をはじめ上小倉に建設するゴミ焼却残渣（さ）処理施設や、JR柏原駅前を中心とする駅前開発整備事業がことし大きく動き出す。

JR柏原駅前の開発整備はJR西日本が昨年、大阪市で開いた国際花と緑の博覧会会場で使用した山の駅舎建物を柏原駅舎にそっくり移築する計画で具体化を急いでいるため、柏原町は柏原駅舎の改築に併行して、駅前周辺の開発整備に取りかかることにしており、国道176号線の修景事業も、柏原駅前の開発整備に合わせて進める。

山南町境の県道柏原―谷川―中線の奥野々峠がトンネル化によって改修が決まり、昨年秋から測量を行っていた。ことしは用地買収など工事のお膳立てをして着工を待つが、奥野々峠の改修に合わせて昨年秋に発足した奥野々・石戸地域の開発促進事業もことしから本格的に動き出す。

斎場の改築計画が昨年末、地元関係者の同意を得て大きな前進を見たことは明るいニュースで、町も真剣に対応し改築へ取り組むことにしている。

春日町

春日町は、みどりの恵みを生かした〝田園文化都市〟をめざして、今年度の重点事業として町営住宅の建設、三宝ダム（通称大谷ダム）建設と合わせて東部簡易水道事業の着手、昨年度に引き続いて農村環境改善センターの建設を掲げる。

町内五小学校で最後に残っている大路小学校改築への基本設計、さらに老朽化が目だつ庁舎整備の調査に取りかかる方針で、庁舎構想が話題を呼びそう。また、昨年度から工事を進めている保健センター、デイサービスセンターも完成、いよいよ運用の年を迎えるほか、大路幼稚園舎も木造のモダン園舎に。

ＪＲ黒井駅前のロータリー構想や道路整備、さらに六年余りかかっている大型店の出店問題も具体化へ一歩前進する見込みで、同町の中心地、黒井市街地の整備が進み〝活力のある町〟へ。

ふるさと創生一億円で、急浮上した〝総合運動公園〟も今年度中に具体化へ。

近畿自動車道の春日インターの町、春日町にふさわしく国道１７５号線沿いには、民活の話題が多くなってきた。また、大路地区には、新潮プラスチックの工場建設も、産業の少ない同地域の〝活性化〟に大きな役割を果たすことになるだろう。二十一世紀に向かって〝区切りの年〟になりそうだ。

市島町

市島町は、前山小学校屋内体育館の建設、地盤沈下に伴う市島中学校校舎の大規模改修など、文教施設の整備充実をはかるほか、生涯学習センターや図書館の設置に向かって具体化への検討が始まる。

六年の歳月をかけた懸案事業の町内の簡易水道の統合が実現するのも今年。昭和六十年度から着手した簡易水道統合も今年の鴨庄地区で、すべて完了する。また、全国的に有名な〝有機の町いちじま〟の田んぼの地力増進に貢献する〝堆肥センター〟（仮称）も今年度から稼動する。町内の畜産農家から出る和乳牛のフンを処理し、堆肥生産施設で昨年度から工事に着手。

一時、神戸の八代学院大の用地だった栢野も、住友ゴムが購入しているが、今年度から工場（試験施設含む）建設を始める予定、山林地帯は大きく変貌の年を迎えた。

塩津峠付近のゴルフ場建設や神戸・灘生活協同組合の青少年向けの施設建設（与戸地区奥の永郷池上）、旧竹山中学校跡地（西宮学園）の町用地利用などのほか、出生率低下に伴う保育園や幼稚園の運営問題など、多くの課題を抱えて新年を迎えた。

今年は、町長、町会議員ダブル選挙の年だけに、町民の町政に対する関心も高く、難問題をどう処理するか、注目を集めている。

山南町

平成元年度から工事を進めている同町草部の農業集落排水対策事業が、平成三年三月末には完成の見込みで、和田地区で十年計画で行っている公共下水道事業も三年目に入り、工事は更に進行する。

懸案の町役場庁舎建設は、同町谷川の天神池近くの用地を確保しているが、平成三年度には庁舎敷地の造成工事を手がけることにし、具体的な建設計画がはじまる。これも懸案の斎場問題は、用地の確保に懸命になっているが、久下地区内に確保出来る見通しが見え出して、町もようやく焦眉を開いた感じ。隣接町と共同設置案は捨て切れず、これからの動きに合わせて隣接町との連携も課題。

山南中学校の給食棟完成に引き続いて、屋内体育館建設があるが、財政とにらみ合わせて出来るだけ早期に手がけたいと希望している。県道柏原―谷川―中線の奥野々峠のトンネル化改良工事が、公共事業に採択され、いよいよ用地買収に入る。奥野々峠の改良設計と併行して、昨年十一月に柏原町と合同で石戸・奥野々地区開発促進委員会が発足したが、両町の強い連携が具体的に動き出すのも今年の課題として見逃すことは出来ないものがある。

氷上町

氷上町は昨年機構改革で環境整備課を新設したが、今年は全町生活排水処理計画の具体化をはかる年になり、一方では東地区、南地区の公共下水道事業など環境整備事業がクローズアップしそう。

教育施設整備では、氷上中学校校舎改築問題が現実のものとなってきており、今後の財政措置など将来の方向付けが求められる。昨年の北幼稚園改築工事に続き、今年は北小学校プールの建築にかかる。

住宅対策では、雇用促進事業団が石生の町有地に雇用促進住宅五階建て二棟六十戸を建てるほか新郷で町営住宅二棟三

十六戸の建設に着手し、氷上工業団地に誘致した企業就業者などの住宅確保にあてる。

昨年は、達身寺、円通寺と氷上町の観光がクローズアップ、町休養施設「やすら樹」の利用も増えていることから、受け入れ体制の充実や特産品、名物料理開発も課題。大型ショッピングセンター構想や北近畿豊岡自動車道路、インター計画などにより、土地利用の抜本的対応策も町の将来にとって不可欠。いずれにしても、恵まれた交通や地理的条件を生かして町の浮揚をはかる大きなチャンス。

青垣町

定住と交流の町づくりを柱にかかげる青垣町としては、昨年まとめた生涯学習のむら整備事業として「ふるさとアトリエ村」構想を具体化、用地の選定などがクローズアップ。同町の進める生涯学習の町づくりのノウハウを地域活性化にどう結びつけるのか、町内外から注目を集めるプロジェクトになる。

また、総合的な高齢化対策としては、シルバービレッジ構想を昨年からの継続事業として進め、すでに着工している特別養護老人ホームは九月に開所したい意向で、デイサービスセンター・ショートステイ、介護支援センターなどに取りかかる。また、長年懸案の総合運動公園も課題。

学校関係では、芦田小学校の周辺環境整備、神楽小の大規模改修など。直営診療施設等の総合整備、ゴルフ場問題は議会にも特別委員会を設置して検討、特にゴルフ場問題は町民のなかに賛否両論があるだけに町や議会の対応が焦点。

町の経済的浮揚をはかろうと工業団地の計画も。また、新農村定住促進事業で、農産品加工施設、丹波布伝承館、果汁加工場などを構想し、住民主導の村おこしへチエを絞っている。

北近畿豊岡自動車道のインターチェンジ設置決定によって活気の兆しが見え始めており、大型事業が自白押しのなかで、行政の主体性が求められる年でもある。

（丹波新聞より転載）

ふるさと市島未来塾、活動開始

芦田善也（市島町）

昨年四月に発足した「ふるさと市島未来塾」（代表坂谷高義氏、十名）は、今後の活動計画を決定し、同計画をもとに実際のとりくみに入る。

同塾はふるさと創生議論から生まれた熱中集団（若者の）であり、〝未来へのかけ橋役として〟次の八つの柱を立てている。

○川の中から川をとおして町を考える事業
○ムッレ活動（ネイチャーゲーム）の支援
○町の財産を再認識し伝承する事業
○名水への親しみ
○青少年国内外派遣事業
○異文化交流事業
○町出身者組織づくり
○山の活用、農産物の商品化等の研究

特に、町出身者組織づくりでは、当町出身で現在各界各層で広く活躍されている方々に市島町のまちづくりへの参加を呼びかけるとともに外から観る市島町についての討論を通じ自分たちも将来の市島町を考える機会にしたいとしている。

経　過

平成元年十月、町ふるさと創生委員会から町長に示された意見具申に沿って、結成された若者の集団である当ふるさと市島未来塾において、四月以降市島町のまちづくりといった視点で、議論を重ねてきた。（協議内容添付）今後の具体的事業に直接結びつかない点はあっても、特に農林業、商工業、活性化、地域整備方策等を中心に広く協議を行うなかで、民間組織としての当未来塾の活動のあり方を決定した。

活動方針

市島町のまちづくり（よりよい市島町を築くためには）を目標に種々の課題について協議を行ってきた結果、目標達成にむけては数多くの講ずるべき手段（実施事業）が考えられた。これらの事業には行政機関が行政施策として実施する内容のものが多く、未来塾の活動はおのずと制限されることは否めない。

そこで、当未来塾としては「現在の私たちがどうありたいか、また将来の市島町にとって今何が必要か」を基本に、民間組織として実施でき得る事業を次の中期テーマのもと、主体的、積極的に実践するものとする。

〝未来へのかけ橋として〟

◎自然とふれあい、自然を考える（自然の意義を問い直すために）
◎市島町の再発見（自分の町を誇れるために）
◎外から市島町を観る（広い心になるために）

事業計画

◎川の中から川をとおして町を考える事業

町の中心部を南北に流れ、防災や、自然環境、環境衛生

等の面からも重要な役割を担う竹田川のイベントをとおして中から見つめながら、川の現状と自分たちとのかかわりといった視点で、川の重要性について問題提起したい。

◎ムッレ活動（ネイチャーゲーム）の支援

町の七割以上を占める森林（丹波の森）について、林業の低迷や日役等管理の困難さといったマイナスの要素だけでなく、日頃は気づかない自然の意義について体験を通して森を考える機会の提供のため、ムッレ活動の輪を広げたい。

ムッレ活動（ネイチャーゲーム）とはスウェーデンで行われている主に子供を対象にした野外活動。子供が自然のなかで、ありのままの自然を体験かつ学習し、自然と一体となるなかで、自然の大切さを子供の心に刻みこむ事業。

◎町の財産を再認識し、伝承する事業

町の財産であり誇りでもある大野唯四郎翁や三ツ塚史跡等について、広く訴え、認識を深めるためのストーリー作りや、イベントを通して、自分たちの誇りを今に生かし未来に伝えたい。

◎名水への親しみ

町内に四軒の造り酒屋（一つの町に造り酒屋が四軒もあるのは全国でも約三十しかない）といった名水の豊富な土地柄から、名水、ひいては自然の恵や香り高い文化を考えるためのイベントを行い、町を活動づけることにも寄与させたい。

◎青少年国内外派遣事業

個人の価値観が形成されようとする時期において、広い視野から物事を見つめ、異なる価値観にも柔軟に協調できる資質を持ち大きく羽ばたいてくれるよう、青少年のための国内外派遣事業を考えたい。

◎異文化交流事業

多様な文化、宗教、価値観等との共存共栄意識の高揚（心の国際化）を図り、精神的に開かれた町づくりに寄与させるべく、現在実施されている「あぜみち交流」の延長的、発展的な異文化交流事業を検討、実施したい。

◎町出身者組織づくり（放談会等）

当町出身で現在、各界各層で広く活躍されている方々に市島町のまちづくりへの参加を呼びかけるとともに、外から観る市島町についての討論を通じ、自分たちも、将来の市島町を考える機会にしたい。

◎山の活用、農産物の商品化等の研究

森林の有効活用や農業の振興等にむけて、二次林や伐採林への実のなる木の植栽、実の加工、商品化、また、農産物の加工、商品化といった高付加価値の追求について研究を行いたい。

村営発電所に再び命を

村上　彰（山南町）

ふるさと創生資金なる御下賜金が火をつけたかどうかはともかく、全国津々浦々の地方市町で、〝村おこし〟〝地域活性化〟の大合唱が続いている。マスコミを通じその目立ったケースや仕掛人の活躍が報じられ、皆さまも「わが郷土はどうかな」と思いをはせられたことがおありかと思う。

兵庫県では、淡路島・津名町の一億円の金塊が全国をアッと言わせたが、氷上郡ではどうか。青垣町の全国公募日本画展、全国もめん展がまじめで意味のあるものとして評価が高い。しかし、昨年暮れ以来、全国的にあまり例がないという〝夢〟が山南町上久下（かみくげ）で芽を吹いている。

上久下は、ご存知のように今も静かな山村である。自然は美しいものの過疎で、高齢化で、土地も狭くて……と誇れないことが多い。活性化へ何かを、と思いはあってもやってみ

る馬力はない—と、そんなあきらめにも似た気持ちが近年ずうっと地域を支配してきた。ところが「川代渓谷（正確には峡谷）に発電所があるやないかい」という声が出たのである。

「〝発電所〟とは、眼下に急流が岩をかむ絶景の崖に、今も赤レンガの洋館が残る「旧上久下村営（水力）発電所の跡」のことだ。奥地の農村ではまだランプが当たり前であった大正十一年「村に電気を」「文明の暮らしで人を育てよ」と僻地の小村が、自分の力で建設した。だがわずか数年で関西配電のものとなり、戦後、採算が合わないとしてタービンは止められた。村民にとっては活性化へかけた夢そのものであったものが消えた。自分たち自身が棄（す）てられたとさえ思ったものだ。

だが、幸いなことに、関西配電（現関西電力）が建て物をつぶさずそのまま上久下に返してくれていた。住民はもはや用のないもの、見たくもないものとして、近寄らないまま年月が経ったが、「このレンガの洋館をコンサートホールかミニ博物館に」「いやきれいな星空が見える上久下だから天文台に」と発電所跡再生へ意欲が出てきた。そして上久下地区住民にも山南町当局にも衝撃を与えたのは、現地を見た神戸新聞の論説委員長が、兵庫県のシンポジウムで「あの発電所跡は、人に夢を与える貴重な資源だ。もう一度タービンをすえつけ電気を起こすくらいの気持ちで考えて欲しい。必ず全国に知れわたる」と熱弁をふるったことだ。

上久下には、やり手の町のように、イベントであっといわせたり、金もうけをする気持ちはない。全国から大勢人が来て感動してもらうのもうれしいが、いま最も必要なのは、何よりもまず、この土地の住民が熱い血潮を取り戻すこと、七十年前、自力で村営発電所を作り上げた先輩たちの夢と積極性に学ぶことだ—と思う。そしてこの発電所が教えてくれるものを氷上全体のものにしていきたいし、県やマスコミの好意もひしひしと感じている。氷上郷友会の皆さんにも〝誇らしい郷土の村おこし〟と喜んで頂きたいものである。

（村上彰氏　氷上郡山南町篠場生まれ、氷上郡、多紀郡の小学校などの校長を経て氷上郡教育長をつとめ平成元年退職。現在山南町生涯学習推進体制確立準備委員長）

歌ににじむ村の心意気

村営発電所が完成した大正十一年、上久下村に落成祝いの歌が作られ旗行列で喜びにひたされたもの。幸いその村史に歌詩も残っているのでご披露させて頂く。旧村営発電所に〝命〟再び、と元日付の神戸新聞にカラー写真入りで特集されていて、多くの家で帰省した子や孫にお年寄りたちが歌をうたって聞かせたことと思われる。「先進的なふるさとやったんじゃぞ」…おとそも手伝ってその幸せ感はいかばかりか。上久下

では〝人の心の活性化〟はすでに始まっていた。

発電所落成を祝う歌

一、その名もゆかし川代に　水力電気ができました
　今日こそ嬉しい落成日　みんなと一緒に祝いましょう
二、桜と水と白砂と　三つ揃うて美しい
　その川代の真中に　きれいな水をせきとめて
三、西に流して十余町　魔物のような鉄管に
　あふれる水の力にて　夜を昼にと変えました
四、これより後は夜を昼に　ついで一緒に励みましょう
　学びの道を一筋に　家の業をば一心に
五、思えば長い年と月　我等は待ちぬ落成日
　みんなと一緒に祝いましょう。

柏原町歴史民俗資料館へのいざない

藤本正也
柏原町歴史民俗資料館運営委員会委員長

柏原は江戸時代は城下町でした。今も国・県の出先機関や教育・文化施設、郡の諸施設が集まっているのは当時の行政的習慣から廃藩後も設置されたものが多いようです。

藩政時代に藩主として拠点を柏原に置いたのは信長ゆかりの織田氏だけでした。

しかし、その織田氏は秀吉の晩年、慶長三年（一五九八年）に伊勢の安濃津（現・三重県津市）から移封され、氷上郡の大部分＝三万六千石を領知した信長の弟信包を初代とし三代四十八年の後、無嗣のため、除封となった家系と、その後、四十五年間の幕府直轄である天領時代を挟んで、元禄八年（一六九五年）、信長の二男信雄の玄孫信休が、大和の宇陀松山（現・奈良県大宇陀町）の城主から移封され、郡内四十四ヶ村と現在の福知山市と綾部市内で十三ヶ村＝二万石を領知した家系の二系統になっています。共に織田一族の藩主であったので、柏原藩を織田藩と呼んでいる人も少なくありません。

前の織田の治世は期間の短かさもありますが、遺跡、遺品に乏しいのは残念です。後の織田は、明治維新廃藩まで十代の藩主が続き、その遺跡は陣屋や廟所など目立ったものが現存し、散逸した物もあると思われますが、かつての藩士の末裔によって、藩主のものや、織田氏の列侯を祀る柏原の建勲神社の祭礼用として寄進したものが百有余年にわたって保管されてきていて往時を偲ぶことが出来るのは幸いです。

これらの遺品の保全と公開は随分前から話題になってきたのでしたが、やっと実を結び「柏原町歴史民俗資料館」の主な資料として永く伝えられることになったのです。

資料館は、柏原藩陣屋（城であり、正徳四年＝一七一四年

建立、中途火災に会い再建）の正門（長屋門＝火災を免かれ、創建時代のもの）の前に道をよぎった所に格好の敷地を得て、昭和六十三年十一月に起工、平成二年三月に完工、館内の乾燥・消毒・資料の防虫の期間を充分にとって、五月二日に開館の運びとなりました。建坪三五五㎡、一見、二階建てに見えるのですが、鉄筋コンクリート平屋建、工費一億三千万円を投じたものです。常時、学芸員の他二名の職員が配置につき、管理・運営・研究・案内説明に努めています。

開館式には、織田氏の当主信孝氏（武蔵野市在住）が帰来し、柏原町の姉妹都市大宇陀町長と議長や織田氏の関連のあった市町村の首長等が来館して祝福して下さいました。その席で、前記の遺品を織田信孝氏と建勲神社奉賛会長（総代協議会長）から町へ寄贈されました。

それをこの館で保存し、今後、それを基底として展示することとし、加えて織田氏やそれ以前・以後の柏原に関する史料を広く町の内外に求め、入手したり、借用することによって充実を計ることにしています。

開館特別展には、京都の建勲神社・大雲院・福井県織田町剱神社、山口県岩国市の博物館などから、武具・文書・肖像画等、多数を借用して、協力を受けました。今後もこうした手法も進めて、豊かな内容の館とし進めて行くことにしています。

（写真は柏原町歴史民族資料館）

大阪空港物語

参議院議員　梶原　清（篠山町）

私は、昭和三十九年六月一日からまる四年、運輸省航空飛行場課長をつとめた。

当時、大阪国際空港の拡張整備事業（三千メートル滑走路の新設、ターミナル地域の整備等）が進められていたが、大阪万博の開催を間近かに控えながら、用地買収、民家の移転補償交渉がデッドロックに乗りあげていた。

私は東京での多忙な仕事の合間をぬって殆ど週一度のわりで大阪へ飛び、周辺の民家を訪ね回ったり、夜を徹する団体交渉もたびたびやり、時には団結小屋へ乗り込んだりした。

ある団体交渉の席上、地元の指導者である共産党のM市議が、

「お前たちは賃金を沢山とっているくせに補償費をちびるとは何ごとじゃ」

「じゃMさん、僕の給料はどの位だとお思いですか」

「お前は本省の課長やから十五万円はとっとるじゃろ」

「いゃー六万三千円です」

「なにッ六万三千円？」

給料をもらった足で夕刻からの団体交渉に臨んでいた私は、給与明細書を取り出し、

「これを見て下さい、間違いないでしょう」

「ほんまやなァ」

「こんな安月給でやっとるんですから、あまりいじめないで下さいよ」

「その手はくわんぞ、アッハハハ」

一同どっと笑い、私の異名「ミスター・六万三千円」が誕生した。このことが雑誌『実業の日本』に紹介されたが、驚いたことに、私が月給袋を手に握りしめ、壇上から名演説をぶったことになっている。

何ヵ月かのち、このM市議が同僚と一緒に私の部屋にやってきて、

「このおっさんは悪い奴なんじゃ。向い合って団体交渉しとっての。わしが怒鳴って手を振りあげた途端、ひょいと手を出して『ちょっと煙草一本』。ついつられてポケットから煙草をとり出し、おまけに火をつけてやって、『用地補償交渉にきとりながら、相手から煙草をせびる奴がおるかッ』とわしがいうたら、このおっさんのいわく、『別に煙にまくつもりはありません』」

「そんなこともありましたな」
「とうとう、このおっさんにだまされて、用地買収されてしもうてー」
おかげで昭和四十五年二月新滑走路が完成し一番機が飛び立った。同時に航空機騒音に対する地元住民の苦情も大きくなり、今はときめく社会党委員長の土井たか子先生が指導された有名な大阪国際空港騒音訴訟へと発展していった。
昭和四十九年十月航空局飛行場部長を拝命した私は、発生源対策としてジャンボ、トライスター等の低騒音大型機（通称エアバス）の同空港への乗り入れ実現のため三年あまり奔走した。土井先生のお部屋もたびたび訪ねた。「低騒音大型機は騒音の低い飛行機なんです。環境庁もＯＫを出しているんです。一機当りの収容力が大きいので減便も可能になるんです。世界の空を飛びかい、わが国の他の空港にも飛んでいるんです」。泣くように頼んでも、「駄目なものは駄目。空港周辺住民の同意書をとってくれば話は別」。
ある日、当時の田村元・運輸大臣が十数人の局長会議の席へ私を呼ばれ、「この梶原はかわいそうに、土井君の前にひざまずいて、エアバスを大阪空港に入れさせてくれと土井君の膝をこうしてさすったんだ」（尾鰭（おひれ）省略）。話は大きくなればなるものであるが、エアバスの乗り入れも実現し、過般大阪空港の存続方針も決定して今日を迎えている。

〈巻頭4ページの写真について〉 扉と目次の背景に使った写真、丹波の風景は氷上町石生・池上隆一さん撮影になるものです。丹波新聞紙上・郷友会の公募に応じられた作品。石生水分公園・高谷川沿い、のどかな冬と春のスナップです。写真には左記のようなお便りが添えられていました。
拝啓　前略　今丹波は近舞自動車道についで、春日ＩＣを基点に近豊自動車道の杭打ちが二月に行なわれ、丹波は今、大きく変貌しつつあります。私は丹波に生れ育ち、この丹波をこよなく愛しています。今に残るこの美しい丹波の自然、素朴な人情を大切に後世に伝えたいものです。
私は大東亜戦争に海軍の兵士として五年八ヶ月、大平洋、印度洋と広く転戦しましたが、今なお脳裏に残るのは、幾たびの戦争はもとより、やはりあの美しい海、大自然のすばらしさ、それに素朴な人々の人情でした。私は田舎者で井の中の蛙、しかし空澄み水清き自然の中に生きる喜びにひたり、自分ながらに一日一日を暮しております。
自然は一度毀すと再び戻らないのが摂理だと思います。
（蛍）孫を背に　妻と二人で初夏の風　　池上隆一
✻ちなみに昨年の山ざる誌第21号の写真は春日町国領周辺の風景で村上末吉氏撮影。一昨年20号巻頭写真は氷上町朝阪周辺のスナップと中扉が柏原東山風景で渡辺隆男氏の撮影になるものでした。

統一地方選挙をめざして

参議院議員　足立良平（青垣町）

関東氷上郷友会の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素から私共の活動に対しまして格別のご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昭和三十八年に関電労組の執行委員として組合活動を始めて以来、昭和五十年から十四年間の本部執行委員長時代を含め四半世紀余りの間、労働運動の道を邁進してまいりましたが、平成元年七月の参議院選挙におきまして民社党比例代表候補となり、皆様方の多大なご支援により当選させていただき、今日に至っております。

現在、国会におきましては国政全般を扱う予算委員会、郵政及び通信政策を扱う逓信委員会、そして産業及びエネルギー政策を議論する産業資源エネルギー調査会に所属し、色々勉強させていただきながら諸課題に取り組んでおります。

また、党におきましては昨年組織局長に任ぜられ、再生に向けた党の組織強化という重責を負うことになりました。今春の統一地方選挙における勝利が再生への重要な第一歩となるため、現在文字通り全国を駆け回っております。同郷の皆様方からの暖かいご支援を切にお願い申し上げる次第でございます。

故郷を遠く離れた東京で過ごす時間が最近増えておりますが、同じ地で活躍されている郷友会の皆様方と折りに触れお会いし、懐かしい郷土の話などできることを楽しみに、今後とも国政の場で微力を尽くしてまいりたいと存じます。

末筆ながら会の皆様の今後益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

美しき老桜

須原　清（市島町）

五月十九日（'90）午後、第二回目の外泊許可（東京医科大病院）を得て帰宅すると、次のような封書が届いていた。

△

木々の緑が美しい頃となりました。

その後皆様お変りなくお過ごしの事と存じます。

母市原このゑが四月十五日復活祭の日にいとも安らかに

天に召されました。うつし身の暖かい御交誼の数々誠に有難うございました。お知らせと共に感謝を申しあげます。

平成二年五月

杉並区下高井戸四―四十三―二十一

伊藤清磨

知

○　○

毎年　美しい花を忘れなかった
やさしい　老桜を　喜々として
とりまく　元気で　聡明な
幼児達　を　見た。　　そして……

十数年も前からの知り合い（出会いは京都市内の小学校同窓会）であった市原さんが、満八十歳になられた昭和五十八年度の郷友会総会・懇親会（11・5）にお誘いし、大喜びをいただいたのは、まだついこの間のような気がします。（『山ざる』第15号）

年二、三度の文通と、時折りの電話などで故郷を同じうするもの同志（市島町下竹田）お互いにその時々の健康を喜び合ったものです。

本年二月初旬、私の左の挨拶（ハガキ）に対し、別記の返書（封書）があった。

×　×

寒中お見舞い申し上げます。

いつもご留意戴きありがとうございます。

平素はご無沙汰ばかりで申し訳ありません。

昨年は娘一家と同居のための新築が予想外に遅れ、引っ越しも年末となり、新春の賀状も心ならず欠礼してしまいました。不悪ご寛容下さい。

激動息まず、なお波瀾と動乱を孕んだ現下の世界情勢下―まことに有難いわが国の平和と繁栄を感謝しつつ紀元前一四六年経済大国カルタゴ滅亡の轍を踏まないよう、特に各界要路の人々には、絶えざる反省と識見と合わせ、強力な指導力を訴えたいものです。

ご健祥とご多幸を祈りつつ　　敬具

平成2年　二月吉日

×　×

――返　書――

御丁重な寒中お見舞有難度うございました。

何も存じ上げないで、失礼を重ねて居りました。悪しからず御免下さいませ。私も昨年五月から九月三十日まで入院生活を続けて、十月から普通の生活を続けさせて頂いて居ります事感謝で御ざいます。

昨年御許様にお電話をさせて頂きました時この電話は使わ

れて居りませんとの返事で、そのまゝ失礼を重ねて居りました。悪しからず御免下さいませ。新らしいお住いで、お若い方々とのお交りの中でのお楽しみを、心からお喜び申し上げます。

可愛いいお孫様方もいらっしゃるのではないかと、勝手な想像を重ねて居ります。私も昭島に孫ヒ孫達が居りまして、時々小学一年生と幼稚園年中組のヒ孫が電話で〝ヒイバアチャン　ゲンキ　アソビニキテチョウダイ〟と声をかけてくれますので、時々車で一時間位ですので、娘がドライブを兼ねて連れていってくれるのが楽しみです。

昨年、氷上郡の教育委員会発行の〝文化財〟を何回となく読ませて頂いて全々（マヽ）知らなかった文化財に接して、退屈のない毎日を過させて頂いて居ります事、感謝の外御ざいません。

どうぞ、寒さの折くれ〴〵も御自愛下さいまして、お元気で良い春をお迎え下さいます様に祈らせて頂きます。かしこ

後になりましたが奥様にくれ〴〵もよろしくお伝え下さいます様、お願い申上げます。

二月四日　　市原　このゑ

つづいて最后のはがきが……

❀　❀

桜の花の美しい春を迎えて元気で過させて頂く幸を感謝して居ります。

すっかり御無沙汰をして失礼して居ります。お元気な御事とは信じて居りますが失礼のおわびに一筆悪からず御免下さい。私も今年八十八の道を歩ませて頂く事になり私で出来る事を楽しみに時を過させて頂いて居ります。本当に一度ゆっくりお会い出来たら嬉しいなアなんて勝手な事を考えて居ります。どうぞくれ〴〵も御自愛下さいまして、お元気でありますと祈りつつ。ではまた。

三月二十日　　市原　このゑ

須原　清　様

初江さま

須原初江

（須原清夫人）

〝美しく老い〟て行きたいと、常に思っておりますが、大変にむつかしいことだと思います。

今頃の若い者は年寄りと一緒に住むということを嫌うとよく聞きますが、嫌われないように歳月を重ねましても、若いとき以上に身嗜みに気をつけ「老年だから何を言ってもよい」などと甘えているようではいけない。いつも言葉遣いには大

いに気をつけたいものと存じます。そして大勢の人達と共に考え勉強して行かなくては、今の世の中ついて行けないのではないかと思います。

十歳代で読んだ本を三十歳で読み直したとき、考え方がずいぶん変ってきているのに驚きます。同じ答も五十歳代または七十歳代で読めば、昔はなぜこんなことに気がつかなかったのかと意外な発見をいたします。

わたくしの家には十代二十代、七十代半ばの方までお稽古にお見えになりますが、皆様ご一緒でお話をしていても、若いグループ、中間の方、そして六十歳以上の方々等、よく分かれてお話しなさることがございます。そしてまた、若い方々にいろいろ教えていらっしゃる方もあれば、若い方からお考えをお聴きになっている方等いろいろお見受け致します。

幸いと申しましょうか、わたくしには趣味であり仕事であって、しかもそれで自分自身の勉強もさせていただいていることでございます。

利休百首の一つに『けいことは一より習い十を知り十より帰るもとのその一』とありますが、七十歳を過ぎた今も、その一に帰るまでに何年かかりましょうか、出発点を遅れたわたくしには「十」に辿り着くにはまだまだ時間がかかりそうです。

普段、娘とよく話しているのですが、人間学問で伸びるとき、人間的に伸びるとき、お仕事で伸びるとき等いろいろあると思いますが、何であれただ伸びて行くばかりでは、長さだけで、倒れるのも早いこと、やはり根もしっかと張って茎も引き締って行くことが肝心。稲のように稔って頭が重くなったときは自ずと頭を下げて行くようにありたいと願っております。

おこがましくも「先生」と呼ばれる以上は、お弟子さん達より、身繕い立ち居振る舞いはもとより、内面的心配りその他も考慮せねばなりません。

お家元では「稽古場」即ち道場であると申されています。いま、わたくしは、茶道はもちろん、華道の道もともに人間の道であると深く感じます。

それぞれの方が違った環境、従って違った心を持っている。その方々のまとめ役もわたくしの仕事の一つ。小さな和の輪から大きな輪へと繋いで行くのも私の仕事でしょうか。

ひとりおけいこに励んでいるとき、また何人かと勉強しているとき、それぞれの立場を守りつつ、和の精神、心の裕をもって、ひたすら楽しませていただけることを、こよなく感謝しております。

この感謝の日々のうちに〝美しく老いる〟秘訣があるのでしょうか。

合掌

思い出すままに

森下千壽子（市島町）

白髪を　そめて羊の　年迎う

私もこの一月で還歴を迎えました。

例年、十二月も半ばを過ぎてまいりますと、年賀状のことが気になりだし、元旦には届くようにしておきたいと思いますが、結局、いつもの通りせっぱ詰まって葉書の前に坐ります。今年も、年賀状を出せるという幸せを喜びとしながら齢を重ねてまいりました。六十年の来し方を振り返り、行く末に想いを馳せつつ筆をとります。母は還暦を祝うことなく五十歳余で亡くなりました。わが身を粉にして働き、他人さまのお役に立てることだけを喜びとして生きた人でした。私も母に倣ってこれからの人生を、温い心を他人さまにお返ししながら生きたいと思っております。

初夢に　還暦知らぬ　母の影

蓼食う虫も好きずきとか申します。主人は背の高いのが好みのようで、自分より大きな私を妻にいたしました。細やかな気配りに欠けている私に「田舎の姉さん気が效かん」とか、「気楽トンボだからスクスク伸びられたんだなァ」と、憎まれ口をたたいて喜こんでおります。〝スマート〟なのは遺伝ですが、総身に知慧が廻りかねているのは、六十年の生活環境によるものと思います。

私は鴨ノ庄村喜多の出身です。村のまん中を流れる小川は、日本海に注ぐ由良川の源のひとつになります。ねこ柳が芽を吹き、蛍が飛び交う土堤の両側は、米と麦のとれる二毛作の田で、刈り入れの季節になると黄金（コガネ）の穂が波打ちました。大きな水車がゆっくりと廻っていてコットン・コットン米を搗いていました。春の山桜・夏の緑・秋の紅葉・雪景色と四季それぞれ装いを新める山は、山腹を流れる雲で、その日の気象を知らせる大事な役目もしていたのです。夕暮れには山寺の鐘が一日の終りを告げ、春の小川はサラサラ行くよ、の唱歌さながらの村でした。私は生まれてから結婚するまでをここで過ごしました。私が郷里を出た後、村は変りました。小川の堤はコンクリートで固められ、水辺に下り立つこともできません。詩情豊かな田圃は区画整理で画一的な大田になり、人手に代ってトラクターが動いています。山の中腹には、高速道路が出来て車が走り、陸橋が村を横断しています。村の名前も町村合併で市島町に変りました。帰郷のたびに昔の姿を失っていく村に、時の流れを感じております。

昭和ひと桁生まれの私は、戦時体制の下で育ちました。「欲しがりません勝つまでは」が国民の合言葉になっていた時代

です。太平洋戦争に巻き込まれてからは、着る物も食べる物も次第に無くなり、自給自足で解決しなければどうにもならなくなりました。鶏の卵や肉は貴重品でした。山羊を飼って乳を搾り、小川ではシジミや魚も採りました。アンゴラ兎を飼って毛糸に紡ぎ、綿を栽培して「繰りこ」の暖い蒲団も作りました。一度も手を通すことなく、作業着や蒲団布に変った母の着物もあります。兵隊にとられて人手のなくなった家へは、勤労奉仕に出向いて田畑で鍬を振りました。都会に住めなくなった人達が、この村にも疎開してきました。お寺や部落の公会堂では、学童の集団疎開を引き受けました。人々が必死に生き抜いた時代です。しかし私はこの大戦について、いまひとつ他の人よりも受け止め方が弱いと思っています。当時、わが家は珍らしく非戦闘員ばかりで、出征兵士を出さずにすみ、また自然の恵み豊かな村にいて、空襲や戦災等の身の危険にも遇わず、本当の悲しみを知らずにすんだからだろうと思います。

こんな山奥の村でしたから、小学校へは往復四キロ、女学校、高校へ行くようになると、最寄りの市島駅まで往復六キロを歩きました。道すがら往き交う人は少なく、山・川・草・木に語りかけながら歩いたものです。戦局が厳しくなってくると、学校も学生も勉強どころではなくなりました。下級生の私達は毎日鐘ヶ坂の山へ薪を運び出しに通い、山から学校までの道のりを女学生の人海戦術で運搬しました。全くよく歩きましたから、モータリーゼーションの進んだ今日でも、歩くことは少しも苦になりません。山では休憩時間に、フォークソングを教えてくださる先生がいて、ひそかに好意を持ったことがありました。都会からは、垢抜けした転校生が次々と入ってきてよい刺激にもなりました。戦後の学制改革で、女学校と中学校が共学の高校として、新しく発足するなどイレギュラな時代でした。

一方家庭では、その後、裁判官の道を歩むことになる兄が真剣に勉強していました。その姿を見ていて、勉強はセにゃならんものと思うようになりました。私も大学に進んで語学を勉強してみたいと思っていました。しかし、兄から「語学は仕事の手段には必要だが、とてもネイティブにはかなわないよ」と、言われたことが進路を迷わせました。母は、できれば医学の道で人の役に立てばと思っていたようです。私の村は無医村でした。病人が出ると遠い隣村の医院へ駆けつけなければなりません。往診を頼みましてもよほど重い急患でない限り、午後から、人力車に乗った医者が、村落の道順に戸別に宅診をしながら廻ってくるのを待つよりほかありません。それで母は、五人の子供のうち一人は医者にしたいと思うようになっていたようです。ところが、父兄会に出席した母は懇談で先生から、医者などになると嫁の貰い手がなくな

るかも知れない、とのご指導を受け、進路のことは私に任せるようになりました。私自身は、特別な使命観とか、はっきりした目的を持っていたわけではありません。結局、家庭に入っても「つぶし」が効くという理由で、奈良女子大の家政学部に進学しました。それまで黙ってみてくれていた父の勧めだけに、素直に従うことにしました。

大学時代は寮生活を送りました。部屋割と呼びますが、学年や学部は考慮されずに抽籤で決められました。十二畳の部屋に四人、部屋の四隅にそれぞれが机を置いて陣取ります。寮舎は校舎の外れにあり、廊下伝いで往来ができたので、雨の日でも傘の要らぬ便利さがありました。共同風呂は初めて体験することで、入り方の分らなかった初日は、パンツを脱いで入るのかどうかを案じながら浴室へ行ったものでした。浴槽が大きくてまたまたびっくりしました。食事は寮生が自分たちで作ります。十四・五名ずつで一つのグループを作り、当番の日には一人で自分のグループ全員の分を準備します。献立、買物、調理と馴れないことばかりでした。みんな台所は苦手でしたので、手間のかからないカレーライスなどを作りたがりました。まだ配給米の頃で、どんぶり一杯のご飯と少々の総菜がすべてでした。少しでも大盛にありつこうと、合図のベルを待ちかねて食堂へ駆けつけたものです。一つ屋根の下で、寮生は他人を侵さず侵されず、を守りながら、学習タイムとプレイタイムを上手に管理していました。

一歩門を出て街を歩きますと、ちょっとした邸宅には、必ず玄関前にオフリミットと表記した立札が出ていました。進駐軍将校が接収して住んでいるのです。市内には米兵専用のダンスホールも幾つかあり、そこからは賑かなバンドの音が流れ出てきました。奈良での学園生活は、二十五年から二十八年の四年間です。二十五年には朝鮮動乱が起きて、国内産業が立ち直るきっかけになりました。いつの間にか駐留軍もいなくなり、市街は次第に明るく変り、戦災を免れた古都へ、多くの人々が訪れるようになりました。車に乗って「シャボン玉」「お猿のかごや」など、可愛い童謡を流しながら一日、県下を走り廻った洗剤宣伝のアルバイトのことなども思い出されます。

卒業後は郷里に帰り三年間、福知山高校で教職に就きました。三十二年に結婚し、その時から東京暮らしが始まりました。サラリーマンの主婦に収まり、二人の息子を育てながら、主人に甘えて気儘に暮しておりましたので、私の気楽トンボはなおらなかったようです。

六年前から、私達の大学同窓会東京支部で、ボランティアの結婚相談を始めました。阿佐谷の支部会館で、先輩、後輩の方々と月に二回、第二、第四土曜日の午後に行っております。皆様に教えを授かる毎日ですが、少しでもひと様にご恩

返しができればと思ってお手伝いさせていただいております。

節分の　光の中に　跳ぶ雀

ふるさとは遠きにありて

野村　節　三（山南町）

丹波は私にとっては、遠くて近いふるさとである。長年住み慣れた東京をあとにして、〝みちのく〟の三陸へ家族ともども移り住んで、早くも十四年、ふるさとを離れてから三十九年が過ぎた。「光陰矢の如し」といわれるが、過ぎし日の悲喜こもごもの思い出はいつまでも心に刻まれている。

思えば、私が丹波で生まれ育ったあの頃は、戦中、戦後の正に日本の激動の時代であった。私は昭和九年、当時の氷上郡久下村に生まれ、日中戦争（支那事変）の末期、日本がその解決を南方への進出に向けようとしていた昭和十五年四月、久下尋常高等小学校へ入学した。この年が明治四十年以来、三十四年間続いた六年制尋常小学校の最後となった。当時は高い石柱と鉄扉の立派な校門で、木造二階建の校舎はいかにも小学校らしかった。稲穂の校章の校旗と、「いわれもしるき久下川の」で始まる校歌は今も強く印象に残っている。どこの小学校にも必ずあったのが奉安殿と二宮金次郎の銅像であった。小学読本では「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」。修身では「キグチコヘイハ、シンデモラッパヲ、クチカラハナシマセンデシタ」。などを記憶している人も多い。

翌昭和十六年四月に小学校は国民学校と改称され、ますます戦時色が濃くなっていった。この年の十二月、あの真殊湾攻撃が発端となって太平洋戦争（大東亜戦争）に突入した。その後、終戦までの五年間、私達の世代は「一億一心、火の玉だ」、「ほしがりません勝つまでは」という戦時精神の昂揚の中で、「教育勅語」を範とした小国民として、ただひたすら戦地のことを思いながら、銃後の守りと食糧増産のための勤労奉仕と国体精神に基づいた授業に明け暮れた国民学校時代を送ったのである。

しかし、当時このような非常時にあっても、そこはやはり子供であった。戦局が日増しに悪化し、数年後に日本だけでなく、世界の歴史が変る大事態がやってくることなど知るよしもなかった。山や田畑の手伝いの合い間は、日が暮れるまで久下の野山を駆け廻って遊んだり、篠山川で水泳や魚取りに夢中になっていたあの頃のことは、なつかしい思い出の一ページである。とはいっても、大日本帝国の小国民、いやが上にも戦争へ戦争へと駆り立てられたことは皆同様であった。そうしている間も特攻隊の若い命は南海の空に散っていった。私も当時、海軍航空隊に憧れた一人で、畔路を歩きながら「若

鷲の歌（予科練の歌）」を声張り上げて歌っていた。

昭和二十年になって、米軍機B29により本土空襲が激化した。燈下管制下に「大本営発表、敵機は紀伊水道を北上し……」というラジオの声は聴き慣れていた。空襲警報のサイレンとともに児童は防空頭巾をかぶり、防空壕へ飛び込んだ。米軍の沖縄本島への上陸、次いでドイツが降伏した頃には、一般人も竹槍で本土決戦に備えていた。そして、遂に来るべき時が来た。広島と長崎に相次いで原爆が投下されたが、誰一人詳しいことは知らなかった。八月十五日、隣保の人達と雑音混じりの「玉音放送」に聴き入った。降伏とか敗戦という実感はなかったが、大人は皆泣いていた。六年生になって中学受験が迫っていた、悲しくそして空しい夏の一日であった。

戦後の混乱と貧困生活が始まった昭和二十一年の春、柏原中学校へ入学した。入学の喜びも束の間、わら草履や冷たいゴム靴で、買い出しの人達と一緒に、満員列車のデッキに摑まりながらの通学が続いた。主食はすべて代用食で、満足な物は何も無かった中学校時代であったが、従兄から譲ってもらった柏の校章がついたカーキー色の帽子と白い肩掛けカバンは中学生気分を出すには充分であった。

外地からは続々と引揚船が舞鶴港へ帰ってきた頃である。

中学二年生の時、学制改革でいわゆる六・三・三・四制となり、柏原では中学校と高等女学校が合併され、柏原高等学校併設中学校の生徒となった。この改革によって私達は旧制中学校最後の学年となり、考えもしなかった男女共学が始まったのである。「男女七歳にして席を同じうせず」の時代に育った私達にとっては正に一大変化であった。旧高等女学校の校舎が使用されることになり、私達中学生が校庭に並んだ女学生の列の間へ入って行った時の緊張した気持は今でも思い出す。やがて、その雰囲気にも慣れ、新しい中学校生活が始まった。世界名作全集、冒険小説、探偵小説などを読みあさり、心を躍らせたのもこの頃である。また、空想科学雑誌「動く実験室」も毎号楽しみであった。

昭和二十四年、柏原高等学校に入学した。第二次吉田内閣の頃で、「下山事件」「三鷹事件」「松川事件」などが相次いで起り、世の中は騒然としていたが、湯川博士のノーベル賞受賞のニュースは当時の日本人を大いに勇気づけたものである。高校入学といっても、旧中学校の校舎へ戻ったのである。黒い詰襟に白線入りの帽子、それに朴歯の下駄という高校生スタイルは当時の世相に合っておつなものであった。時代がかった柏原劇場（第三校舎）へもよく映画を観に行ったが、高校時代といえばやはりクラブ活動である。当時の柏高生物班の活躍ぶりについては、担任であられた松山確郎先生の著書「私の中学校・高等学校」に詳述されている。私は生物班、のちに化学班にも入っていたが、ここでの観察や実験、臨海

実習などを通じて、自然への関心がより一層深まった。一方、現在の受験戦争のルーツでもあろうか、大学進学率も徐々に増加し始めたが、当時、全国の高校生を対象に施行された「進学適性検査」には悩まされた。

昭和二十七年の春、柏原高等学校（第4回）を卒業した。日航「もく星号」事件や「血のメーデー事件」があった年である。こうして、戦中、戦後のめまぐるしい変遷の中で、育んでくれた山や川とともに、様々の思い出を残して私の丹波時代は終ったのである。

その後、私も例にもれず、大都会に憧れて上京し、家庭教師のアルバイトをしながらの大学生活を送った。東京では何回か引越したが、とくに阿佐ヶ谷での七年間の下宿生活は今もなつかしい思い出である。

昭和三十二年に大学を卒業後、微生物の研究所へ入り、抗生物質の研究に専念する傍ら、大学でも教えることになった。結婚後、開通間もない田園都市線の青葉台で団地生活も送ったが、その間、家族を伴って渡米する機会を得た。美しいニューイングランド地方のボストンでの留学生活は自分達の人生にとって良い経験となった。帰国後、長い東京生活にも区切りをつけることにして、ふるさとからさらに遠い、この広大な岩手へやって来た、いわゆる「脱都会派」である。

当初はこの北国の言葉や風習の違いに戸惑ったが、「住めば都」でこの土地柄にも馴染み多くの知己も得て、今では三陸人になりきろうとしている。当地へ赴任してから、大学では微生物研究室で魚類原菌の生化学的な研究をしながら、家では二人の息子も外へ出し、妻（藍村藍本、現・三田市出身）と二人きりの静かな生活を送っている。時には渓流で自然の中に溶け込んで、イワナやヤマメも追っている。地理的には遠いふるさとであるが、私には常に丹波と岩手が重なり合って、その距離があまり感じられない。

それは、交通の便もよくなって、年に数回は仕事で東京や関西方面へ行き、丹波へも寄ることもあるが、何よりもこの三陸の四季折々の大自然の景観と産物、それに、この地域の人々の心が、丹波での昔の夢を今再び現実のものにしてくれているからであろう。「丹波の山ざる」が東京で芝居をしてから、縁あってこの三陸へ移住して来たことを今では幸せに思っている。

「冬来りなば、春遠からじ」。久しぶりの大雪で白一色になった北上山系の山々と、波静かな越喜来湾（おきらいわん）を窓から眺めながら、遙かなふるさとと遠い昔に思いを馳せ、やがて来る春の息吹きを心待ちにしている昨今である。

☆

ふるさとは人生の友

伊田光男（柏原町）

私が柏原高校を卒業し、東京の大学に入学するため、故郷柏原をあとにしたのは、昭和四十年のことでした。中学生のとき、修学旅行で初めて東京に来て以来、東京は我が青春の憧れとなり、加えて昭和三十九年の新幹線の開通、そして東京オリンピック、ちまたには東京、東京の歌声が流れ、いやおうなく憧れは、現実のものとなったのです。

昭和四十一年一月には、父が永年愛し勤務していた柏原化成㈱（現在は呉羽プラスチック㈱）を退職したことなど諸般の事情から約二十年住み慣れた柏原町から現在の神奈川県大磯町に転居してまいりました。

ここから家族各々の第二の人生がスタートしました。父は大磯町の隣町、平塚市にある老舗「大海老㈱」で、社長が幼馴染であったことから嘱望されて、停年後の人生を第一線で昨年の三月（八十二歳）まで勤務しておりました。

「住めば都」という言葉は、決して容易ではなく、深い意味があることを知ったのです。知らない土地にあっても誠意をもって人間と接すれば、いつかは必ず人は理解を示してくれるという努力の大切さを実感として味わい、日々希望を抱いて、人との出逢いに幸せを感じながら、家族各々が精一っぱい過ごしてまいりました。早いもので、もう二十五年が過ぎました。お陰様で高齢になる両親も健在で、子供三人に恵まれて七人家族、共々健康で暮らしております。

故郷の思い出は、語りつくせないほどあって、語るときには心が熱くなり、つい自分に酔ってしまうものです。

当時、住んでいた柏原町新町の柏原化成社宅、そこは私が生まれた時から高校時代を過ごした思い出の宝庫です。

崇広小学校の毎日、雄々しく迎えてくれた崇徳門、柏原中学校に行く途中のうるおいをくれた大正池、柏原高校の近くにある由緒ある風格をもった木の根橋、どれもその情景を思うとき、その時代の懐しさが込み上げてきます。

遊びといえば、新町川での釣、澄んだ川には、ふな、もと、もろこの行列。山では小鳥とり、とりもち、かすみ網、目の前にとまった、めじろ、えなが、おなが、しじゅうがら、小学生の頃の一番楽しかった思い出です。

春には、れんげの花が咲き乱れる田んぼで相撲などをして遊んでいるとき、福知山線を走るＳＬに手を振ると、機関士さんが汽笛を鳴らして力いっぱい手を振ってくれた、あのやさしくきれいに見えた白い手袋。

夏の夜には、飛ぶ蛍をなたねの枝で作ったほうきを持って夢中で追いかけたもの。故郷丹波は思い出の泉です。

私は現在、平塚市役所に勤務しておりますが、仕事中にも知らない間に丹波の話をしていたり、飲みに行くと、機会あるたびに松茸を話題に、丹波、丹波とピーアールをしてしまう、柏原町の観光係の広報員のようです。

故郷を語る時には、なぜか活気づき、とても幸せな気分になれるのです。

帰ればいつもやさしく迎えてくれる友人がいる。そして思い出がしみこんでいる山や川のある暖かい故郷。丹波柏原をこれからも我が人生のかけがえのない友として生きてゆきたいと思うのです。

故郷に乾杯！

〝花博〟を訪ねて——花・緑・命・心

宮野　近（柏原）

昨年の五月、風薫る『花博』に行きました。かけ足でしたが、広い会場を一周しました。会場は、山、野、街、と大きく分けられていました。全体が緑と花に包まれていて、まさに〝万花繚乱〟の感じでした。水が流れ、花が咲き、青葉は繁り、鳥が唄う、自然のすばらしさが集められていました。

宇宙には無数の星がありますが、私たちの地球だけが青く輝き、水と空気に包まれて「花」と「緑」と「命」と「心」とが存在する星です。宇宙で唯一のパラダイスと申せましょう。かけがえのないこの美しい楽園を、私たちは未来永劫、子々孫々に伝えていかなければならない義務を痛感した次第です。

花と緑との大自然に改めて感動し、「命」のすばらしさを分かち合える「心」を養成することにこそ、花博の意義があることを確信しました。

花博は「人間と自然の共生」がテーマになっています。ところが今日の人類社会は、海洋汚染、土壌の破壊・荒廃・砂漠化、森林伐採、水質汚濁、生物の死滅……等々、かつてなかった危機に直面しております。今、私たちは自然に対する畏敬の念をとりもどし、自然の美しさと、大自然の摂理に対する感覚を呼び醒まさなければなりません。そしてこの大自然を守り、いつまでも存続させていく意識の涵養こそ大切なのではないでしょうか。

国際展示館群と名画の庭を観賞し、「命の海」に面したインド・レストランでカレーを賞味しながら、「花・緑・命・心」について想いをめぐらせました。「命の海」の中央から噴水が折りなす虹の美しさが、今も心に残っています。

石生の思い出

勢　正彦（氷上町）

氷上町石生出身の私は幼少の頃よりじーっとしているのが嫌いな方で、近所のわんぱく連中といつも田んぼや山の中を走り回って遊んでいました。まさに〝山ざる〟のような日々でした。

東小学校裏の城山など大変懐しい所です。それだけに帰丹しますと昔よく遊んだ山々や田畑が「オーよく帰って来たなぁー」と声をかけてくれるような気がします。また当時一緒になって遊んだ竹馬の友の顔も今だにはっきり憶えています。石生の街も様変りしてきていますが、昭和三十四、五年頃、私が東中学校に上がった頃でしょうか。石生の商店街もそれなりに活気もあり皆んなでもり上げていたように思います。

夏には川裾祭、年末の大売り出し、風にのって遠くから聞こえてくる拡声器の歌や客寄せの声、街をねり歩く踊りや、仮装行列に見る町内のおじさん、おばさんや、また私の両親を見つけた時には嬉しいやら、恥かしいやら、近くの子供仲間とキャッキャッいいながら、我が石生の街を時間たっぷりに歩き回りました。牛市の共進会があった時も、初めで最後と思われるサーカス小屋ができ、学校から見に行ったり、自分の小遣いで物めずらしく何回も見に行き、舞台に上ってさっうそうと曲芸をやっているサーカスの子供と仲良しになり、またそれが自慢でした。サーカスのさるが脱走し大師山に逃げたのを私が探して大層自慢に思ったこともありました。石生の秋祭りに小学一年の私ら四人の少年が太鼓（山車）に乗るために約一ヶ月程かかって青年団の人達に歌と太鼓のバチさばきを教えてもらい、練習が終った後のお菓子を食べるのが楽しみで毎日練習に行ったものです。祭りの当日化粧をしてもらい、きれいな衣装に身をつつんで声がかれんばかりに歌い、二日間石生の街をねり回りました。その太鼓（山車）の回りを沢山の子供達仲間がもの珍らしそうに取り囲んで、これまた一緒に石生の街をのどかに付いて来てくれました。そして化粧をした僕を見る目も違っていました。姉や妹達もその僕のことをしばらく自慢にしていたようです。

そのようなのんびりとした丹波の片田舎の人情味あふれた石生に育った子供の私は、もう一つの目でいつも何かを見ていました。それは山に囲まれた石生の空を東から西の空へ、またその反対方向に一日一～二度プロペラ機がゆっくりのど

かに飛んでいる風景でした。畑で働いている隣りのおじさんがタバコに火をつけて腰をおろし、その横で私も草の上に座って何いうともなく二人で空を見あげ、ただ飛行機を見ていました。どこまでも青い空に一点のどかに飛んでいるプロペラ機は丹波の片田舎とは違った全く別の世界へひょっとしたら連れて行ってくれる、行けるかもしれない、夢の飛行機でした。

今私は日本航空国際線のチーフパーサーとして乗務しています。飛び初めて二十年、飛行時間は一万時間を超えました。南北アメリカ大陸、太平洋、オーストラリア大陸、東南アジア、中近東、ヨーロッパ、中国、ソ連と世界の空を一心に飛び続けた二十年はほんとうに早く感じました。その間に二度、特別機の乗務を命ぜられたのは丹波人として誇りに思っています。

それは昭和四十九年、当時の田中首相のヨーロッパ訪問、昭和五十年秋の昭和天皇・皇后両陛下の御訪米でした。

田中首相のフライトは、東京―モスクワ―パリ―ロンドン―フランクフルト―モスクワ―東京でした。シベリア上空で総理が「肩が凝った、誰か肩をもんでくれる者はいないか」と声をかけられ、大柄な私が指命されました。総理の肩をもみながらいろいろと親しく話しをして下さり、周りからまるで親子のようだねと、機内もなごやかな雰囲気でした。昭和天皇の訪米時は、両陛下の乗られる機はお召機と呼び、座られる専用室は御座所といわれ、一部限られた者しか入れません。宮内庁より両陛下に接する者は限定するとのお達しがあり、名誉なことに私は御座所専用の乗務員に命ぜられ両陛下のお世話をすることになりました。東京―アンカレッジ―ウイリアムスバーグ―ワシントン―ニューヨーク―シカゴ―ロスアンゼルス―サンフランシスコ―ホノルル―東京と、十五日間の旅でしたが、機内はいつも両陛下の仲睦ましい、和やかなお話し、また私達乗務員の労をねぎらって下さる優しさ、お心遣いには心から尊敬の念を感じました。飛行機の窓から見えるアメリカ大陸の都市、山や河などにもたいへん興味をもたれました。特にグランドキャニオンでは、機長が低空で旋回をして陛下にその地形をよく見ていただいたものですから、植物や岩石の専門的な質問もあり、答えるのに大変苦労しました。後日皇居に乗務員全員が招かれ、機内の思い出話しなど楽しそうにされ、またよく憶えておられて一人一人にお声を掛けて下さり、ほんとうに優しいお人柄にふれ、一生の思い出となっています。

今日も日航機に乗って海外に出ますが、私の心の中にはいつも丹波の美しい山々や土のにおい、懐しい人達の顔があります。遠く離れれば離れるほど、私の丹波は心の中で大きくふくらんできます。故郷はほんとうに有難いものです。

橋本先生と柏原

菊池洋子（氷上町）

平成三年が明けてすぐの一月四日、柏原に行って来ました。実に三十年ぶりのことです。柏原に居たのは数日間、気にしていた宿題をやっと仕上げた時のような安堵感を覚えました。それと同時に、何か夢の中の出来事だったような気もしています。

高校時代―私達の頃はちょうど戦後の教育制度の変り目の時で、入学した時は女学校、途中で併設中学校、卒業の時は高等学校とめまぐるしい変りようでしたが、女学校から男女共学の併設中学になったときに、女学校の音楽の先生が辞められ、新しい音楽の先生が赴任して来られました。

その方が橋本喬雄先生です。芸大を出られた、若くて何事にも情熱と積極性を持って行動される先生のまわりに、音楽好きの生徒達が集まってくるのは当然のことでした。そして〝好楽会〟というクラブが誕生したのです。

柏原に行ったのは、この音楽会の生みの親、橋本先生を囲む会の集まりに参加するためでした。

橋本先生は、髪こそ白くなられましたけれど、昔と少しも変らない同じお顔で、同じお声でおだやかに話され、かつて共に歌った者達がそれに聞き入っている様子、一瞬タイムトンネルに迷いこんだような気がしました。

小さい時から歌はよく歌っていました。小学校や一年だけの女学校の学芸会等で独唱させていただくのはうれしいことでしたが、ただ好きだから歌っているので、それ以外の知識は何もありませんでした。専門に声楽の勉強をするにはどんなことを、どんなふうに勉強すればよいかということを、そして何と多くのことを橋本先生から教えていただいたことでしょう。

もし橋本先生との出合いがなかったら、先生の後輩として芸大に進み、今のように音大で学生を教えている私はなかったかもわかりません。私だけではなく、橋本先生の教えを受け、音楽を天職とした者は他に何名もいます。

柏原の街は私の記憶に残っていたものとは違ってしまっていました。学校にも行って見ましたが、そこでも見覚えのあるものは見つけられませんでした。でも、やっぱり柏原はあのなつかしい想い出でいっぱいの街なのです。

どうしてこんなに長い間ここを訪れることをしなかったのか、自分でもわかりません。でも今回来てみて一つ決めたことがあります。今年はもう一度、ゆっくり柏原を訪ねて見ようと。

柏中・柏女・柏高　今昔

植田憲雄（柏原町）

毎年この日が来ると雪が降るとか。今年も暖冬だと言っていたのに、今朝になると雪の嵐である。厄除大祭の日である。但丹一の祭礼である。昔、柏原高校の陸上競技部の生徒をつれて、神戸の新開地通りを歩いていたとき、生徒の一人が思わず「厄除さんみたいや」と言ったのを思い出す。普段は静かな柏原の町もこの日だけは確かに神戸の元町や新開地並になる。参道も一歩一歩しか上へ昇れない。三重の塔の傍にある鐘も、この日だけは絶えることなく鳴り響く。鳥居から柏原高校へ続く川沿いの道（昔の通学路は運動場の拡張で寺院のところで行き止まりになっている）は植木屋さんの花樹や果樹が見事に勢揃いする。古市場、本町、石田、下町、上中町の通りにはここ何十年間も変わらない出店が並ぶ。少し変わってきたのは、以前は柏原駅を中心にした人の動きと賑いであったのが、交通手段の変化によって本町から下町への方向に繁華街が移動しているくらいである。昔の柏原中学ではこの日に上級生と下級生の権力（勢力）交替が行なわれる。それまで忍従の生活を強いられてきた四年生が最上級生の五年生にお返しをするのが礼儀であったとか聞かされたことがある。私たちの時代は戦争と終戦でそれどころではなく、生きることと食べることに精一杯で厄除祭も低調であったように思うが、それでもその伝統的な行事はあったようである。現代の高校生は大学合格祈願を絵馬に託して真剣に神頼みをしているようである。中には男女仲良くそっと手をつないで参詣しているカップルもある。昔の中学生と女学生であれば即刻停学くらいは食らっていたかもしれないが、今は教師の方が一瞬ハムレットの心境になってしまう状況である。

過日丹波新聞に関東氷上郷友会の「山ざる」への写真の募集が掲載されていた。私も皆さんが幼少年期を過ごされた懐かしい小・中・高の学校の変貌でも送らせていただこうかなと思っていたやさきに、宮野君からこの原稿依頼があった。「以心伝心」とはこういうことなのかなと縁の不思議さを感じながらペンをとっている。そのとき宮野君が、「厄除さんもあって忙しいでしょうが……」と言われたので、こんな書き出しになってしまった次第である。

郷友会の皆さんの丹波での学校時代のノスタルジアをすべ

て癒すようなものは到底書けないので柏原高校を中心にした氷上郡の高校の現状を報告させて頂いて責めを果たせてもらいたいと思う。

皆さんもご存じの通り、氷上郡の高校教育は現在柏原高校、氷上西高校、氷上高校の三校で行なわれている。しかし、郡内の中学卒業生全員が三校に収容されている訳ではない。いろいろな目的を持って県立の篠山鳳鳴、篠山産業や有馬高校などに進学する者もいるし、昔と同様に福知山の私学（福商・淑徳・共栄など）に入学していく生徒もかなりある。郡内の三校はそれぞれに特色を発揮して教育効果をあげている。氷上西高校は普通科高校であるが小規模校（各学年三学級）で生徒と教師の親密度を生かした人間教育を通して個性の開発の面で大きな成果をあげている。主に青垣町や氷上町北部の出身の生徒が多い。氷上高校は従来の農業科の上に食品加工科、生活科や商業科を加えて、各学年六学級全校生徒数七百五十名の中堅職業高校として地域から絶大の信頼を受けている。特に女子バレー部の活躍は「氷上」の名前を天下にとどろかせてくれたことは周知のとおりである。今春も東京での選抜大会に兵庫県の代表として出場することになっているので盛大な応援をお願いしたいものである。

さて、柏原高校はご存じのように県下でも有数の名門校として百年に近い伝統の重みを維持しながら新しい時代への俊英の輩出に鋭意努力を続けている。現在の生徒数は各学年十一学級で、総数千五百名というマンモス校であるが、文武両道に優秀な成績を挙げられるのはやはり歴史と伝統の然らしめるところであろうか。この三月に卒業する生徒が高校四十三回生となる。私たちが柏中四十五回生で、柏中は四十九回で終っているが、終戦直後で学制改革の頃は卒業回数が重複している（四十六回と四十七回は同級、四十八回と四十九回と高一回生は同級生）ので、実質的には四十七回で旧中学校は終っていることになる。とすると、高校も中学校の歴史とほぼ同じ年数を経てきたことになり、感無量のものを覚えるのである。百周年（平成九年の予定）はほぼ柏中五十年プラス柏高五十年の輝かしい大エポックを祝うことになる。

今年の卒業生で柏中・柏女・柏高卒業生の総数が実に三万人の大台に乗り、三万九十九人となったのである。兵庫県下の県立高校では最高ではないかと思う。数が多いのだけが自慢ではなくて、この三万人の卒業生一人ひとりが全国各地で国家社会のために素晴らしい活躍をしていただいていることに誇りを感ずるのである。政界、財界、学会をはじめ、あらゆる分野での柏原高校の先輩たちの活躍ぶりは枚挙にいとまがないので、関東方面のことは既にご承知のこととして、身近なところのことを二・三ご紹介することにする。

兵庫県政の中にあっては、行政職員約一万人のトップの座

に高校六回の芦田弘逸審議監（これ以上のポストは副知事か知事しかないそうである）がおられ、数名しかない部長職には十倉嘉之労働部長（高校四回）が、また県人事委員会には荻野賢治委員長（高校三回）の顔が見られる。このほか県庁内には柏原高校の課長・副課長がきら星の如く輝いておられて、県会議員の村上旭氏（中四十六回）も庁内を大手を振って歩けるそうである。昨年も、県内の県立高校の校長や教頭先生と教育委員会の指導主事で柏中・柏高出身の人に集まってもらったところ実に五十人の人が集まって、驚いたり喜んだりしたものである。教育委員会事務局の体育保健課に行くと、藤本幸男課長（高校四回）と広瀬勝一副課長（高校9回）が机を並べて迎えて下さる状況である。最近、高校卒業三十周年記念大同窓会が毎年開催されるようになって、卒業生の皆さんが民間企業でも大活躍をされていることが明確になり本当に頼もしい限りである。昨年は、高校十二回生の三十周年であったが、その中には粕谷紀美子さんのようにシンガポール一と言われる大会社を創立し経営しているような人もいて頼もしいと言うよりその頑張りに感動を覚えるのである。地元に残っている人達の中には、家業の酒造業を、木材業を、製茶業を、はたまた料亭などをますます繁盛させている人も多い。また、流通業など新しい企業を創設して地元の発展に大いに寄与している人も一人ひとり名を挙げればきりがない

ほどである。丹波地方の行政や教育のリーダーとして地域の活性化のために大活躍の人もこれまた数多く喜ばしい限りである。

しかし、地元に残っているもの以上に「柏原」を後にされた皆さんが、なぜこのように成功発展されるのか嬉しく思うと同時に不思議でもある。丹波の人間はそれほど優秀な素質を持っているのだとも思いたい。私は教師の晩年に、「国際理解教育」や「帰国子女の教育」といった分野で活動させていただいた。その中で、異文化の中で生活することはその人間にオリジナリティを確立させ、自信を養うものだといったことを知ったり自分自身も体得したのである。田舎で幼少時代を過ごされた皆さんが都会という異文化の輪の中に入り、協調しながらも自分を主張し、それを実践し、特別扱いを拒否し、甘えを捨てて、「郷に入っては郷に従う」努力を必死でされてきて今日の日の栄光を獲得されたものと思うのである。このことはこれからの丹波の若者にはしっかりと教え込まなければならないと思う。

柏原高校では現在、アメリカのケント・メリディアン高校や西オーストラリヤ州のオーシャン・リーフ高校と姉妹校提携を結び、短期・長期の生徒の交換事業を始め教師の交流も行なっている。そのほかにも、コンピュータ教育やボランティア活動などを推進し、激動する二十一世紀の国際化・情報化・老齢化の時代に対応できる人間の育成に全力を挙げている。そこには、世に言う「無気力症候群」なる得体の知れない人間は出てこないと確信するのである。

柏中一回生の記念植樹と言われる大樟樹も、女学校（現在大手会館）の玄関にある貝塚イブキの古木も樹幹はますます太り茂みはますます増している。あたかも柏高の輝かしい未来と、郷友会の皆さんのご健勝とご発展を象徴するかのように。（写真右は旧柏原高女跡、左は柏原高校のくすの木）

私のクエスト

吉田素子（柏原町）

丹波の里は、「源氏物語」の世界のようだ……と、ここ数年思っている。

谷崎潤一郎の「源氏物語」を高二の夏休みに全巻読んだ。何のことか全くわからないままに。その同じ装丁の本が近所にうず高く積まれて捨てられているのを発見した。私は思わず懐かしさにかられて、いく冊かを家に持ち帰り読み始めた。

二十四時間体制の大都市東京渋谷駅前の雑踏に慣れてしまっている私は、ほんのつい最近まで、地球上にはデンキもなければ、ラジオ、テレビもなかったことに思いあたると、と

ても奇妙な思いに取り憑かれる。「夕顔」「須磨・明石」「浮舟」などなど。キット人々は月の光に一喜一憂して歌を詠み、虫の声を聴いては季節の移ろいを繊細に感じていたのだろう。

そこには自然の神秘もあれば、人間も今よりきっと不可解で「奥ゆかまほし」存在ではなかっただろうか……。

萩の花が咲きみだれる坂道
枯草を燃やす野中の白い煙
人影のない霧深い細い道
深く茂った山際の草むら

「一木一草」という言葉がある。ふる里では森羅万象が何かの思い出につながっていく。

何の不満もなく、両親に愛されて歳月を重ねていた日々に、私が抱くようになった一つのあこがれは、八幡山のふもとにあった柏原劇場で観た洋画の世界だった。

「ローマの休日」「戦争と平和」などの洋画を観た時の〝憧れ〟というものは、いったい今の何に例えればよいだろうか！

この世のものとは思えないまでの美しい女性。気の効いた会話のやり取り。絵のように素晴しい風景……。

〝憧憬〟という言葉が許されるならば、まさにそれであった。もしこのような世界がほんとうにどこかにあるのなら、この目で見るまでは死ねない……と秘かに思った。

大学へ行き、社会人となって、いつしかそんなあこがれは忘れさった。毎日の生活の繁雑さ、現実というものの厳しさ、または退屈さ、自分の可能性に対する挫折とか妥協といったもろもろのもの。加えて海外渡航が自由化され、外国のものは街にあふれ、高度成長まっしぐらの日本となった。

機会があって「世界一周」旅行を二回もしてしまうことになった。それは特に待ち望んで行ったというような劇的なものでなく、物事の成り行きともいってしまえるものだった。

それでも何かと物めずらしい海外旅行の間に、私はセッセと絵ハガキや写真を柏原の両親に送った。日本語を話したい欲求を満たしてくれたし、一歩も柏原を出たことのない母親へのせめてもの〝みやげ話〟になった。

時はたち、私の子供も大きくなった頃、身内の一人が癌という不治の病で入院した。

死ということに直面したことのなかった私は、胸が潰されるようなつらい気持を抱いて新幹線を往復した。

見舞を繰り返しているうちに、私自身が肺炎で入院するという不覚をとってしまった。オロオロする母を目の前に、私はやり切れない絶望の淵をさまよっていた。

柏原病院はその昔、結核療養所といった。

センチメンタルな中学時代に患者さんに花を届けたっけ。

「あそこを見て！」病室の一人がいった。

中庭を隔てた別棟の病室で、若いお医者さんたちが急にあ

わただしく動き始めた。お医者さんたちは交代して一時間ほども人工呼吸を続けていただろうか。やがて入ってきた年配の男性に深々と頭を下げて出て行くのが見えた。

その年配の男性は人がみているとも知らず、窓際に寄ってきて、メガネをはずし、手の甲で涙をぬぐった。

そんな病院で私は、光源氏に会ったように思った。イヤ、あえていうならば、薫の君だったかもしれない。

彼は長身で、つぶらな瞳の若い医師だった。白衣を風になびかせて何回かやってきた。手短かに、流暢に、的確に指示をして、去っていってしまった。その気ぐらいの高い態度、なのに短かい言葉の中に、やさしい気くばりが感じられる。

「まあ、この人は私を守ってくれるんだワ！」

この時の私の驚きは、洋画を観た時の憧憬にも決して劣らぬものだった。

「ナイチンゲール症候群？」

何とでもいわれよう。若い医師は私と同じ大学の出身とか……。その若々しいひた向きさの中に、二十年前の私自身を見ていた。イヤ、見たかったのだ。

「前途洋々たる青春!?」

そんな甘いものでないことは承知している。まだかけ出しの医師が間違いのないように、マニュアル通りに必死に業務を遂行していたのに過ぎないのかもしれない。けれど私は、その二十年の隔りの中に、返らないものを自覚したのだった。

「私は何をしたの？、何をしたの！　何をしたの!!」

「充分色々好き放題生きてきたのではないの……」

心配性の母の声がこだまとなって返ってきた。幾度となくいい聞かせるかのように。

私の息子は東京生まれの東京育ちだ。キット駅前のファーストフードの店が行きつけの場所になり、渋谷の繁華街が「一木一草」になるのだろう。

私はいつまでも若々しく、自分の「あこがれ」を追求して生きていきたいけれど、「あこがれ」が持ちにくくなった今は、

子供には夢を与えてやらなければ、
つれあいにはいたわりを
年とった親には安心を与えてやらなければ
周りの人間には、幸多かれと手伝ってあげなければ……
と年相応のことを自然と考えている。

人の立場はいろいろ違う。その表現の仕方も微妙に違う。けれども、その根底を流れる幼い頃からの心が変わらない限り、いつまでも心にあこがれを持たせて下さいと、ふる里の「一木一草」に祈りたい。

田んぼに、むせかえるように咲いたれんげの花
土手のふちに可れんに花びらを広げた青い小さな大ふぐり

風に光る葉っぱをなびかせているのっぽのポプラ
柏高の朝礼台のわきの桜（今も春になると朝日に輝いているだろう）。

いつまでも、絶えることなく、あの頃の「あこがれ」を持たせて下さいと祈りたい。たとえ実現性のないことのように見えたとしても、追い続けるその過程がしょせん人生なんだから。

細見綾子さんの『風』慶祝五〇〇号

宮野　近（柏原）

拝啓　細見綾子先生、昭和六十一年、『山ざる』誌17号では、私の取材に暖かく応じてくださり、誠にありがとうございました。今回また俳誌『風』五〇〇号記念特集号と近刊の同誌二冊をご恵贈賜り、重ねてお礼申しあげます。

波乱万丈のご生涯、天衣無縫の俳句の数々を拝読し、そこに「丹波の女（ひと）」の強靱な性（さが）を感じました。第二の「田捨女」が、わが郷友会の先達としておられることを誇りに存じます。

その昔、鞍馬山以西を丹波と呼んでいたそうですが、「丹波」とは、赤米がたわわに稔る里、出雲文化と飛鳥文化のシルクロード、京都三千寺の修験場、大宮人の心のふるさと、であり、わが国古来の淳風美俗が今なお脈々と生きづいている、まさにこの世のパラダイスであると思います。

ところが現実は、過疎の山国丹波と在郷の友だちは歎きます。綾子先生どうか不死鳥の如く、丹波の地を潤していただきたく願います。

俳誌『風』は、北は北海道から南は沖縄に至るまで、あまた広範な人々によって支えられている貴重なバイブルであると思います。そこには真の人生を希求して止むことのない、生活に根ざした俳句が、数多く見受けられます。

細見先生は三十五歳で「桃は八重」、四十五歳で「冬薔薇」、四十九歳で「雉子」、六十三歳で「和語」、六十七歳で「伎芸天」、七十二歳で「曼陀羅」、七十九歳で「存問」と、七冊の句集をお出しになっていますが、次には何をお出しになるか、期待に胸ふくらむ思いです。自からを奮いたたせ、全身全霊で俳句一途に励まれるお姿に深く感動しました。

「人はパンのみによりて生くるにあらず、神の国より生ずる神の聖言（みことば）によりて生くるなり」と聖書にありますが、先生の俳句は、まさに未来永劫、人々の心の糧として生き続けるものと確信します。〝混沌とした全さ〟をもって、多くの人々を励ますことのできる稀有の人、細見先生、どうかご自愛ください。　敬具。

天城路や　神々しくも　わさび沢

青春虚実――裏磐梯の別れ――

田中篤郎（市島町）

私の古いアルバムに、いつ見ても気の重くなる、一枚の写真がある。

そこには、沼を背にして斜に爪先立ちにしゃがんでいる中年の和服の女性と、その横に立っている若い洋服の女性が写っている。

それは、四十年もの遙かな昔の学生だったころ、東北を旅していて、裏磐梯を巡っていたとき、道連れになった母娘の写真である。

その写真を見るたびに、秋の日の磐梯山や、紅葉の中の五色沼や湖が浮かんでくるが、その日の暮れに、翁島駅で別れたときの母娘の顔や、その後〝会いたい〟と訴えるようにいってきた幾通かの手紙を受けとりながら、それに応えることなくうち過ごしてきた昔を思い出すと、にわかに黒雲が心に広がり、冷たい風が吹き、物がなしい思いが込み上げてくる。

そして過ぎ去った歳月を空しく数え、〝今も元気にしておられるのだろうか、今もあの地におられるのだろうか〟と、胸につぶやき、込み上げる思いに、いつも胸がふさがれるのだった。

四十年も昔の、私が学生だった、そのころのことである。京都にも世間のひだに隠れて、外国兵を相手にして生きていた、いたましくもかなしい女性達がいた。私はそうした女性たちの中に入って、こっそりアルバイトをしていたのだが、やがて、それにも終りがきた。胸に穴があいた。

その年の秋、東北の小さな町に住んでいた知人を頼って、京都から東北に旅立った。

うっとうしかった一年余りのアルバイトの垢を洗い流す旅でもあった。

知人の家に荷物を置き、猪苗代湖畔の野口記念館や会津民俗館を訪れ、仙台、松島に足をのばすなどして日を送っていた。

安達太良神社の祭りに出会ったころ、裏磐梯の湖や五色沼巡りに出かけた。十一月に入った寒い日だった。

その朝は霧が深くて、天気が心配だったが、五色沼を巡る山みちにかかるころには霧も晴れ上り、秋らしい日和になってきた。

人びとの後について、紅葉した林の道に入っていった。

ひんやりとした林の道は薄暗かったが、紅葉が日を受けて、林の中はほんのりと紅らんでいた。

人びとの話声を聞きながら道を辿っていると、林の切れ目

に、紅葉に彩られた磐梯山が青い空に聳えていた。
その上に、白い大きな雲が一つ、ぽっかりと浮かんでいた。
旅情が胸を刺した。人恋しさに包まれた。
青い水を湛えた沼に出た。人びとが足を止めていた。まだ見たこともない水の色だった。「青沼」と人はいっていた。
〝記念になるだろう〟とカメラを向けてシャッターを押した。
そのとき、前を二人連れの女性が横切った。声が出た。
その声に見返った二人の女性と目が合った。そのうちの中年の和服の女性が引き返してきて、詫びた。
そんなことから、言葉を交わしていると、連れの若い女性も近寄ってきた。二人は母娘連れであった。
好ましい母娘の人柄が伝わってきた。人恋しさも手伝って、親しい人に道で出会ったような懐かしい気分になっていた。
積もる話をするかのように、一緒に歩みはじめた。
お母さんは、やや古風な感じのする人で、面長の色白で和服がよく合っていた。
娘さんは丸顔で、頬が赤く目は少しはれっぽかった。それが可愛いかった。学校を卒えて間もない年ごろのようだった。
三人は林の道を辿っていった。
木の間越しに見える磐梯山を仰ぎながら歩いていると、いつの間にか澄んだ素直な心になっていた。道みち、問われるままに、身の上を話した。
乳青色の沼に出た。沼の周りを紅葉が囲み、沼を一そう美しく見せていた。人は「瑠璃沼」といっていた。
その沼を背にして二人の写真を撮った。アルバムにある写真はそのときのものである。
また、林の道にもどった。
木木の梢を鳴らして渡る風を聞きながら、お母さんと並んで歩いていると、聞くでもないのに、身の上を、ポツポツと話し出した。
早く亡くしたご主人のこと、息子さんが職に就いて遠い地に行ったこと、今は娘と二人暮しだ、などなど。
山の気がそうさせるのか、しみじみと胸にしみて聞いた。
互いに身の上を話したことで心の垣根もとれたのか、少しづつながら心が開き、明るい話し声になっていった。殊に娘さんは若いだけにうち融けるのもはやかった。
沼を巡り終えると平坦な高台に出た。遠くの方まで望まれた。
右手の遠くに、鏡を置いたような、秋元湖が見えた。秋の日の下に青白く静まっていた。その上を玩具のような遊覧船が白い航跡を引いて滑るように走っているのが見えた。
日は中空にかかっていた。木陰のそこ、ここに、人びとはそれぞれ弁当を広げていた。

私達も、適当な木陰をみつけ、娘さんの広げた風呂敷の上に坐り、互いに持ってきた弁当を出し合った。

二人ともさり気なく、それでいて、何くれとなく食事に気を配ってくれた。すすめられたおにぎりは、海苔で包んだ、それは大きなものだった。その大きさに驚きながら食べている私を楽しそうに眺めていた。

〝出会って間もないのに、どうしてこんなに親切にしてくれるのだろう？〟

と考えながらおにぎりを噛みしめていた。

そのうちに、それがなんとなく解るような気がしてきた。先程のお母さんの話にあった、遠く別れて暮している息子さんのことを思いだした。息子への、兄への、それぞれの思いが、年恰好の似た私に向かっているのだろうと思った。

〝別れて暮らす淋しさを、私を世話することで、紛ぎらわし癒しているのだろう〟

そう思うと、鼻の奥が熱くなった。噛んでいるおにぎりの塩加減が強くなってくるようだった。

〝今日一日、素直に息子さんの代りをしよう〟

と思った。

風が立った。裏磐梯巡りの最後地、桧原湖に向かった。同じものを食べたことが更に隔たりを縮めたようだった。娘さんの声が林に弾んだ。

桧原湖に着いた。遊覧船に乗り降りする人で混んでいた。娘さんが遊覧船に乗ろうといいだした。私は帰る時間が気になりだしていたから、生返事をしていたが、娘さんがいい張ってきかなかった。

娘さんの真剣さに押され、お母さんをそこに残して、船着場に降りていった。

つい先程まで中空にあった日も西に傾き、周りの山々は西日を受けて、赤々と燃えていたが、湖上は青くなりはじめていた。

二人は船首に近い椅子に腰掛けた。いつのまにか娘さんが私の腕をとっていた。気がついたが知らぬふりをしていた。腕をあずけたまま、湖上に目をやって、ガイドの説明を聞いてる娘さんの横顔を、それとなく見ていた。視線を感じたのか私を振り返り、腕をとっているのに気がつき、あわてて手を離し、赤くなって恥かしそうに笑った。

いいようのない、いとしさが噴きあげてきた。胸は泡立ち、湖上の景色は目に映らなくなった。

湖上を一周して短かい船旅は終った。

互いに言葉少くなに山を下りはじめた。行楽の疲れからか、山を渡る風が冷たくなったせいか、妙にものかなしかった。山に日暮れが近づいていた。

バスで翁島駅に出た。あたりは暮色に包まれていた。天気

がよかったせいか、濃紺の空に星影がさやかに光りはじめていた。
帰りの切符を買った。そして、改めて二人に、今日一日の礼をいおうと近寄っていった。礼をいいかけると、それを遮るように、
「今夜家にいらっしゃいませんか」
と、お母さんが誘った。
突然のことに驚いて、声をのんだ。ただ二人を見つめるばかりだった。
「このままお別れしますのは、あまりにもさびしゅうございますから」
お母さんの言葉に、頭はしびれ、胸が熱くなった。
別れ難い思いがしていたから、その誘いがこの上なく嬉しかった。
〝親しくなったとはいえ、いくらなんでも、そこまで甘えてはいけない〟
そんな声がして、惑う心を懸命におさえた。二人の気持に心から感謝の礼をいい、その誘いをことわった。
二人はかなしそうな目になった。
先程からお母さんの陰で、私をみつめていた娘さんが、
「冬休みにはぜひ遊びに来て下さい。お待ちしておりますから」
と、いった。目がうるんでいるようだった。
娘さんを見るのがつらく、曖昧な返事をしながら、目をそらした。
三人は無言のまま立ちつくしていた。
改札がはじまった。
二人に礼をいい、沼で撮った写真は必ず送ると約束し、二人の住所を書きとめ、私の住所をつげた。
プラットホームに出て、振り返った。見送っている二人の顔があった。
あたりはすっかり夜になっていた。駅の暗い燈の下の二人の顔が、夕闇にひっそり咲いた白い二つの花に見えた。
別れの手を振った。それに応えて、二人は手を振り返した。白い二つの花が揺れているようだった。
京都に帰ってからも、しばらくは、夕闇の中に見た二人の白い顔が、私の脳裏から消えなかった。
私はお礼の手紙に写真をそえて、二人のもとに送った。ほどなく娘さんから返事がきた。
――写真が届いた礼と、一緒に過ごした一日が、とっても楽しかったこと、別れたあとのさびしかったことなど――、がしたためてあった。
そして、最後はこう結ばれていた。
翁島の駅でお別れしましてから、早いもので、一ヶ月が過

ぎようとしております。あの日のことを思い出し、思い出しの毎日を送っていますが、何だか夢の中の出来事のような気がしてなりません。そのたびに、送っていただいた写真を取り出して見て、あの日があったのだと自分にいい聞かせております。

冬休みも間近になってまいりました。冬休みにはぜひお遊びにお越し下さいませ、心からお待ちいたしております。

冬休みのころともなりますと、こちらでは毎日雪が降り続き、あたりはすっかり根雪になっていることでございましょう。雪の降る日に、かく巻きに身をくるみ、雪ぐつをはいて駅へあなたさまをお迎へにあがる姿を想い浮べ、また、降りしきる雪を、あなたさまと窓越しに見ている姿を夢みて、日を過ごしております。

母は送っていただいた写真を見ては、あなたさまのお噂をしながらあの日を懐しんでおります。母からも、きっときっと、お遊びにお越し下さいますようにと、申しております。

私や母の願いを、どうか叶えて下さいませ、。

京都のこのごろは如何でございましょうや。こちらは随分と寒くなってまいりました。遠からず雪になることでございましょう。

京都の冬は寒いと聞いております。あなたさまには十分お身体おいといなされまして、お過ごしなされますようお祈りいたしております。

唯唯、お目もじの叶います日のまいりますことを心から願いつつ筆をおきます。

かしこ

訪ねて行かなかった。その後、幾通かの手紙を受けとったが、簡単な返事を出すにとどめた。やがて、手紙も来なくなった。年とともに悔のつもる思い出ばかりが鮮明になっていった。

ある転校生の想い出

斎藤美寿子（石生）

まるで蜃気楼の中から少女時代の私がタイムスリップしてこちらへ歩いてくるような気持ちで何十年も前の私とむき合ってみることにした。

柏原時代の想い出、それは一体どこから始まるのだろうか。大阪で生まれ、育ち、時おり夏休み、お正月に母のふるさとである石生へ帰り数日を過ごすことしかなかった私が、疎開という大きなぐぎりを背負って石生へ帰り、柏原女学校へ転校したのは終戦の前年であった。

柏原駅を降り母と学校を目指して歩いた時の心細さ、そし

てそこに見たものは古い木造の質素な校舎だった。職員室で事務の人から種々の手続きの指導を受けた時、その人が何度も、この学校は県立ですからと繰り返していたのが、とにかく耳につき転校拒絶症が胸一杯に拡がり、唯々大阪へ帰りたいと思いつつ形ばかりのうなづきを繰り返していた私。帰り途、あの事務の人は大阪の大手前高女というのがどういう学校か知らないのね…とポツンといった。

小学校の低学年から子供心に自分の進学する学校は大手前高女しかないと決め、一つの小学校から一名ないし二名しか入れないというその学校へ入学出来た時は、ほんとうにうれしく誇らしく、満員電車も日増しにはげしくなる空襲にも何の恐怖もなく、校舎の窓から正面にある大阪城や隣接している大阪府庁を眺めながら、毎日の朝礼に校長先生から、どこそこの大学に今年度は何名入学したというプライドマーチをたたきこまれていたのだった。

空襲がはげしくなり、学校へ着いてもすぐ帰宅せよという日々が多くなったある日、とうとう私の石生行きが決まってしまった。知らない学校へ行くのはいやだと泣いてみても、やはり私のわがままは通らず、柏原への転校になったのである。その学校の校舎は鉄筋でもなく、プールも大きい体育館もなく、ただ木造の建物が並び、渡り廊下には「ふみ板」が敷いてあり、教室を移動するたびに上ばきの下でそれがかたことと鳴っていた。大阪にいれば空襲で死ぬかも知れないという恐怖よりも、田舎の学校へ来なくてはならなくなったということの方が理不盡に思えて、なかなかなじむことが出来ずに、何となくポツンと空を見ている毎日だった。

でも廻りの人達はやさしく、級の中に一人二人と転校生もふえ、やがていつしか廊下の踏み板にも慣れて、都会にはないのびやかな空気に私もなじんでいくようになったとき、終戦となった。あーこれで大阪に帰れると思い、それこそ毎晩父や母に大阪へ帰してほしいと泣いて頼んだが無理だった。仕方がない、それでは卒業まで待ち、上の学校へ進学するまで辛棒しようと心に決めたとき、はじめてそこからほんとうの柏原の生活がスタートした。それまでは、やはり大阪の学校に未練があり、愚かなプライドが私自身の廻りに壁をつくり、自分を閉じこめていたような気がする。

それからの柏原生活は平和で暖かく時折の青春的な刺激といえば、柏原中学の男子生徒からもらう写真入りのラブレターだったり、兄の友達と話をしていたことが不良だといって山へ連れて行かれて上級生五人に取り囲まれ、生意気だと叱られたことくらいで、勉強も面白く、終戦後の都会の繁雑さに振り廻されることもなく、なんとなく春先のタンポポのようなささやかな春を味わっていたような気がする。

今思い出してみるとあの二年あまりの在学中の一番の冒険

が、「青い山脈」という映画を福知山へ数人で見に行き、それがばれて先生に叱られたことくらいという、現在では信じられないほどのつつましい生活だった。運動会で皆の人気の的だった先生が私のくじにあたり、二人三脚で一等をとったりしたことも、あの山合いの柏原であればこそ味わえた楽しさだったと思う。小さなことの中に喜びや夢を見出せた時代、たとえそれが束の間であっても、そのつつましさ、やさしさを私の中に育ててくれたのはあの柏原時代なのだ。流れの早い今の時代には持てない喜び、追いかけてみようとしてもあまりに早い時代の流れに、その情熱を失ってしまいそうな今の世の中とちがって、小さなものを心の中で温めてみようと思う心を育ててくれた柏原というところは、私にとって青春のふるさとなのかもしれない。

あの町で生まれ育った人達が「山ざる」でふるさとを懐しんでおられる記事を拝見するたびに、二年半しかそこでの生活のない私は、まるで根なし草のような寂しさを覚えていた。卒業後、念願通り大阪へもどり進学したのだけれど、石生には父も母も住んでいるのですから、もっと度々柏原駅で降りて学校の方へ歩いてみればよかった、と今にして後悔もしている。卒業後一度も訪れたことのない私が、今柏原を思い出してみてもそれは私の知っている数十年前の柏原でしかない。あの木造建築も、かたことと鳴る渡り廊下も、とっくの昔になくなっているはずなのに、私の心の中の柏原女学校はあれが一番似合っているような気がする。あの校舎の窓から見た飛行機雲や学校の帰りみち、素適だなと思っている先生とばったり出会って口がきけなくなってしまったこと、列車通学の中で用もないのに（？）男子中学生が車輛を行ったり来たりしていたこと。こんな些細な想い出のバックには、やはり鉄筋の校舎は似合わない。きっと今後柏原の町は歩いても私はこの想い出にとらわれて新しい学校の方へは行かないのではないかと思う。

「山ざる」の会から何度かおさそいを受けながら、納期仕事を持つ身と出不精がプラスして、いつも出席をお断りしていた。心の中ではあの柏原を懐しみ、時おり帰る石生への列車の中から谷川のせせらぎが昔と変わることなく流れているのを、こよなく嬉しく思いながら、私の気持ちのどこかに転校生というハンディがブレーキになっているのだと思う。それでも今こうして何十年も前の時代に自分を置くと、あの柏原での二年半は私の人生での一つのダイヤモンドだと思える。

懐しい場所がある。懐しい思い出がある。それだけで、それを持っているだけでその人はどれだけ幸せを味わえることだろうと、しみじみと考えさせられる。行き交う人や街が変わってしまってもそこで過ごした年月と想い出は変わることがないどころか、年月を重ねるほどに甘味を増していくのか

もしれない。そんなことをあれこれと考えながら、今私は心の底から、あの二年半にありがとうございました……という言葉を贈りたい。

帰去来辞——道元禅師のふところ——

小杉仙生（青垣）

謹敬　唐突ながら、私、丹波の生家の禅寺（青垣町・曹洞宗法光寺）に隠遁、閑居いたしました。久しぶりに、道元禅師のふところに抱かれに還らせていただいたと思っております。

こもごもの理由あっての再出家でございます。深く詮索なさらないでくださいませ。

在京中は、忠実な会員とは言えぬまま、御迷惑をかけましたうえ、挨拶も抜きで隠棲してしまいましたが、これも私流儀、お目こぼし願います。古来、禅者の世を去ってゆく姿は、そのようなものでありましたろう。

寺に還ると聞いて、親しくしていただいていた女流作家の永井路子さんが、

「小杉さんが西行法師になるか」

とおっしゃった。私に西行に比ぶべき才能があるはずもな

いが、北面の武士という俗の俗なるものから、ほとけの道に入った西行に、たとえてたとえられないものでもなく、悪い気はいたしませんでした。

丹波に帰って、どのような暮らしかとおたずねでございますか？

昨秋、十月に晋山式を挙げ、日常は禅僧としての如法の明け暮れでございます。

朝五時起床、ただちに上殿、朝課（朝のおつとめ）。

東に世を去りし人あれば、行って葬送の経を誦み、

西に年忌あれば、訪れて法事をつとめ、

南の公民館に招かれれば、赴いて講演のまねごと、

北の高等学校から声かかれば、走って少年に警策。

晴れれば寺域内外の清掃作務、降れば気ままに読書と執筆。

みずから名付けて『禅魂文才』（才はとぼしいが）の日々是好日です。

いまの季節ですと、長火鉢に炭火をおこし、（昨今、丹波でも炭はなかなか入手しにくいのです）鉄瓶に湯をたぎらせて、ねんごろに茶をいれて喫し、来客にも喫していただく。

炭のはじける音、湯のたぎる松風の音に耳澄ませば、即今、そこが禅境というものかも知れませぬ。

同じ書物を読みましても、娑婆でビジネスとして読んでおりましたのとちがい、すんなりと頭に入ってまいります。都の喧噪のなかで曇っていたなにかが脱落し、おのずとものがよく見えるようになったのでしょうか。

―通勤列車は新幹線―

山の寺に入って静かに暮らすつもりが、宗門ではおいそれとそれを許してくれません。

昨年夏、横浜・鶴見にございます曹洞宗大本山總持寺の梅田信隆禅師さまから、修行中の雲水の指導にあたる「役寮」（本山幹部）となり、同時に、本山出版部次長として、御本山の出版物全体を責任をもって見るため上山するようとの命令が届いたのです。

再三固辞いたしましたが、雲水出身のアマチュア同然の編集者ばかりでこころもとないので、元プロとしての経験を活かしてほしいという要請なれば、宗門人としては、御本山の御開山さまへの報恩、御本山への愛山護持の立場から、お受けせざるを得ず、就任いたしました。

只今は、御本山と自坊との間を行ったり来たりの生活で、多いときには月に五回ほども丹波と横浜を往還いたします。

（写真は役寮として大本山総持寺に上山の姿・二人目）

関東とは縁を切って、こちらでひっそりと山居するつもりが、再び関東とのつながりが復活し、御本山へ通勤するかたちになっております。通勤はたいがい新幹線利用で、場合によって福知山から寝台特急『いづも』に乗車いたします。

御山（おやま）にも長期滞在することがしだいに多くなり、滞在中は役寮部屋に起居いたしております。横浜方面へお出ましの節はお立ち寄りくだされば、御本山を案内させていただきます。早朝五時ごろおいでくだされば、千畳敷きの太祖堂で、朝のおつとめに加わっている私の姿がごらんになれます。

そのようなわけで、昨年結婚した娘や息子のおります神奈川県とこちらと、半々の生活でございますから、去ったつもりの関東と、再びご縁が結ばれました。関東郷友会とも、お許し願えるならば、今後はオブザーバーのようなかたちでおつきあいさせていただければ有難いと思っております。

―丹波通信―

柏原の厄神さん（二月十七・十八日）のころから、それこそ厄神さん日和で、時ならぬ遅雪がつづき、私の寺の裏庭など、本堂の大屋根から落ちた雪がまだうず高く残っております（三月七日現在）。それでも、浅い春も確実に春を育てているようで、今日は田野で蕗の薹をたくさん摘んでまいりました。サッと湯どおしして、醤油でじっくりと煮ふくめてゆき、食膳の箸休めにいたしました。舌のうえで、丹波の春の薫りが苦く広がっていきました。梅も七分咲きです。

私の寺のしだれ桜の蕾も、着実にふくらんでゆくようです。みなさまの御清福をお祈り申し上げます。

敬具

いけばなと私

志村慶子（柏原町）

銀座の鐘紡シグナスホールで平成元年十一月に私の門下の集まりの〝柴の会第三回展〟を開きましたところ、三日間の会期に延三千人を超える多くの方々のご来場をいただきました。そしてそのとき同時に発行しました私のいけばな作品集『たわむ』も大へん好評をいただきました。

私は娘のころ、伯母のすすめで草月流を習いはじめ、戦後の早い時期から家元教場の助講師を命ぜられ、初代家元・勅使河原蒼風先生から直接きびしい薫陶をうける幸運に恵まれました。その後霞先生に隋行してアメリカ主要都市（三十八年）、蒼風先生に隋行してオーストラリア主要四都市（四十二年）を歴訪しました。さらにユーゴスラビアでの日本芸術祭（四十八年）、オランダでの草月支部結成式（五十六年）などにも草月会の代表として出席、ハワイその他の海外各地を含めてデモンストレーションや指導に携わりました。また皇居新宮殿にいけばなを飾る機会にも恵まれました。

現在は草月会本部（草月会館、大阪家元教室、地方指導）講師、大手町産経学園、池袋産経学園などの家元出先教室の講師のほか、読売文化センター萩窪（ルミネ）や自宅教室などで数多くの方々と毎日を楽しく忙しく過ごしております。

故郷に帰って一年

田原敏男（柏原）

関東氷上郷友会会員の皆様、ご無沙汰致しております。早いもので小生が東京を離れ、柏原に帰って去る二月七日で満一年が経過致しました。その帰途、小生としては生まれて始めて自分で東名、名神、大阪―舞鶴高速道を乗継いで運転して来たのですが、かねてから新幹線や福知山線の車窓から見慣れた風景が現れるにつれ、帰って来たんだなあとジーンとくるものがあった事が昨日のことのように思い出されます。

柏原に帰ったら早速、小学校や中学校の同窓達が、それぞれ歓迎会を催してくれ、故郷って、幼なじみって良いものだなあと感激しました。一方で、田舎ならではの付き合いとして、地区が担当する小河川の愛護（堤防の草刈りやゴミ拾い）奉仕や地区保有林の下刈り、間伐作業、部落の防火貯水池の清掃奉仕、秋祭りの御興の飾りつけ、前夜祭の餅まき行事、地区の集会（月一～一・五回）等々があり、日曜日は東京にいて想像していた以上の時間を、それらの行事に取られます。もっとも、これらの行事を通じ地区の人々、お互いの交流の深耕となり、お互いに相和して暮していけるんだナーと実感させられています。柏原という町は今さらに小生がどうのこうのと解説をするまでもなく、諸先輩方や、同窓の宮野さん、出町さん、村上善英さん達からも種々お聞き及びのことと思いますが、小生の下手の横好きのゴルフの見地から云いますと、「氷上ＣＣ」には約一五分、昨年末オープンの「ザ・サイクレス・ＣＣ」には約二五分、「山南ＣＣ」にも同じ位、鐘ヶ坂トンネルを越えて行けば「さいきＣＣ」と「篠山ＣＣ」、北へ遠坂トンネルを抜けると「山東ＣＣ」、西へ三五分ほど行くと「妙見富士ＣＣ」、もう少し行くと「西脇ＣＣ」と一時間以内の範囲に数々のコースがあり、同窓生や知り合いの方々が多数メンバーにおられますので、時間とお金さえあれば、プレーするのには事欠かない便利な場所に位置しており、気候も適当な寒暖があり、関東のカラッ風はありませんが、その分雪が降ります。このお便りを書いている二月十七日も、例年の柏原厄神さんに欠かせない雪の一日となりました。でも地震は全くといってよいほどありませんので、東京に残っている子供達から羨ましがられています。

三十有余年離れていた柏原に帰って来ての一年目は三百年

近く経ていた古い家を取壊し、その跡に新築と、また先に述べましたような地区の種々な行事への参加等々、公私共にあわただしいものでしたが、今年からは、じっくりと腰を据えて、故郷を味わいたいと思っています。

会員の皆々様の益々のご健勝とご発展を祈念致します。

ふるさと講演記

坂上五朗（氷上町）

平成三年は、イラクと多国籍軍との開戦で幕が開けた。

そんな空しい世相の中で、とても嬉しい話が飛び込んできた。兵庫県西地区の経営者セミナーである。

多紀郡丹南町で、去る一月二十三日開催され、講師として招かれたが、その講師依頼を受けてから、私の心は落ち着きをうしない、嬉しいやら、はずかしいやらで「本当かなァ、ウソじゃないだろうなァ」と、一時は自分の耳を疑ったものである。ビジネスコンサルタントを始めてから、この度、初めて地元で講演をすることになったのである。何だか複雑な思いであった。しかし、正式の出講依頼書を受け取ったときは「やった！ふるさと講演だ！」と、心の中で小躍りし、さっそく我が愛妻と子供達に、その報告をする。童心に帰ったような私を見て、家族たちは、どう思ったことか。しかし、これは、住む人は無くとも、遠く離れた、生まれ故郷の記憶をもつ者にしか、分からない喜びだと思う。

兵庫県では、神戸市、姫路市の経験はあるが、いずれも、氷上町から遠く離れた地であり、同じ兵庫県というだけで、ふるさととしての心の高ぶりはなかった。今回は別である。会場の最寄り駅も、なつかしい福知山線の篠山口。篠山には幼少のころ、よく遊びに行った親戚がある。そんなこんなで、他の企業講演をしながら、私にとっては一月二十三日が待ち遠しい日々であった。

東京駅午前七時五十分発の新幹線で大阪に向かう。いつもの講演出張と違い、何だか落ち着かない。大阪駅から福知山線に乗り換え、快速電車で篠山口に向かった。福知山線に乗るのは三十三年ぶりになるだろうか、当時は、黒煙を吐きながら走る蒸気機関車だったような気がする。トンネルに入れば、窓のスキマから石炭の燃えた独特の匂いのする煙が、客室内に漂っていたことを思い出す。今は、その面影は全く無く、福知山線の全線が電化され、垢抜けたスマートな電車が走っていた。いや、皆さんは、こんなことは既にご存じだと思うが、ふるさとを出てから、初めて福知山線に乗る私には実になつかしい思いがいっぱいなのである。

私が小学校に上がる前、母と何度か宝塚に行ったことがあ

る。その時の記憶であろうか、車内アナウンスの駅名が、なつかしく心地よく響き、各駅ホームの駅名看板もなつかしく思え、大阪から、じっと車窓を眺めていた。電車の中では、我が田舎弁が飛び交い、「田舎にかえってきたなー」と実感していた。

「篠山口、篠山口です、ご乗車ありがとうございます」駅のアナウンスが、私の到着駅を告げる。篠山口駅には三十六、七年ぶりになるだろうか、ホームに降り立った時、なつかしいふるさとの薫りがしたように思える。しばらく駅のホームにたたずんで、回りを見渡した。昔は「大きな駅だなァ」と思っていたのに、今、こうして眺めて見ると、昔の記憶とかみ合わない、小さな駅であった。ホームから改札口に向かう陸橋通路を、昔の思い出の薫りを求め、キョロキョロしながら渡った。木製の改札口も、ステンレスパイプに変わり、二十人ほどで一杯になる程度だが、石油ストーブが暖かい待合い室もあった。ふるさとというのは、こんなものかもしれない。小さな子供の目で見るものは大きく見え、大きくなってふるさとを見るとき、年を取ったオヤジやオフクロのように「小さいなァ」と感じる、それがふるさとかも……。

改札口では招請会社の責任者の方々にお出迎えいただき、講演時間に少し時間があるからということで、会場近くのレストランに車で立ち寄ったが、その道筋には、昔の面影を残すものは、何もなかった。町並みはすっかり変貌し、新しい道路が黒々と横たわり、時代の流れを感じさせた。昔も今も変わらずにあったのは、山並みの風景だけであった。

レストランでは、温かいコーヒーをすすりながら、田舎の話に花が咲いた。お出迎えをいただいた南　勝行様が「私は市島町出身ですが、氷上郷友会のことはよく知っています。私の叔母で、木村つた江が東京にいますが、氷上郷友会の会員で、毎年会合に参加しているそうです。私もしばらく東京に住んでいました。」という話。世の中広いようで狭いもの、ぐっと身近な人に思えた。講演時間もせまり、会場に入ると、そこはなつかしい田舎弁のウズである。氷上町で会社を経営されている方が三～四人参加されていた。その中で成松町で氷上運送、氷上タクシー、氷上観光などその他数社を経営されている社長の北野全司様が「先生の坂上という姓は、葛野の下新庄に何軒かありまっけど、そこのご出身でっか、なんや最近、下新庄の入り口あたりで、坂上何とかいう人が、自動車の修理工場を始めたゆうこっちゃけど、お知り合いでっしゃろ、あのへんも、えらい変わりようですわ。」いやァ、実になつかしい話が飛び出してきたものである。講演前の数分も、そんな話でにぎやかであった。講演に入り、かなり自分が緊張しているのに気がついた。その昔、私が子供であった頃、きっとどこかで会ったであろう方々に、また、坂上の姓

をよくご存じの方々に、会社経営や人材の育成について語ることは、考えてもいなかったことである。講演の切り出しは、ふるさとの皆様への恩返しということで話を始め、ようやく、いつもの調子を取り戻した感であった。

今回のふるさと講演では、ご参加いただいた方々に、たくさんの土産話を聞かせてもらった。講演後に、懇談会の用意がしてあるので、一緒に参加してほしいと要請があったが、翌日は北海道旭川での講演があるため、心ならずも辞退せざるを得ず、私も非常に残念に思ったが、次の機会を約束し、ふるさとを後にした。また、「ふるさと講演」のチャンスがあったときは、ゆとりのあるスケジュールを考えている。

帰京後、木村つた江様には、「山ざる」の名簿から突然におお電話を差し上げ、南　勝行様の近況をお知らせし、しばらくふるさとのお話を、交換させていただいた。木村様には突然の電話で、ご迷惑をおかけしたことをおわび致します。「氷上郷友会」や「山ざる」は、他人ではない何か近いものを感じさせるものがある。それは、同じふるさとの者という、共通点ではないだろうか。私は木村様と楽しくお話が出来たことを、光栄と感じ、「人のふれあい」を幸せと、つくづく感じるところである。いろんな形でこの「山ざる」が会員の皆様に、活用されることを祈っております。（人材育成研究所所長）

哲学と私

足立静雄（青垣町）

私が柏原高校に入って、しばらくして担任の荻野先生が授業中に「西田幾太郎の『善の研究』はすばらしい本なので読んでみなさい」といわれた。しかし、丹波には西田幾太郎の「善の研究」の本を売っている本屋さんはそんなにはなかった。

ところが、佐治（現在の青垣町）の大正町の中塚という菓子店の斜め前に古本屋さんがあって、私はその古本屋さんにたびたび古本を買いにいっていたが、そこで荻野先生が推せんされた「善の研究」を発見した時は本当にうれしかった。早速それを買って読んでみたが、その内容については何も理解できなかった。それを契機に三木清、ニーチェ、ヘーゲル、サルトル、カミュ、マルクスなどの哲学書を手当り次第に読んだ。

私がなぜ哲学書に興味を示すようになったのか、その要因ははっきりしないが、学校の勉強を忘れるほど魅力的な本であったことは確かであるし、哲学書に夢中になっているうちに〝人生〟そのものがわからなくなったことと、目を痛めて

しまったために、高校を一年間休学、四年かかって卒業した。
しかし、哲学への興味はますます強まるばかりで、哲学科のある大学ならどこでもよいから入りたいと思うようになった。高校を卒業してから二年ほど哲学書や文学書に夢中になっていたが、哲学ではメシが食えないといわれていたし、哲学書を読み漁っていて自殺した人もいたことから、哲学という学問は一風変わった学問とみられる傾向があった。そんなわけで、哲学書に夢中になり、人目を避けるようにしていた私は、丹波では一風変わった人間とみられていたのではないかと思っている。
私の念願がかなって東京の学校の哲学科に入学できたのは昭和三十三年だった。昭和三十三年といえば、敗戦のつめあとをまだ深く残しており、日米安保条約の改正論議がはじまっていた。私も当然、その論議に刺激され、いつの間にか、積極的に安保改正論議に参加するようになった。
当時の学生は、戦争を体験してはいなかったが、敗戦後の食べ物も着る物も現在では考えられないほど、恵まれていなかった時代に小・中学校時代を過ごしたことから、戦争に対するアレルギーは、戦争を体験した人と同じくらい敏感に感じていた。
そんなことから昭和三十五年の日米安保条約の改正によって、日本がアメリカとの軍事同盟を深めることに一層の不安を感じ、多くの学生が反対運動を展開したが、私もその一人で、大学での四年間のほとんどを安保改定反対運動に費した。しかし、この運動が思うような成果をあげることなく挫折という形で、終わったような気がしている。
湾岸戦争でのイラクの立場と、第二次大戦での日本の立場は、時代は違うが非常に似ているように思う。第二次大戦での日本は、満州、中国、東南アジアに進出、世界を敵にして破滅の道を歩んだように、イラクもクウェートに進出、世界を敵にして四面楚歌の状態に陥っている。〝歴史は繰り返す〟という言葉があるが、これが事実にならないことを祈ってやまない。

私の健康法

井本義一（柏原町）

長男長女ともまだ独立（結婚）しておらず、六十歳にあと三っつと迫った昨今、病気らしい病気知らずの丈夫な身体に生み育んでくれた、今は亡き両親への報恩のためにも、このかけがえのない身体をいたわりつつ、大切に使って生きたい、と願っています。なぜ、いたわりつつ大切にかといえば、先月中旬次のような体験をしたからでした。

それは平成三年の初めでした。身体に活を入れ機敏性も養おうと、勤務先への降車駅ＪＲ神田駅の階段（約三十八段）を、二段ずつ飛び下りることを始めました。ところが、四日目の午後あたりから腰骨が、じわーっと痛くなってきたのです。

いつもの私ならジョギングは十六年間続けているし、「ぶら下がり」（後述）もしているし、そのうちに治るだろうとほっておくのですが、その夜に限り、亡父母の加護か、なぜ腰が痛くなったかをじっくり考える気になって、最近の生活で何か変わったことはないかと反省してみたら、神田駅のピョンピョン下り、これだ！と翌日からピタッと止めました。でも少し曲げた状態の時など鈍痛はとれません。そこで「ぶら下がり」となります。

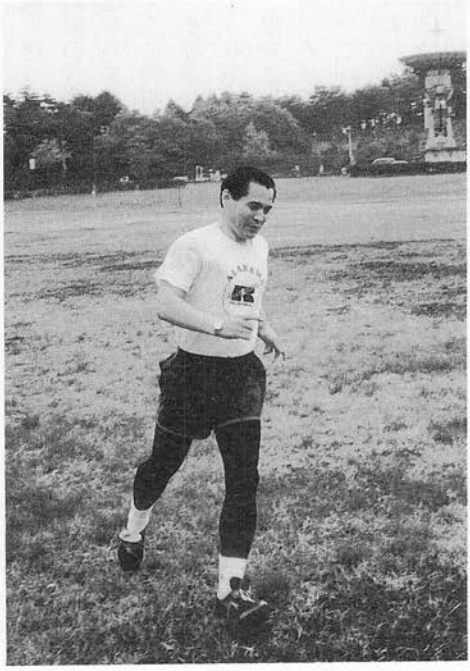
「ぶら下がり」は毎日続けて満一年、まず平日（月～土）の朝は通勤電車内で、日祭日は降雨日でない限り一時間のジョギング中の四十五分（家の周囲を三回り）後、町内公園の太い木の横枝にぶら下がり、二〇〇まで数をかぞえ、それも前後に振らず、木の幹に左足が当たるように左右に振っています。それが終われば最後の一周十五分を走り、約十キロ走を終わります。

さて、平日朝のぶら下がりは、小田急新宿行き各駅停車、柿生駅発六時七分に乗車、前から一両目の最後方座席（実はシルバーシート。早朝しかも寒朝でご老人は概して乗車されず必ず空いていて座れるので、手紙類を書いたり、仕事の諸企画原案をメモってみたり、一日のうちで自分が好きに使える最も貴重な場所で、実はこの拙文も）に席を占めます。車内はガラガラ空きで、ほとんどの乗客が眠っています。六時二十五分頃電車は登戸駅を出て、多摩川を渡りだすと、私はすぐ上着を脱ぎ（コートは柿生駅乗車時に網棚に）、進行方向真正面の宙ずり広告の目前、つり皮を支える銀色の鉄パイプにぶら下がる。最初は多摩川を渡る四分の一の時間を体も支えきれなかった（現在体重七三～七四キロ）が、毎日少しずつ我慢してぶら下がる時間を伸ばしましたら、今では多摩川を渡りきる約一分三十秒間を下がり続け、次駅の和泉多摩川に着く。そのあと次の狛江までの間約十五秒から二十秒間、今度は網棚の前、つり皮つりの銀色の鉄パイプの左右に、左は左手で、右は右手で（ちょうどバンザイの両手を広げた姿）ぶら下り、これも前後でなく左右に振るのです。

二つの方法とも進行中の車内でやるのですから、かなり荷重がかかり、それはきついものです。でも、そのきつさの毎日の積み重ねが、老化一方の腰骨の周りを守る筋肉に刺激を与え強くしているのでしょうか。あの腰の鈍痛はどこへ去ったのか、すっかり消えてしまいました。しかし、今何処へか去った腰痛も、いつかヒョッコリ戻ってくる（それも必ず、

だって腰骨に限らず、身体各所に起こるであろう故障も含めて老化の一方だから……）ものと考えて間違いないので、これからも注意怠りなく、仲良くつき合って生きたいものです。

人それぞれに考えは異りましょうが、まだナイスミドルでいたい、ジーパンがよく似合う壮年でいたい（足が短かく太いのでこれは無理か？）。たまに美味しいお酒も飲みたい。一度も連れてったことがないので、妻と温泉か外国旅行へ等々、これらの実行と継続は、やはり何よりもまず健康あってのことです。



そこで前述のほか、祖母と母のあの味「まぜご飯」のように、いろいろと見聞きしたこととをともかくやってみることにしています。①スポーツタオルでの「乾布摩擦」も「健康タワシ」も。木剣の素振りも気分転換によい。職場の自席で新聞を読みながら「足の裏叩き」は毎日片足最底百回以上、運動後のシャワー時など軽石での「足の裏こすり」は片足最底五十回以上、朝のコーヒーの前後に二杯の生水飲み（ただし月～土曜日勤務先近くの喫茶屋で毎朝七時二十五分頃）など②自分に適していると思うものは何でも続ける。ライフスタイルにする③無理をしない。無理と思えば即ヤメる勇気が肝要④ジョギングも、ぶら下がりも自分が生きるため、と他人の目を気にしない気持ちの若さで割りきる⑤腰痛予防は可能な限り正しい姿勢で身体を動かし、使っていくことだと考えています。

人生いつまでも青春

綾木　健（氷上町）
五十三歳・寅・八白土星・A型

五才のとき、戦局を心配した母の叔母の推めで、母の故郷である成松に大阪から移り住み、十三年間を丹波の自然に育くまれて過ごしました。

東京に出て来て既に三十三年になりますが、幼年期、少年期を送った丹波の山川や街並、小学校、中学校の校庭、柏原高校の校舎や自転車通学の道筋、幼な友達の顔、悪友共の顔、輝やいて見えた乙女達の顔・顔・姿……が写真のアルバムのように鮮明に心の中に焼き付けられています。

不思議なもので、歳を重ねる毎にその鮮明さが増してくるような気がします。

東京に出てきて、グラフィック・デザインを修得していた頃、アパレル・ファッションの世界は男の世界じゃない！といっていた本人が、ふとしたきっかけでその世界に足を踏み入れ、なんのことはなくミイラ捕りがミイラになってしまい、結局二十五年間この業界で生きたわけですが、実に楽しく感動の連続の二十五年でした。

アパレル・ファッション業界で企画マンとしてスタートしてから、俗にいうソフト屋としての人生を送ってきましたが、業界の体質上常に時代の新しい潮流を見つめ、トレンドを追っかけ、またトレンドを創り出す側に回ったりの毎日毎日が、今の自分の時代観や社会観をつくってきたように思えます。

その後、雑貨ビジネス、キャラクター開発等々ジャンルの巾を広げ、昨年の一月に新しく会社を設立し、新規事業構築、新商品開発のプロデュースを主とした集大成の仕事にチャレンジしています。

丹波での多感な年代に、豊かな自然の中で胸の高鳴りが周りの山々に聞こえたのでは……と思えるような青春の体験を持ち、夢一杯で飛び出した社会で、想いおこせば、いつもいつも前だけを見つめて全身から湯気を吹き出し続けた日々を送ってきたような気がします。

二十代の青春、三十代も青春！

四十代もまた青春でした。

そして、私にとってはいまの五十代もむろん青春です。

いつも新しい路を探し求め、新しい体験に感動し、美しい花や景色に見とれ、魅力的な人物に心を奪われ、ときめく……そんな心をいつまでも失わずに、チャレンジ、チャレンジ、そんな人生をこれからも生きたいと思っています。

永遠の青春万歳!!

インドネシアの古都—ジョグジャカルタから—

上野重喜（氷上町）

東京にご在住の郷友の皆さま、お元気ですか。私は今、インドネシアはジャワ島の中央にある古都、ジョグジャカルタという町で働いております。

今、四月、この熱帯の島は雨季から乾期への変り目、雨季

の間は毎日のように午後になると、いわゆるスコールという大型の「夕立」に見舞われます。日本の梅雨のように長く降り続くのではなく、二〜三時間の通り雨、まことに男性的で豪快な雨です。乾季になるとほとんど雨を見ることはなく、日中は太陽がギラギラと灼熱の光を投げかけます。乾季は四月から九月まで、雨季は十月から三月、つまり四季はなく、〝二季〟の国なのです。

豊かな水と光に恵まれて、ここジャワ島では、稲は年に三回収穫が可能です。しかし実際は地力を貯えること、労働を軽減する目的もあって、米は年に二回、あと一回は、砂糖黍など別の作物を栽培することが多いようです。

☆　☆

インドネシアはかつて三百五十年間、オランダの植民地でした。太平洋戦争の三年間余り、この地は日本軍の占領下にありました。今も五十五歳から六十歳ぐらいの人たちは、小学校のころに受けた日本の教育をよく憶えており、「君が代」や「海ゆかば」なども歌えます。

一九四五年八月十五日、日本が敗戦を迎えると、その二日後の八月十七日、スカルノ（後の大統領、日本人の奥さん、デビ夫人は有名）を中心に独立宣言をし、インドネシア共和国を名乗りました。しかしオランダはこれを認めず、四年間激しい独立闘争が展開されました。

この闘争には、敗戦後も日本への帰国を拒否して残留した元日本兵が、多く参加したそうです。日本へ帰らなかった兵隊さんたちは、そのままインドネシアで家族を持ち、インドネシア人として生活しています。そうした人たちは、今では七十歳前後になっていますが、現在でも百人以上の方が健在で、時どき会合を持っているようです。

スカルノ前大統領は、実は、戦時中、日本軍政下の調査委員のような役にあった人で、彼が当時の日本の歌「愛国の花」……真白き富士の気高さを……を愛唱したことは有名です。

私の職場の友人であるSさんは、大の日本びいきで、「戦時中に日本から教わった竹槍精神のおかげで、オランダから独立することができた」などと、この間いっておりました。

しかし、日本軍の中には、あまり好ましくない行動があったことも確かなようです。もう一人の友人Mさんは、「子供のとき、いたずらをしたり、行儀の悪いことをすると、母親から、まるで日本人みたいだ！」と叱られたそうです。彼の父親は村長のような役を務めており、時どき日本兵が、無断で田畑の作物などを盗むことがあると、あとで日本軍の上官が監督不行届きを謝りにやってきたそうです。「日本兵の中には良い人もあれば悪い人もある」ということを、彼の父親は子供たちにいったということです。

☆　☆

インドネシア、とくにその中心であるジャワ島は、古い文化と伝統が生きている所です。私の住むジョグジャカルタは中でも最も古くから栄えた所で、四十キロほど離れた所にあるボロブドゥール仏教遺跡は、実に壮大な石造建築物で、世界でも最大級といわれています。日本のちょうど奈良時代、八世紀の半ばごろから百年ほどかけて造られたと伝えられます。また、近くにあるプランバナンの遺跡は、九世紀のヒンズー教遺跡で、これまたボロブドゥールに優るとも劣らぬ壮観なものです。

ジャワ更紗で知られるバティックや銀細工など、伝統工芸も盛んで、京都の友禅の着物が、労働力の安いこの地のバティック工場で盛んに生産されています。

ワヤンクリッといわれる影絵芝居、ジャワ踊りの能や歌舞伎にも似た優美な衣裳と所作を観るとき、高度に洗練されたジャワ文化の奥行きの深さを思わずにはいられません。

ジャワ文化といえばもう一つ、ガムラン音楽を忘れるわけにはいきません。独得の楽器で奏でられるこのオーケストラは「月の光」「水の流れ」の音楽ともいわれ、心の底に深くしみ入り、和ませてくれる調べです。

ジョグジャカルタは、インドネシアの京都といわれ、現に京都とは姉妹都市です。上品さと慎しみ深さを尊ぶこの地の女性は、肌を露にすることをはしたないこととし、猛暑の日

中のの農作業でも、長袖の上衣を足首まで覆う腰巻（スカート）をまとっています。しかしこうした習俗も、若い人たちの間では次第に失われつつあるようです。

☆　☆

インドネシアは、今年は観光年、海外からのお客を待っています。ジョグジャカルタは、首都ジャカルタから東へおよそ五百キロ、飛行機で一時間のところにあります。ジョグジャカルタからさらに東へ飛行機で一時間行けば、有名なバリ島があります。日本からバリとジョグジャカルタを組み合せたツアーが、人気をあつめつつあると聞いています。

☆　☆

ゴルフによし、買物によし、風光明媚、伝統文化豊かなインドネシアをご来訪ください。

（ＮＨＫ編成局勤務、一九八九年十一月、ＪＩＣＡ・国際協力事業団の専門家としてインドネシアへ派遣され、国営放送職員養成の任にあたる）
JL. TIMOHO, No, 40, Yogyakarta, INDONESIA
自宅電話＝001—62—274—62776（東京から直通）

〈写真右〉ボロブドゥールにて・筆者
〈写真左〉プランバナン遺跡

〝時間の花〟を

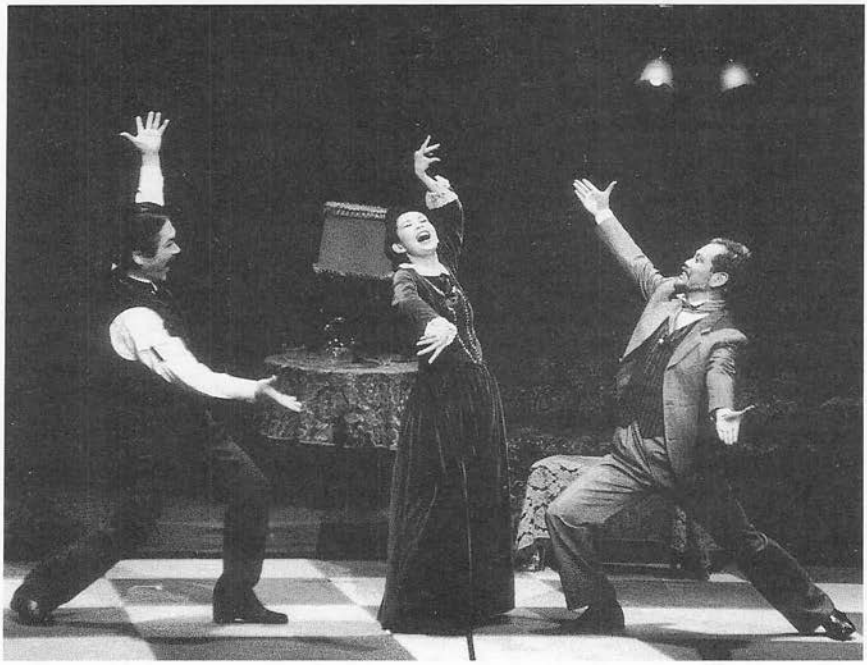
足立さつき（春日町）

『山ざる』誌をご愛読の皆さま、こんにちは。私の職業はオペラ歌手です。オペラ歌手とはどんな仕事かとお思いの方もいらっしゃると思いますので、私のことをお話しします。

私は小学校一年生のときからピアノを習っていたこともあって、音楽には非常に興味がありました。声楽を本格的に勉強しはじめたのは柏原高校一年生のときで、卒業と同時に上京し、武蔵野音楽大学の声楽科に入学しました。それから十一年、何度も歌をやめて丹波に帰ろうと考えました。クラシックの世界は、皆様はあまりご存知ないでしょうが、プロの演奏家として生計を立てるのは大変なことなのです。それだけ、現在の日本の文化度が、欧米並みのレベルに達していないということなのでしょうが……。ですから、最初は親のすねをかじりながらのスタートでした。

また自分の体が楽器である声楽家にとって、体調をコントロールすることは大変重要になってきます。風邪はもちろんひかないよう気をつけますし、食事や睡眠など、すべてにおいて、歌を歌う体づくりのために気を配ります。そういった努力の積み重ねによってはじめて、歌う楽しさが自ずと味わえるのです。そしてそれが同時に、聞いてくださるお客さまにも感動していただけることになるのだと思うのです。

私は、音楽は人の心と心をつなぐ〝時間の花〟だと思います。音楽は一瞬にして花開き、消えていくのですが、そのなかに人の感情を揺さぶる何かが秘められているのでしょう。私たち人間は、いつも感動や夢を求めて生きています。私は、虹色に輝く〝時間の花〟を、皆さまにお送りできれば、そして東京と丹波と世界とを歌声でつなぐことができたならなどと、そんな夢を見ながら、毎日歌い続けています。



幸いにも今年十一月から二年間、文化庁在外研修員としてイタリアのミラノへ留学が決定しました。ヨーロッパの古い歴史から日常生活にいたるまでのすべてを吸収し、また皆さまの前で歌いたいと思います。どうか今後とも、皆さまのご指導、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

写真＝ミュージカル「マイ・フェア・レディ」イライザ役

羽ばたけ！足立さつき

吉見文憲（市島町）

しばらく丹波を離れていた関係もあって、私が足立さつきさんを知ったのはごく新しいことである。確か昭和六十二年の秋、当時関西氷上郷友会の会長たっだ田季晴氏の提案で、総会の席のアトラクションに彼女を招いた日のことだった。

何分そのときの会場が畳の大広間、それにご多聞にもれずあとで一杯やることが目的の集まりで、そんな席に彼女を引っぱり出すのは場違いに感じられて、気の毒に思えなくもなかったのだが、一方では、郷里氷上郡にもこうした本格派が育ちつつあることを、郷土出身の方々に紹介もし、将来彼女のため幾分かでも役立つことになればという意味合いもあって、その運びになったのだった。そんなわけでけっしていい

条件とはいえなかったが、しかし、はじめて彼女の歌唱に耳を傾けながら、すばらしいと思ったものである。

戦後の音楽人口の増加はむかしの比ではない。しかし、丹波だけではないが、地方に負わされたハンディキャップはいかんともなし難く、のど自慢やカラオケに浸る人々も、ことクラシックだのオペラだのとなると、およそ縁遠い別世界。そのような環境にありながら、地元関係の方々の地道なご努力で土壌つくりが進められつつあるとき、彼女の出現は、あとに続く若い人々に明るい夢を与え、丹波の文化に未来を開く灯とも思えてくるのである。

いまから三十年前、昭和三十六年五月の憲法記念日の佳き日、「春日局誕生の地」として脚光を浴びた春日町は興禅時に近く、呱々の声をあげた愛くるしい女の児があった。父は足立盛雄氏、母洋子さん。「五月生まれだったので、さわやかな五月の空のようにと、迷わず〈さつき〉と名づけました」と洋子さんは語る。その二年後、弟政明君が生まれるのだが。

盛雄氏については、残念ながら存じあげない。

私が洋子さんを知ったのは、昭和二十五年の春、彼女が柏原高校へ入学してきたときである。家庭科の生徒で、旧姓は桑垣といった。私が教科を担当することになったのである。

人間つまらんことを覚えているもので、そのころ、〝うちの隣のみよちゃんは、色が白くて小ちゃくて、前髪たらした可愛いい子〟などという歌が歌われていた。ところが、そのクラスのなかに、背格好から髪型まで、その歌そっくりの子が二人いたものである。そのうち一番前列だったかの席にいたのが洋子さんだった。歌に出てくる可愛子ちゃんと重なったことに加えて、実をいえば、私自身が「先生」などと呼ばれるようになったはじめての年だったことが、いっそう強く印象づけたのかもしれない。彼女は入学以来コーラスのクラブに入っていたのだった。しかしそのころ、彼女が音楽の先生になろうとは思ってもいなかった。ただどことなくしっかりした、粘ばり強い努力家だなと思ったことは確かである。いまは小学校の教頭さん、有望な先生である。

その彼女が盛雄氏と結ばれた機微については、残念ながら聞きもらした。しかしお二人がともに音楽の先生だったことを知れば、いまさらいわずもかなということかもしれない。

そうして結ばれたお二人が、将来生まれてくるであろう子に、はじめから音楽への道をと意識されていたかどうかは別として、少なくともその下地だけは十分だった。そこへ生まれてきたのが「さつきさん」だったというわけである。

「日本の子守うたから世界子守うたまで、よく歌って寝かせました」と洋子さんはいう。さつきさん自身は、まだ舌がよくまわらない二歳のころから、童謡や演歌など好んで歌い、なかでも都はるみの〝あんこ椿は恋の花〟なんていうのが好

きだったなど聞くと、なんとも微笑ましく、いまの彼女から、たまにはそんなのを聞いてみたい気もちに駆られる。しかしまた一面では、弟君と二人で、ベートーヴェンやモーツァルトの交響曲をレコードで聞きながら、指揮を真似て遊んだというから、栴檀のたとえ、双葉の香りを秘めていたといえるのかもしれない。

お二人が彼女を音楽に賭けることに決したのもそのころのことのようだ。おばあちゃんに連れられて、ヤマハの教室通いがはじまる。その後に続く厳しくも長い音楽修業へのスタートである。時に彼女三歳。

そして三年、小学校へ入学した彼女は、同時に新しい師を求めて、本格的な修業の道に励むことになった。先生は西宮在住の、当時神戸山手女子高校の先生だった中西覚師。月二回ほどだったというが、いまでもJR・電車を乗りついで片道約二時間、当時は早朝六時の列車で出かけての往復。小学校時代も毎回親が付きそうわけにもいかず、そのため昼食も食べそびれて、帰りは夕方になることも度々あったという。

その西宮通いは高校卒業まで十三年間続くわけだが、その間ピアノを始め音楽全般についての基礎を修める一方、中学校以後は、北野章子という先生（芦屋）について声楽の指導を受ける等、人知れぬ自己練磨の道を歩み続けた。彼女を声楽に目覚めさせたのは北野先生の影響なのか、大学入試にも声楽を選び、こんにちの彼女を決定づけることになった。

このように書いてくると、正規の学校などまるで無視したかと思われそうだが、さにあらずで、往々世間に見られる光景とは対照的に、教室の授業からクラブ活動、その他日常生活のすべてにわたって、自分をひけらかすような素振り一つ見せるでなく、ごく普通の茶目っ気の多い一人の子ども、長じては一人の若者として終始した、どこかこだわりのない大らかさの持主だった、というのが学校の先生の回想。

しかし、母親の洋子さん譲りというのか、彼女にはその大らかさの反面、あのか細く見える身体のどこにと思われるような、人一倍芯の強さがある。素質や才能もさることながらその志の強さが彼女をこんにちあらしめているすべてといえなくもない。またそれと同時に、彼女の周辺にそこはかとなく漂う、心豊かな家庭の雰囲気とでもいうのか、それが彼女を温かく育くみ支えてきたといえそうである。

ところが好事魔多しで、この母子の上に、ある日突然、予期しなかった不幸が襲いかかる。かけがえのない父親盛雄氏の不慮の死である。海での事故だったか、詳しいことは敢えて聞いていない。昭和四十八年、彼女十二歳、弟政明君十歳のときである。母子にとっても目先が真暗になるような衝撃だった。ようやく芽吹いたばかりの花芽に賭けた夢のすべてを洋子さんに托して逝った盛雄氏の心中は、氏のみぞ知る。

爾来やがて二十年、それは残された母子にとって、長い苦節の歳月であった。当時は一時沈み込んでいたという姉弟だが、苦節を乗り越えてきたいまは、暗い陰りの一かけらもない。彼女はその名の通りさわやかな表情で、きょうもまたどこかのステージに立っているのかもしれないと思う。

ただ丹波っ子とはいえ、酷ないい方だが、やっといま蕾を開いたばかり、丹波との馴染みも少ない。昭和六十三年、春日文化ホールのこけら落しの記念行事に催された、これも丹波が生んだ詩人・深尾須磨子の詩の作曲コンクール音楽会に招かれたのが里帰りの第一声、その後は平成二年、同三年といまだ日は浅い。将来せめて年二回ぐらいはと思うのだが、いまはまだ「日本のさつき」へと試練を重ねつつある大切な時期と思えば、それもしばらくは我慢というところである。

そんなわけで、春日文化ホール初ステージを機に結成された友の会の会員数もようやく百数十人というところだが、すでに述べたような丹波の現状からすれば、必ずしも少ない数ともいいきれない。そんなことより、一昨年の暮、「足立さつきと語る集い」で、テーブルを同じくした会長の村上照雄氏（春日町長）が、私にいったことばが記憶に残る。

「いろいろやっているうちに、聴衆のマナーもだんだんよくなってきました」ということである。いささか淋しい思いもするが、私にいわせれば、丹波にとってみれば、それだけでも大きな収穫だと思っている。

道は険しい。だがいつの日か、世界のさつきへと飛躍する日を夢見る人間の一人として、彼女を気長に温かく見守ってやりたい。

風雪に耐えてさつきのさわやかに
世にかおる日ぞ夢にまたるる

ふるさと〝ぎのこ美術館〟の夢

荻野美穂子（市島町）

私は市島町美和・白毫寺の出身です。荻野春治といとの次女として昭和十六年に生まれました。八ヵ月位のときに実父の弟・欽次の養女になりました。私が物心ついたころ、養父は柏原の屋敷で小さな「おぎの百貨店」を経営していて、日常雑貨のほか、やきいも、貸本、紙芝居等もしていました。崇広小学校のころ、私は絵を描くのが好きで、山本求先生について習いました。当時から私のニックネームは「ぎのこ」、荻野のギノからついたのです。

崇広小学校四年の五月に一家で上京し、私は浜松町の桜川小学校に転校、愛宕中学、都立八潮高校を出て、京橋の三菱レーヨンに勤めました。しかし私の絵心やみがたく、長沢節先生の「セツモードセミナー」にファッション・イラストを学んだり、二年間ほどはファッションモデルもやりました。やがて結婚、昭和四十四年には娘・優美が生まれましたが、それから二年十ヵ月後に離婚いたしました。養父母とは別居していましたので私は娘をつれて母子寮に入りました。それと同時に養母の花枝を亡くしました。養母は華道・茶道、フラワーデザイン、リボンフラワーなどを教えていました。養父は養母の看病づかれもあってか心臓病を煩いましたので、養父、娘とともにやむなく市島町美和の実の父母の元に戻りました。その二年後には養父もまた他界しました。私は市島では大塚工場、西山酒造場、郡民会館と勤めましたが、かつての絵心はつのるばかりでした。絵描きになりたい、きっとなれる……と。そして娘の中学進学を機に、七年半暮らした丹波を再び後にし上京しました。養父母を失ってからは、おじちゃん、おばちゃんと呼んでいた実の父母が、私にとって最愛の、ほんとうの父母になりました。

東京へ出てからは、絵筆で生計を立てようと心を決めて、毎日、イラストをかかえて売り込みの大作戦をくりひろげました。その間、娘にもひどい苦労をさせましたが、十年後の今年は、おかげさまで大学を卒業し、就職をしてくれます。

関東氷上郷友会の集りには、二年前から出席させていただいております。同郷の方々に親しく接すると、これまでずっと孤独だった東京に、親戚が急に、しかもたくさんできたような気がして、とても心丈夫になりました。

空気も建物もグレー一色の東京にあって、心までグレーに染まりそうな毎日を暮らしておりますと、緑色だけのキャンバスに星のしずくで描いたような、そんな美しくも清らかな郷里をもつ嬉しさは、たとえようがありません。

ふるさとの実家のそばに、百年前の家をつぶした材木で造った、小さなもとの我が家があります。今は物入れにしていますが、将来いつか、私の絵を並べ飾って、私のニックネームで〝ぎのこ美術館〟と名づけたい。そんな夢も、父八十六歳、母七十七歳、元気なうちにと願っているのです。

とはいえ、現実の私は、しがない無名の絵描きです。ぎのこ美術館のことは、夢のまた夢でしかないのですけれど、これからも絵ひとすじの望みに人生を賭けつづけたいのです。

今日までイラストレーター（日本クリエーターズ協会々員）として、広告、雑誌、テレビ、カラオケ、壁絵など、何でも描いてきました。水彩画家としては美術年鑑にも載っていますが、新宿住友ビル洋画ミニチュア大堂展で優秀賞、審査員奨励賞、日本芸術協会特別賞のほか、フランス画壇の巨匠、サージ・マルジス氏が審査するサージ・マルジス賞もいただきました。そのほか、東京牛込の訓練校でデザイン画の講師もしております。また東京青山の福祉会館や郷里春日町の三相園などには、私の水彩画を飾ってもらっています。お近くに来られましたおりに、ご高覧いただけましたら幸いです。

今日も韓国から「亜細亜国際美術展」に招待出品の依頼が届きました。有難いことです。がんばります。

こんな私ですが、郷友会の皆さん、お見知りおきいただいて、ぜひ応援ください。お願い申しあげます。

きめこみ人形に魅せられて

足立美屋子（真矢花）

遠い日、次男がランドセルを背にしていたころ、私は「きめこみ人形」に手を染めました。それから二十余年、いつのまにか長い年つきが過ぎ去って行きました。

愛らしい、夢のある人形をつくりたいと、いまも楽しみながらつくりつづけております。雛人形は十七人飾り、十五人飾り、親王雛、立雛などなど、数えきれないほどつくり、多くの方々に喜ばれています。

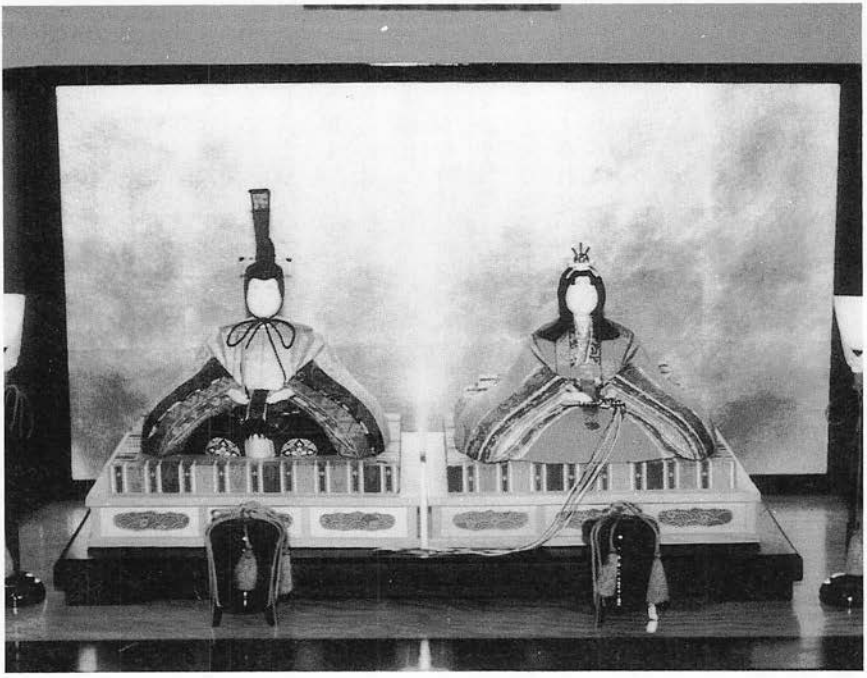
毎年二月に、関西に出かける機会があります。私のお友だちが最近、次つぎと〝おばあちゃん〟になり、そのお孫さんたちに贈る雛人形や五月人形の製作を、次からつぎへと頼まれるからです。

十二単を着ているように、美しい布を重ねていく手造りですから、それはそれは喜んでくださいます。テレビ等で、皇室の公式行事のときのお召物を見て参考にしたり、時代劇のドラマなどに登場するそれや、平安絵巻のあでやかな色彩など、私にはとてもいい勉強になります。

毎週火曜日には、自宅で人形教室を開いております。また毎年十一月、十二月には、二尺の羽子板（押絵）の制作もやっております。人形づくりを通じての、いろんな人との出合いは、私にとって貴重な財産なのです。六年前、私は思いもかけぬ病気をいたしましたが、そんなときの悲しさやつらさも、お人形の製作をすることによって、どれほど慰められたことでしょうか。

郷友の皆さまも、およろしければどうぞお越しくださいませ。

（足立謙悟夫人）（写真は親王雛）



「太平記」に登場する石龕寺

堀井隆川（山南町）

ＮＨＫの日曜日放映の大河ドラマは、今年から吉川英治原作の「私本太平記」をもとにした『太平記』のタイトルで始まった。脚本は池端俊策氏と仲倉重郎氏で「足利尊氏を主人公に楠木正成・正行・後醍醐天皇、新田義貞など魅力あふれる歴史の人物が、動乱の世に登場した時代を、今まで描かなかったのは、もったいないくらいだ」と意欲的にその筆を進めたと報道している。しかし、戦記物語といわるる「太平記」の時代は、過去二十八年間のＮＨＫ大河ドラマでも、一度も取り上げられることのなかったわけがあるようだ。

すなわち鎌倉幕府の滅亡直前の文保三年（一三一八）から室町幕府将軍職に義満がつく貞治六年（一三六七）までの約五十年間、南北朝時代などと呼ばれる壮大な日本の内乱期である。

この時代は、鎌倉幕府の滅亡・建武新政の樹立と崩壊・室町幕府の成立という大きな政治史上の変化の中で、現実には歴史を動かしてきた人たちの動向は、このように呼ばれる体制の中だけでは把握しきれない複雑さの背景があったようだ。天皇家は、すでに持明院統と大覚寺統にわかれて、絶えず皇位継承をめぐるトラブルがあり、公家たちもその渦中にあった。内乱のさなかには南朝と北朝が分裂し互いに天皇を立て、年号も二種類あったようだ。武士たちの争いも鎌倉幕府成立期の源平の対立というような単純な二派の争いと異なり、力を蓄えて守護大名化しようとする各家のしのぎを削るせめぎあいとなる。

公家も武士も互いに相手を利用し、あるいは滅ぼしてしまおうと策略し、巧みに人をあざむくはかりごとをめぐらしていた。さらに社会情勢・経済面また農村のあり方すべてにわたって多様化してきた。

このような時代を対象に「太平記」は記述されていることが、漢文調や装飾をこらした表現で分量（全四十巻）も多いということもさることながら、作品に描かれた世界が一筋縄ではとらえきれない複雑多岐なものであるところに、読むものの障害になっているようだ。

しかも日本の古典の中で、読まれかたが戦前と戦後で百八十度ほどにも転回した作品の筆頭は『太平記』といわれる。戦前の歴史観では、後醍醐天皇を基点とする皇国史観という名の幹線だった。この本流の幹線に右がわから流れ込む支線は、いわゆる忠臣楠木正成・正行、新田義貞、児島高徳、名和長年ら。左がわはいわゆる逆臣北条高時、足利尊氏、高師

直らである。これは皇国史観による熱心な歴史教育のおかげであろうが、戦後の歴史観は人物評価が逆転することは珍しくなく、かつては極悪の逆賊（逆臣）とされた人物が、後には進歩的な改革者と評価されることもある。とりわけ巧みな全国制覇の勢力伸長の英雄という言動描写の尊氏はそれであろう。

しかし、一方の楠木正成は、歴史の上で武将として活躍したのは、長い南北朝の戦乱のごく初期一三三一年から三六年までの五年間だけで、戦いの主役となったのは河内での鎌倉幕府方との戦いと、敗戦に終った湊川の戦いぐらいでほかは脇役だったようだ。おもしろおかしく書かれているその奇策奇兵の術についても確たる証拠が見当たらない。千早城の戦いにしても、そんなに長い期間ではないのである。その意味では史実を尊ぶ実証史学から楠木正成を、それほど重視しなくなったのも納得できる。歴史のスターの座から脱落し、評価の対象から外されてしまったと考えられる。

だが、こんな人心常ならぬ複雑な時代であったからこそ、思いがけない事件の真相や、人間の赤裸々な生き方や出会いや別れが出現することにもなったわけで、この古典がすぐれた文学作品の対象として、より興味深い時代でもあるのだ。作者はよけいな先入観や涙や詠嘆に没入することなく、強い叙事精神で、複雑な史実を冷静に描写している。痛烈といえる批判の姿勢で政権争奪にあけくれる政治を斬っているようだ。またタイトルの如く、果てしなく続く戦乱の彼方の太平を、民衆の厚い願いとしても記述したと思われる。

◇　◇

さて、「太平記」巻二十九に従って、少し記述を覗いてみることにする。

観応二年一月十六日夕やみ迫る頃であった。弟直義らとの戦いに敗れた足利尊氏は、京の都より兵を引き連れ、丹波・岩屋のむらに着いた。尊氏は息子（三男）の義詮〈のち二十九才で室町幕府の二代将軍となる。元弘三年、四才のとき尊氏の名代として新田義貞とともに鎌倉攻めに参加した。南北朝期の初期は鎌倉にあり、細川和氏他の助けで南朝方の北畠・新田軍と戦う。貞和五年の京都騒乱時は二十才、上洛して幕政を執った。文和元年〜四年、北畠顕能、楠木正儀らと畿内各地で戦った。病んで政務を長男、義満に委わったのは貞治六年、三十八才の時でこの年歿す。〉を石龕寺にとどめ置き、自らは播磨の書写山に陣を構え再挙を図った。

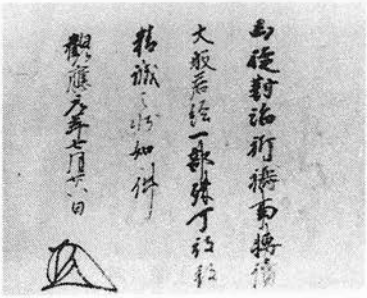
石龕寺は四方の峰高く、まるでお城のようであった。この義詮に、仁木頼章・義長兄弟を付き添わせ、二千余騎であった。寺の檀信徒が相寄り、兵士の食糧と馬の糟藁にいたるまで山の如く積み上げて寄進した。久下一族も応援に馳せ参じ、心休まる義詮であった。

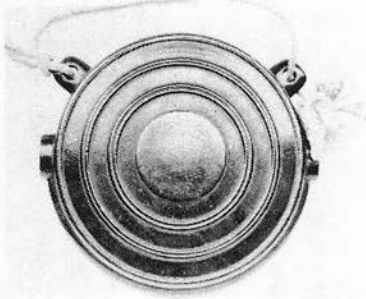
それは粉雪吹き舞う朝でした。この時石龕寺（当時は数多くの堂舎僧房あり、本坊は多聞院）院生雲暁僧都は、勝軍毘沙門天の修法を執行し義詮も大いに信心を起こした。その毘沙門天の擁護と徳を得て、天下を治めることができると悟り、手を合わせ感激の涙をのんだとある。

宝物として尊氏の御教書が二通、現在額に入れて保存されており、町の指定文化財になっている。観応元年（一三五〇）七月二十八日付で尊氏花押（印）のある尊氏と弟直義の抗争時に祈願したもの。（写真参照）もう一通は文和三年（一三五四）十月二十三日のもので、直義討滅の天下平安を祈願するものである。

この他に建武四年（一三三七）卯月三日奉納の銘文が刻されている尊氏寄進と伝えられる（確証はない）鰐口（右下写真参照）がある。これは県指定文化財で、径二十七・二センチの銅鋳製。一鋳になる重厚な趣きの釣り環と、通形と異なる無文の撞座が特徴的である。表裏とも撞座と同心円をなす二本一組の圏線三条で、三区に分けているだけであるが、装飾をほどこさず簡明直截な表現が、小振りながら力強さを感じさせる。

この寺は、鎌倉仏師定慶（運慶・快慶と共に三慶と云われる一人）一派が造立した仁治三年銘を胎内にとどめる仁王門の金剛力士像（国指定重文）をはじめ、同時期の金剛鈴（三





個）や扁額（寺伝によれば、村上天皇が能書家小野道風に命じて書かせたとある？）など伝えるこの地方での古刹であったのだろう。尊氏が、この争乱期に御教書を発し、祈禱を乞うということは由来と効験高く、鰐口まで寄進したと伝える当寺の隆盛のさまを物語る遺品として注目される。

市井で「丹波栗」といえば一目置かれる名品種とされるが、原産地は当寺のある岩屋村といわれる。義詮は、五十日余り石龕寺に逗留し、観応二年三月十日、二十二才の若き将軍は丹波を後に京へと向かったが、この時にまつわる話が、「天々宇知久里之実説并搗栗を祝物に用事」という版木に残されている。（図版参照）

老僧が、岩屋山麓の名産丹波栗を一籠献上した。義詮はその中の大きな栗を一つとって爪あとの印をつけて、一首の和歌を添えてその栗を植えさせた。

「都をば出て　落栗の芽もあらば
　世にかちぐりとならぬものかは」

これは、もしこの栗が芽を出せば都に出たことであり、成木して実れば天下をとった（「搗ち栗」が「勝ち」の音に通じるので、祝賀の時などに使う）首尾よくその通りとなり、今もその栗の品種が残っており、「てていち栗」「爪あと栗」と呼ばれ、足利氏ゆかりの地として当時の面影を偲ぶことができる。

ヤマノイモ談

奥田康夫（篠山町）

丹波高原地帯に産するヤマノイモは、世界に多く分布するヤマノイモ（約六百種）の中でも最も高級で、肉質緻密、粘り極めて強く皮部強健で、長期貯蔵に耐え、一種高級な蛋白質（ミューシン）、酵素に富む滋養強壮・強精スタミナ野菜として伝わってきた。用途も広く、食用や加工用として、また生食で植物性生体蛋白を摂取できる点では他食品の及ばぬところである。

「切りイモ」といっても、今ではこの呼名を知る人は少ないのではなかろうか。私が幼い頃よく耳にしたものである。「切りイモ」とは山の芋のことで、「種イモ」を切って栽植することから出た呼名だ。私の幼い頃は山の芋という人は少なかったようである。

丹波地方における山の芋は、古く江戸初期―中期から自家用として栽培が始まったと聞く。伝来については、外部からの移入説、山野に自生する自然薯からの改良といった説がある。私は敢えて、自生の自然薯から改良したものと考えている。何故ならば、丹波地方における「切りイモ」の元祖とも

いえる栽培地をみると、現在の篠山西北部より西紀、柏原の鐘ヶ坂付近（各地で多少系統は異なっていたようである）にかけて一つの線で結ばれた地域である。この山野に自生する「イモ」を長年、改良に改良を加えて今日に至ったものであろうが、その改良方法については現在もなお不明である。

ヤマノイモは栄養繁殖なので栄養系分離によるものだろう。自家用として栽培してきたものを、販売を目的として栽培しはじめたのは明治三十年頃と聞く。戦時中は栽培面積も減ったが、戦後昭和二十八年頃から品種改良と栽培技術の研究が進み、大きな換金の作物として営農の合理化にも役立ってきた。現在も減反転作の一環として栽培面積も急増、全国的にも特産物として有名になり、全国の五〇％以上の生産高を誇っている。

ところで、古人が長年にわたって改良を加えてきた在来のものは今見ることができない。残っているとしても改良種と混合しているのではなかろうか。今日まで保存できなかったことが今さらながらも悔まれてならない。

在来のものについて私の知る限りでは、丹波ヤマノイモの元祖ともいえる地域は、ある一部に限られていた。芋は多少小型で収量も二割程度と少なかった。この限られた地域は湿田地帯で強度の粘土質のため栽培に労を費していた。冬期から極力排水に努め、麥との二毛作（三年に一度の輪作）で、ほとんど自給肥料（下肥、焼土、菜種粕等）で栽培されていた。こうした地域の気候風土がヤマノイモ栽培にぴったり合ったのであろう。

ある講演会で適地適作について話を聞いたことがある。適地適作を見出すには付近の山野に自生する植物に属する作物を栽培するのがコツであるということだ。

過日某新聞の報じるところによると、ある市内のトマト栽培農家が「原生地栽培」という栽培法で高品質化に成功しているという。原生地（原産地）の気候に近づけるため水、肥料も通常の十分の一に抑さえ、完全無農薬で栽培する特殊なやり方だが、収量が落ちる代わり濃密な本来の味となるため高値で引き取られ好評を得ているとのことである。この記事を読んで私は感動した。

省りみるまでもなく、われわれはただ時流に流され、あまりにも人間中心主義に陥ってはいないだろうか。何でもかんでも、自然そのものまで自分の思い通りになるように錯覚して、自然をも人間の好き勝手に利用して平然としている。人間も自然の中の一員であることを全く忘れ去っているような気がする。より深い世界をみつめ、遠い光に向かって、次の世代のため、自分で選び信ずる道を、謙虚に一歩一歩ずつ歩いてゆきたいものである。

（奥田宅建経営。戦前より山の芋を生産）

丹波の足立氏・芦田氏について

足立晴治（青垣町）

丹波氷上郡特に青垣町を中心にして、南但馬、京都府天田郡に「芦田」「足立」姓を称える者が多い。

足立氏については、神戸新聞社発行「兵庫探検・総集篇」に、

氷上町に住む郷土史家細見末雄氏が昭和五十三年の電話帳で調べたところでは、氷上郡の足立さんは一五七六、多紀郡四四、隣の京都府天田郡七八五、綾部市五四、船井郡一九、亀岡市二一という数字がでた。県下では九百近い青垣町と遠坂峠を隔てて接する但馬の朝来郡が三三六、養父郡五〇、豊岡市六二、多紀郡の南の三田市で一九、青垣町と北部でつながる播磨の多可郡一五七、その南の西脇市五九、おもしろいのは「丹波の……」といわれながら、多紀郡より多可郡加美町に一二三もあることだ。あるいは丹波同士の多紀と氷上を結ぶ鐘ヶ坂峠と播磨の国境にもなる青垣町と加美町の間の峠（播州坂）の方が越えやすかったのかもしれない。この分布から「足立さん」の中心は青垣町らしいと見当がつく。

と書かれている。系図によると、足立氏は藤原魚名流で、足立遠元が武蔵国足立郡に住み足立氏を称したのが初めのようである。足立遠元は源頼朝に仕えてその武術指南であった。彼の活躍は保元物語や吾妻鏡等に頻出している。一例を挙げると、建久元（一一九〇）年十一月十二日（吾妻鏡・巻九）の条に、十一日辛卯前右大将家令三参二院内一給数刻御祇候御家人十人募二成功一被三挙二任左右兵衛尉等一是依二度々勲功労一、可三挙二申廿人一之旨所レ被二仰下一也、幕下頻雖レ被レ辞二申之一勅命再任之間略被レ申三任二十人一云々

右衛門尉　藤原遠元　同賞之前右馬充

（他略）

頼朝は家の子をはじめとした家人の叙位叙勲を統制し、頼朝の推挙なくして叙位叙任されることを厳禁し、もしみだりに叙位叙任されたものは返上させ、命に背くものには所領を没収し、追放という厳しい態度をとった。朝廷の力が直接家人に及ぶことを警戒し、家人が朝廷に親しみ鎌倉を疎んじる気風を予防して武士が頼朝の下に一致することをはかったものであろう。この時代の成功とは皇居の造営や即位の大礼等に金品を献じて叙位叙任されることをさした場合が多いが、ここでは公事を勤めて勲功のあったものを叙任するという本来の意味で、後白河法皇からこれまで度々勲功のあった二十人を推挙するよう仰下された頼朝は辞退したが、重ねての仰せにより十人だけを推挙し、左右の兵衛尉、左右の衛門尉に

任ぜられた。足立遠元は藤原氏の出身で足立郡に住し足立を名乗ったので、ここでは藤原遠元としたものであろう。（桶川市史）

遠元の孫遠政が承元三（一二〇九）年丹波氷上郡佐治郷の地頭職に任ぜられて来郡し、山垣村向（むかい）の万歳山に山垣城を築き、山垣村に館を構えたのが丹波足立氏の初めである。

この頃関東武士が守護・地頭として関西地方に多く任命され、足立氏が丹波に着任した頃は既に地頭や庄官として郡内各地に武士団が形勢され、それぞれ勢力伸張に努めていたが、周囲を山で囲まれ、佐治川によって南方にのみ開けた佐治郷の天然の地形が大いに足立氏に味方したと思われる。

応仁の乱が始まると、丹波は東軍の総師細川氏の守護地であり、山一つ北の但馬は西軍の旗頭山名氏の支配する処であったから、早速応仁二（一四六八）年山名氏の武将太田垣宗朝（竹田城主）が遠坂峠を越えて丹波に侵入し、所々に放火して佐治青梨山に陣し、先鋒は犬山野（氷上町犬岡）まで進出した。しかし丹波国人のゲリラ戦による反撃を受け敗退せざるを得なかった。

同年八月守護代内藤貞範に率いられた丹波国人久下、長沢、荻野、本庄、足立、芦田らは大枝山（老の坂）を越えて嵯峨に入り、九月六日天龍寺に放火し、臨川寺・宝憧寺を焼き、山名是豊、一色義直らの陣取っている舟岡山を陥しいれて気勢を挙げた。（生郷村志）

その後永禄二（一五五九）年山名祐豊山垣城を攻む。足立丑之助政之守る。波多野軍曹鉄砲を連発し放火退陣す。（青垣町誌）

波多野軍曹秀光の墓は朝来郡山東町大内にあり、その時使用したという鉄砲も子孫から寄贈されて山東町歴史資料館に保存されている。鉄砲がわが国に伝来してから僅かに十三年後である。

次に元亀二（一五七一）年十一月十七日但馬の山名祐豊が突然遠坂峠を越えて山垣城の足立基晴を攻め民家に放火した。急報により氷上・天田・何鹿（いかるが）奥丹波三郡の領主赤井忠家その叔父荻野直政（黒井城主）が直ちに馳せつけてこれを救い、但馬勢を峠の向うへ退けた。更に直政は敗敵を追って但馬に進出し、竹田城を占領、なお進んで山名氏の本拠出石に迫った。（生郷村志）

この二度の山垣合戦のうち、元亀二年については夜久野城主磯部豊直が岡村秀清に与えた感状が前記山東町資料館に所蔵されていて確かに実証されるが、永禄二年の合戦を証する資料は現在のところ発見されていないようである。ただ「丹波史年表」十一月十七日の前記の記述が唯一の資料となっているらしい。

足立氏が滅びたのはこの後織田信長の命を受けた明智光秀、

長岡（細川）藤孝の連合軍の援軍として但馬の竹田城にいた羽柴秀長が天正七（一五七九）年また遠坂峠を越えて丹波に侵入黒井城の攻略に参加しているので、その進路に当る足立・芦田の諸城は同年三月頃悉く落城したのではなかろうか。

芦田氏

系図によると芦田氏の祖は清和源氏で源頼義の弟頼季から出ている。頼季の三代の孫家光が丹波に謫され芦田村に住む。（丹波史年表）とあるのが丹波芦田氏の初めのようである。家光については「丹波戦国史」に要領よくまとめてあるので、これを引用する。

芦田（又は葦田）赤井・荻野三家は同族でその祖は信濃国高井郡上村から丹波へ移り住んだ井上大炊介判官代家光（満）である。家光の先祖は清和天皇五代の孫源頼信の三男頼季で、その流れは清和源氏頼季流と呼ばれている。頼季の子満実は井上姓を名乗った。満実には四人の男子があったが、故あって長男の遠光は隠岐の国へ、三男家光は保元三（一一五八）年に丹波芦田庄へ流され、今の兵庫県氷上郡青垣町東芦田に住居した。井上家はもと信濃国佐久郡芦田村から出ており、丹波へ移った家光は、家郷の名をとり芦田姓としたのではないかという説と、もともと芦田庄には葦田氏がいて、東芦田へ移った家光は、土地の豪族葦田党の栗住野岑用の娘を妻とし、葦田姓としたという説とがある。

このことについて、太田亮著「姓氏家系大辞典」は丹波の葦田氏は丹波国氷上郡芦田村より起りしならん。されど系図には信濃より移るという。此の流芦田氏のことは「尊卑文脈」に井上九郎家光—光平—光遠（葦田二郎）と見え、「赤井系図」には、頼季—満実—家光（芦田祖）—道家（丹波半国押領使）—忠家（芦田判官代）—家範—朝家—為家（赤井九郎・赤井祖）また別本には、家光—道家—忠家（芦田八郎）—家範—朝家—為家（赤井九郎）……家紋瞿麦（なでしこ）、雁金（かりがね）と截せ、家光に註して「大炊介、判官代、信州葦田に住む、故ありて丹波に配流せらる。」と記し、道家には「丹波半国の押領使」と記す。朝家は承久の乱に所領を没収せられ、その子為家は赤井九郎と称し、その子忠茂を経て又次郎基家に至り尊氏に属して一族繁栄す。（以下略）と截せている。芦田庄は東芦田、田井縄・西芦田、栗住野、塩久の五村より成っていた。芦田庄へ家光が移った頃は、保元の乱（一一五六）の直後で源氏の族である井上党にとっては試練の時であった。平治元（一一五九）年には平治の乱が起き、源義朝は平氏に殺され、その子頼朝は伊豆に流されて、世は平家の全盛時代に入るのである。平重盛が何鹿郡綾部里を領地とし平教盛が丹波権守に任ぜられるなど平家の権勢が丹波を席捲したころ、芦田家光が忍従を余儀なくされたのはいうまでもない。

しかし治承四（一一八〇）年、源頼朝が源氏再興の旗を挙

げ、文治元（一一八五）年、平家が壇の浦の戦いに敗れてからは状勢は一変して、源氏ゆかりの葦田一統にわが世の春がめぐってきた。

家光の子道家は政治的にも軍事的にもすぐれた実力者であった。次第に勢力を丹波氷上郡から天田、何鹿、船井郡へのばし、やがて丹波半国の押領使となる。押領使とは地方ごとに治安の乱れに対処させるために郡や郷の有力な豪族を為政者が任命し、其の職務は一揆の鎮圧、盗賊の逮捕、荘園領の保護などであった。芦田家は道家、忠家、政家（家範）の三代にわたって丹波半国の押領使となり、地方豪族の地位を確立して、権勢を誇ったのである。これは井上家光の丹波へ移った時期が早かったからで、当時の奥丹波には荘園領が多く、氷上郡には本庄、長尾その他土豪が割拠していたが、その力は大したものでなかったので、営々として勢力の拡大につくした努力がごく短かい期間に実ったのである。

鎌倉幕府から派遣された地頭職が関東から移って丹波に割拠するようになり、吉見資重が鹿集庄（市島町）、足立遠政が佐治郷（青垣町）、久下直高が栗作郷（山南町）へ移ったのは家光が芦田庄に居を構えてから四～六十年後である。芦田氏の優位は当然であったといえよう。

東芦田の芦田氏の居城を東芦田城又は小室城と呼んだ。村の西、吼子尾（五一九メートル）の頂上近くにつくられた城は、奥丹波ではもっとも古い山岳城の一つである。丹波から遠坂峠越えに但馬朝来郡への街道（旧山陰道）と天田郡へ通じる穴の裏峠の分岐点が山の南のふもとにあって、どちらの街道も眼下に長々とみえて攻守にすぐれた地形である。

東芦田城のすぐ下に養老二（七一八）年に法道仙人が開基したといい伝える天台宗の古刹吼尾山胎蔵寺があって、城は胎蔵寺の参道を大手としていた。城が亡んだのは室町時代後半の長享二（一四八八）年で丹波を舞台にしてくり広げられまた細川政之と山名一族との戦いに葦田氏はどちらにもつかず日和見をしたので、勝った細川方に攻められて落城したということになっている。城主は芦田八郎金猶であったと伝えられているが、しかしこれは誤りである。

もちろん芦田八郎は城主であって東芦田の端雲寺を菩提寺として深く帰依し、同寺に丹波守護だった細川満之（応永三三―一四二六年没）を祀るなど、いわば細川家を主筋とした律気な人で、細川家に逆いたとして攻められるというのもどうかと考えられるし、金猶はその前年の長享元年三月に死亡し瑞雲寺に葬られている。戒名は體翁院殿芦田八郎金猶源泉長流大居士という。金猶の弟に七郎金朝がいた。二人はなかなか善政を布いて領民から尊敬を受けた。東芦田の産土神高座神社の境内社の若宮神社は、城主の徳をしたう領民によって金猶をまつったのが始まりといわれている。その金猶の死

後三年目の延徳二年には東芦田城の芦田六郎少将家次が領地と接する佐治域（青垣町佐治）の上山中兵衛を攻略したという記録があるから、その時点までは東芦田城は健在だったのだろう。

以上「丹波戦国史」の記述について二三筆者の考察を述べることにする。

1、先ず井上、芦田、赤井は確かに同族だが、荻野は芦田氏が丹波に来住する以前からこの地に住んでいたようである。「生郷村志」にはこのことが詳しく論証されている。

2、芦田家光が丹波に流されたことと保元の乱とは何等かの関わりがあったと思われる。芦田系図によると芦田氏は木曽義仲に属していたのではないかと考えられるふしがある。

3、井上家光が芦田を称したことについて二説を挙げているが筆者は前記をとる。

家光は信州佐久郡芦田から丹波に来住し、この地を芦田庄と称し、その居城を故郷の字名に因んで小室城と名づけたのであろう。芦田荘は仁和寺の荘園として「丹波の荘園」には出ているが、家光はその下地を領していたのではないかと思う。然らば家光の来住以前この地は何と呼ばれたのか。それは判らない。

4、小室城趾は今も殆んど往時の姿のまま遺っている。筆者の子供の頃は「城の丸」と呼んで旱魃の年には頂上の平地（本丸跡）で雨乞いの大かがり火がたかれたりした。今は登山道に案内札を建て、元日の未明から初日を拝みに大勢の人が登る。

5、東芦田に殿谷という字があり、そこには馬場、殿屋敷、発塚（おこづか）、代官という小字もあるから、そこに芦田氏の館があったのかもしれない。

6、芦田八郎金猶が瑞雲寺を建て細川満元を弔ったのは嘉吉元（一四四一）年となっている。（丹波史年表）瑞雲寺には芦田氏代々の石碑があり、細川満元、芦田金猶の位牌が本堂正面に今も丁重に祀られている。但し金猶の位牌は後世に新調されたのではないかと思われ、二つの位牌は形式的にも年代的にも大分相違がある。

7、八郎金猶、七郎金（兼）朝の名は実は芦田系図には出てこない。しかし金猶、金朝兄弟の名は筆者は子供の頃からよく聞かされていて東芦田の住民にはかなり親しまれた名前であったらしい。系図の中に二男家業というのが出ていて江古若宮と書かれている。これが或は金猶のことかも知れない。高座神社には若宮、兼朝社という二社があり、それぞれ金猶、金朝を祭神とすると伝えられている。現在芦田氏の子孫の本家屋敷がある所は江古という小字である。

氷上郡の方言を集めた貴重な資料を、足立源治さんから提供されました。足立さんの実兄・足立晴治さんが田舎の古物店で発見されたということです。

謄写版刷り五十数ページの小冊子ですが、これが、いつ、どこで、だれによってつくられたかは、全くわかりません。内容から推察すると、多分大正期、下っても昭和のごく初期のもの、国語文法に詳しい人の仕事のようです。今は使われなくなった方言も散見、祖父母の口調など思い出します。（玄）

方言調査（氷上郡）

一、一音又ハ拗音ノ名詞ハ語尾ヲ長クスルコト多シ

木→きー　葉→はー　蚊→かー　戸→とー　酢→すー　田→たー　茶→ちゃー

二、連続セル談話中動詞ノ終止後ニ接続ノ助辞「と」ヲ挿入スベキ場合ハ省クコト一般ナルガ如シ

行くと云ふた→行く云ふた　帰ると云ふた→帰る云ふた

接続ノ助辞「て」ヲ挿入スベキ場合約メテ言フコト多シ

行ってゐた→行っとった　帰ってゐた→帰っとった　しておった→しとった

三、疑問ノ「か」ガ「こ」又ハ「け」又ハ「ん」ニ発音スル

そーせんか→そーせんこ　又ハ→そーせんけ　行くのか→いくのん

四、二音中ノ一音ガ何レカ母音ニシテ語尾ガ「エ列」ノ音ニアタルトキハ初メノ音ヲエ列ニ化シテ発音スルノ例多シ

きえる→けえる　いへ→えー　いれる→えれる

右ノ二音ガ中間ニ挿マレタル場合ハ之を約メルコトアリ

をしえる→をせる　かぞえる→かぜる

五、清音ノ転訛言　ア行イ音ノユ音ト化スルモノ

いわし→ゆわし　いわ→ゆわ　いくさ→ゆくさ　ノ如シ

ウ音ノオ音ニ化スルモノ

うさぎ→おさぎ　うなぎ→おなぎ　うなづく→おなづく

ヤ行ユ音ノイ音ニ化スルモノ

ゆび→いび　ゆげ→いげ　ゆでる→いでる　ノ如シ

カ行キ音ノケ音ニ化スルモノ

きつね→けつね　きせろ→けせろ

サ行ノ各音ハハ行ノ各音ニ転訛ス　殊ニ然リ、為、左様ノ語ハ殆ンド皆ハ行ノ音ニ化スルモノゝ如シ

何々さん→何々はん　しませうか→しまひょーか　せん→へん　しなされ→しなはれ　しち→ひち

ハ行ノヒ音ガシ音ニ発音スルモノ

ひと→しと　ひとつ→しとつ　ひたゝれ→したゝれ

サ行ノサ音ガシャニ発音セラルゝモノ
ざくろ→じゃくろ　ざこ→じゃこ　さなぎ→しゃなぎ　ちさ→ちしゃ
しゃガサ音ニ化スルモノ
しゃしん→さしん　しゃちょう→さちょー
しゅガシ音に化スルモノ
しゅちん→しちん　しゅす→しす
ナ行ヌ音ノノ音ニ化スルモノ
ぬの→のゝ　ぬらくら→のらくら
ハ行ヒ音ノヘ音ニ化スルモノ
ひし→へし　ひきこむ→へきこむ　ひらたい→へらたい
ハ行ホ音ノフ音ニ転訛スルモノ
ほくち→ふくち　ほころび→ふくろび
マ行ミ音ノメ音ニ化スルモノ
みがく→めがく　みけん→めけん　みえる→めえる
マ行ム音ノモ音ニ化スルモノ
むせる→もせる　むつき→もつき　むつ→もつ

六、獨音ノ転化音
ザ行ノ各音ガラ行又ハダ行又ハガ行ニ誤ルモノ多シ
ざしき→だしき　じしゃく→ぎしゃく　すゞり→するり
ぜんまい→でんまい　ぞーり→どり　かんざし→かんだし
ダ行ノ各音ガラ行ニ誤ルモノ多シ
だんぱん→らんぱん　つれだって→つれらって
ラ行ノ各音ガダ行又ハザ行ニ誤ルモノ多シ
りょーじ→りょーり　又ハ→じょーり　りれき→じれき

七、一部デハ何々せんト云フ事ヲ約メテ「っせん」ト云フ
ありません→あっせん　きてをりません→きとっせん

八、そトとノ発音ヲ誤ルモノ多シ
ぞーきん→どーきん　ぞーり→どーり

九、ざトだトノ発音ノ相違多シ
ざぶとん→だぶとん　ざしき→だしき　ざいもく→だいもく

十、でトれトノ発音ヲ誤ルモノ多シ
です→れす　でも→れも　でんぽー→れんぽー　目でたい→目れたい

十一、どトろ又ハぞトノ発音ノ誤リ多シ
ぞーきん→どーきん　ろしゃ→どしゃ　ろーか→どーか
ろくろ→どくろ　ろーそく→どーそく

十二、ずトるノ発音ヲ誤ルモノ多シ
みづいれ→みるいれ

十三、らトだトノ発音ノ相違多シ
らいげつ→だいげつ　らいべう→だいべう

十四、リトじトノ発音ノ誤リ多シ
じんりき→りんりき　りょうがわ→じょうがわ

〈方言用例〉

あし(足)→ほだ
あたま(頭)→どたま
ありませぬ→ありまへん
　→おまへん→▽あっせん
あります→おます→あーせん
あふる(溢)→つりこす
あはび(鮑)→あおび
あやつ(彼奴)→あいつ
あふる(煽)→あおろ
あからぶ(赤)→あころぶ
あくるあさ→あしたのあさ
あくるひ→あした→あくりひ
あざ(痣)→あだ
あざみ(薊)→あざめ
あばた(痘痕)→へんばくちゃ
あてる(中)→かつける
あね(姉)→ねー▽あねんこ
あゆ(鮎)→あい
あふい(葵)→あおい
あかざ(藜)→あかだ
あぐらかく→あぐたかく
　→ひらぐた→ひらまた
あくるとし→あけのとし
あけのみょうじょー(暁明星)
　→あけのみょーじん
あさめし(朝食)→あさいめし
あほう(阿呆)→あほたれ
　→あんつく
あにでし(兄弟子)→あんでし
あんばい(塩梅)→あんじょー
あびる(浴)→あべる
あほーらし→あほらし
あかご(赤子)→あかす
あまり(余)→あんまり
あけび→あくび→あきび
あきはさん(秋葉山)→あきゃ
　さん
あやうし(危険)→あぶない
　→あやしい
あのように→あないに
あとずさり→あとじょり
あそこ(彼処)→あしこ
あなた(汝)→あんた
あたまのうえ→てっぺん
ありじごく→くぼくぼ
あたらしい(新)→さら
あをぐ(仰)→あをぬく
あなどる(侮)→あなづる
あいだ→あわさい→あわい
あご(顎)→あごた
あそぶ(遊)→あすぶ
あたまのつきあたる(頭の衝突)
　→けつんぼ
あるのに(有)→あんのに
　→あんに
あちらへ(彼方へ)→あっちゃ
　へ→あっちー
いちょー(銀杏)→いっちょ
いいえ(否)→いいや→いんに
　ゃ→いいやい→へい
え
いたどり→いったんどり
いぬころ→いのころ
いわし(鰯)→ゆわし
いやですに(否)→いやだんに
　→やらし→いやじょ
いたま(板間)→いたば
いちは(一把)→いちはい
いまだ(未)→まんだ
いしがき(石垣)→いしがけ
いかけや(鋳掛屋)→いかきや
いつも(何時も)→いっつも
ゐもり(蠑螈)→ゐもら
いちじゅく→いちじく
いっちょうら→いっちゃらい
ゐづつ(井筒)→ゆづつ
ゐろり(囲爐裡)→ゆるい
　→ゆるり
いとど(蟋蟀)→いとぢ
いへ(家)→えー→え
いわ(岩)→ゆわ
いった(行)→いた
いきている(生)→いけっとる
いま(今)→いんま
いつか(何日か)→いつど
いちご(苺)→いちごー
いくさ(軍)→ゆくさ

いばる(威張)→おーねんぶる
いぢわる(意地悪)→ごんたく
→いぢくさい
いたはしい(痛)→いげちない
いなご(蝗)→とちげら
いちめんに(一面)→ぬっぺら
いれる(入)→えれる
いこー(衣桁)→ゆこー
いみ(意味)→ゆみ
いやらしい(厭悪)→やらしい
いたずら(悪戯)→やんちゃ
いちばん(一番)→いっち
ゐど(井)→いけ
いかき(筋)→いどこ→そをけ
いけ(池)→つつみ
いとさん(嬢)→とーさん
いへ(言へ)→ぬかせ(卑語)
→ゆい
いばり(尿)→よばれ
いただき(頂)→てんじくてん
ゐはい(位牌)→ゆはい
いぢめてやる→やってやる
→しょこめる
いんげんまめ→えんげんまめ
ゐせき(井堰)→ゐね
いも(芋)→どいも
いわう(硫黄)→いをん
ゐざり(躄)→ゐだり
うごく(動)→いごく→いのく
うなる(う鳴る)→おがる
うさぎ(兎)→おさぎ
うしぐそ(牛糞)→おしぐそ
う(鵜)→うー
うつろ・うろ(洞)→えらた
→えだた→えら→えらご
うつ(打)→ぶつ→くらがす
うつむく(俯)→うつぶく
うそをいう→うそだます
うらやまし(羨)→いかめー
うなぎ(鰻)→おなぎ
うすべり(薄縁)→おすべり
→おしべり
うらじろ→かざり→うはじろ
うちこむ(打込)→かちこむ
うなずく(首肯)→おなづく
うむ(膿)→さばえる
うづまる(埋)→いかる
うぐひす(鶯)→うむひす
うをの入るかご→しんぐり
うつくしい→うつくしょい
えん(椽)→えんげ→いんげ
えぼーし(烏帽子)→よぼし
えんとつ(煙突)→えんたつ
→ますと
えんぴつ(鉛筆)→えんぺつ
えびっさん(蛭子・恵比須)
→よべっさん→えべす
ゑ(絵)→ゑー
おこす(火ヲ熾ス)→いこす
おたまじゃくし→へいらんご
おまへ(御前)→おまはん→お
まん→おんし
をうし(牡牛)→こっとい
おう(追)→おわえる
おしづかに(静)→おすかいな
おほきに(多)→おほけに
おちる(落)→あだける
おさへる(押)→へすける(卑)
おまへたち→わらあ
→おのら(卑)→わえら(卑)
おほきい(大)→おほきょい
→ごつい→ごっつい
おもしろい→おもろい
→おもしょい→おもそい
おほきに→おほきん
おだやか(穏)→おいやか
おとといつ(一昨日)→おとつい
おもい(重)→おもたい
おしへる(教)→おせえる
おや(親)→おやん
おもった(思)→おもた
おとした(落)→おとした
をんな(女)→へんだ
→ひんだ(卑語)
おぢさん→おいさん
→おっさん
おりません→おっしえん
→おししぇん

おほかみ(狼)→おほかめ
おんどり→おんた→おんす
おほい(多)→おいい
おなじ(同)→おんなじ
　→おんなし
おそく(遅)→おそ→おそー
を(苧・尾)→をー
おほいなる(大)→おけない
おほぜい(大勢)→おほで
　→おほでい
おめく(叫)→わめく→やめく
おどろく(驚)→おべる
　→おべーた
をの(斧)→よき
おだてる(攪)→おだてかやす
をちる(落)→あだける
おりはせぬ→をーへん
　▽あっせん
おぬし(主)→うんし
おーぎ(扇)→おぎ
おぜん(膳)→おでん
おのれ(己)→おら→▽うら
おほきな(大)→おっけな
を(尾)→しりを
おほしさん(星)→おほっさん
かしこい(賢)→▽いしこい
かいこ(蚕)→いとさん
　小部分ノモノ→おさのもん
か(疑問)例いくのか→ん→こ
→け→例書くのこ→いくのん
かわや(厠)→ちょーづ
かへる(帰)→かいる
かへるかい→かいるけい
かれば（枯葉）→どさ
かざらぬ(飾)→ぬべがない
からだ(体)→かだら
かに(蟹)→がに
かへる(蛙)→がいる→がへる
かぐら(神楽)→かむら
かみなり(雷)→かんなれ
　→かみなれ
かぞへる(数)→かぜる
かたぐるま(肩車)→かたくま
かげぼーし→かげんぼし
かつをぶし(鰹節)→かつぶし
かご(籠)→かんご
かたし(片)→かたっぽ
かへす(返)→かやす→なやす
かんざし(簪)→かんだし
かんなくづ→かんなんくづ
かる(借)→かれる
かまち→かばち▽かば
かはら(瓦)→かあら
かるわざ(軽業)→かりわざ
かゆ(粥)→かい
かんぬし(神主)→かんのし
かたに(片に)→かなに
かもゐ(鴨居)→かもえ
かまきり→かみきり
から→さかい→けー
かなづち(金槌)→かなづつ
か(蚊)→かー
かわいらしい→かわらしい
がっこー(学校)→がっこ
かけおち→かけうち
かび(黴)→かべ
がけ(崖)→さがいとこ
かみより・かんぜんより
　(紙捻)→かんじょり
かはるがはる→かたみに
かたつぶり→でんでんむし
　→でのむし
かはりょーし(河猟師)→ぽん
かれい(鰈)→かれ
かして(貸)→かいて
かいつむり→かいつぶれ
かえって(帰)→かやって
かしはもち(柏餅)→ごもせ
　→ごんごぜ→ひょっとで
かいむ(皆無)→からけつ
かぜをひく(風邪)→がいき
かまど→くど
かたげる(擔)→かつぐ
きらず(豆腐かす)→おから
きつね(狐)→けつね
きもの(衣服)→きりもん
　→きもろ
きめ(極)→きはめ

きたない(不潔)→さんこ
きりぎりす(螽斯)→ぎす
きばる(気張)→こばる
きんぎょ(金魚)→きんよ
きたいな(希代)→けたいな
きょねん(去年)→きょーねん
ぎぎ(義々魚)→ぎんた
きせる(煙管)→けー(き)せろ
きのう(昨日)→きんのう
→きんにょう
きつづき(啄木鳥)→きこづき
ぎょーさん→じょーさん
きうす(急須)→きびし
きえる(消)→けえる
きもちわるし→きしょくい
きゆう(灸)→やいと
きうとし(気疏)→けをとい
くちなは(蛇)→くちな
ください→おくなれ→おくん
な→おくなはれ→くんねー
くれよ→くんな
くれぬか→くれいや→(んこ)
くも(蜘蛛)→くぼ
くびす(踵)→きびす
くちびる(唇)→くちびら
ぐみ(茱萸)→ごみ
ぐすもの(愚鈍)→ぐずろべい
くすべ(燻)→ふすべ
ぐあいがわるい→ぐつがわる
い→ぐんつがわるい
くい(杭)→くぎ
ぐあいよー→あんじょー
くぬぎ(櫟)→くのぎ
くぐる(潜)→こぐる
くだもの(果物)→くらもの
くさめ→くっしゃめ(み)
くるしい→しんど
くつがへる→ひっくりかへる
くさす(誹)→すやす
ぐあいのよい→ぐわいなもの
→がいなもの
くわし(菓子)→くわっしん
げんかん(玄関)→げんか
けっと(毛布)→けっとー
けしずみ(消炭)→けずみ
け(毛)→けー
げんごべいすき→げんごめ
けんぽなし(玄圃梨)→けび
けむり(煙)→けぶり
けれども→けども
けーとー(雞頭)→けとー
げた(下駄)→げんげん
こぶし(拳)→(にぎり)こぼし
このうえもない→どてぎり
こども(子供)→がき(卑語)
こんにゃく→こんやく
こごと(小言)→ぼやく→ごぎ
こうし(犢)→べこ→べこじ
ごーまん(傲慢)→おーねん
ごぼー(牛蒡)→ごんぼ
こよみ(暦)→こゆみ
こーのもの(香物)→このもん
→こーこ
こんぶ(昆布)→こぶ
ごとく(五徳)→さんとく
こむそー(虚無僧)→こもそー
→こもんそー
このところ→ここんとこ
ございます→ごあす
こい(来)→ごんせ
ご(碁)→ごー
ごちそー(馳走)→ごっつぉー
ごむように(無用)→ごみやに
こちらがわ→こっちゃべつ
こんど(今度)→こんだ
こくび(小首)→こーびん
こま(独楽)→ごま
こがたな(小刀)→こがたん
こつじき(乞食)→こじき
こまい(古米)→こーまい
こすい(狡猾)→すこい
こみあふ(込合)→どしこ
こらえて(忍耐)→こらして
これこれ(是)→こりゃこりゃ
これで(是)→こんで
こしらへる→こっさへる
ことによる→ひょっとしたら
これだけ→こっだけ

こけ(苔)→こげら
こえつぼ(肥壺)→どをけ
　→どをけつぼ
さりはしませんか→はらへん
　か→(行き)なさる→なはる
さかい→(する)はかい
さわぐ→ほたえる→あばれる
ざしき(坐敷)→おもて
さしつかえない→だんない
さむい(寒)→さぶい
ざくろ(石榴)→じゃくろ
さはる(觸)→いらう
さかさま(逆)→かいさま
さいさい(再々)→じょーし
ささげ(豇豆)→ささぎ
ざこ(雑魚)→じゃこ
　→こわいじゃこ
さんざい(散財)→さんだい
さなだむし→しゃだむし
さなだひも→しゃなだひも
さなぎ→しゃなぎ→ししゃ
されこーべ→しゃりこべ
さようなら→さいなら
さみしい(寂)→さぶしい
さんごじゅ(樹)→さんごじ
さみせん→しゃみせん
さんしょー(山椒)→さんしょ
さかやき(月代)→さかいき
さして(指手)→さいて
さへ(助動詞)→さや
さびる(錆)→しゃびる
さくり(吃逆)→しゃくり
さかん(左官)→しゃかん
さきほど→さっきに(きん)
さいえん(菜園)→さえん
さんだわら(桟俵)→さんどら
さいもん(祭文)→さえもん
さけて(裂)→しゃけて
さふらん→さくらん
しょちょー(署長)→そちょー
しつこい(執念深い)→ねつい
しゃしん(写真)→ささしん
しょーべん→しょんべん
じゅばん(襦袢)→じばん
しほ(塩)→しょ
じゅんさ(巡査)→じゅんさん
しるい(道泥)→じるい
じゅくし(熟柿)→ずくし
しゃちょー(車長)→さちょー
じしゃく(磁石)→ぎしゃく
じっと(落着)→ぎっと
しきみ(樒)→しきび
じょーるり→じょろり
しゅす(襦子)→しす
じゅみょう(寿命)→じみょう
しゅろ(棕梠)→しゅーろ
じぶん(自分)→めんめ
しゃっぽ(帽)→しゃっぽん
しやうがない→しょがない
　→しゃござへん
しかる(叱)→くやむ
しょーがつ→しょんがつ
してをらるるか→しょってや
してください→してんか
　→してくれ→しねーな
しますですか→しますじゃか
しち(質)→ひち
しておった→しとった
してあ(お)った→したった
しじみがひ(蜆)→しずみがひ
しらみ(虱)→しらめ
じょーず(上手)→あんじょう
しょーゆ(醤油)→しょい
しゐる(強)→しいばち
しんぼう(辛抱)→しんぼ
しまいかねた→しかまげた
したたか(甚)→じめじめ
します→しまー
しきゐ(敷居)→しき
しゅ(朱)→しゅー
しらん(知らぬ)→しゃん
しぼむ(萎)→すぼむ
　→しなびる→しなべる
しゃくし(杓子)→しゃもじ
しりごみする→すっこんどる
じぎする(礼)→しぎつく
しっけい(失敬)→しゅっけい
しかたない→しゃらへんがな

じゃれつく→ばへる
しる(汁)→おつ→おつけ
しまっておく→とっといとく
すわる→へたる→へこたる
すくない(少)→すけない
すこし→ちょぼっと→ちいと
→ちびっと→ちょびっと
すこしづつ→ちいたて
すみ(隅)→すまんだ
→すまんど→すみんど
すてておく→かちぼっとく
すそ(裾)→そそ
すもーとり→すもんとり
すばやい(敏速)→すこひ
すずり(硯)→するり
す(酢)→すー
するので→すんので
すくて(酸)→すゆて
すます(済)→なやす
すぐる(勝)→よる
すっかり・すっぱり
すっぺり→こっきり

すると(為)→すっと
すてる(捨)→ほかす
せぬか(為)→しんか
せん(為)→しーへん
せなかった→しーへんだ
ぜんまい(薇)→でんまい
せった(雪駄)→せきだ
せみ(蟬)→せんみ
せちえ(節会)→せっち→せち
せんせい→▽しぇんしぇい
ぜに(銭)→でに→▽じぇに
せいろー(蒸籠)→せいどー
せついん(雪陰)→せんち
せがき(施餓鬼)→せがけ
せんべい(煎餅)→せんべ
せんざい(前裁)→せんだい
せまい(狭)→せばい
せんこー(線香)→せんこ
それで→そーや→ほっでに
→ほてから
そして→ほって→ほして
→ほて→ほれで→ほいて

そーでないか→そやないか
そーであるか→そーあっか・
でっか→そーし→そーけ
そーしてね→ほてな→へって
→へて→へたら
それは→ほれは
それなら→そんなら
→ほんなら→そんじゃ
それゆへ→そんで→そっでに
→そやはかいに
そのよーに→そのい→そない
それ何か→それなんぞいやい
それでは→そんじゃ(なら)
そーせぬか→そーせんこ
そーですに→そーじゃに
そーであるが→そやけろ
→そやけど→そーやけど
それから→そいから
そーしたら→ほったら
そーであるから→それでに
→そーじゃさかいに
そーであろーか→そーやろか

そこから→そっから
そーな→げな
そろそろ(徐々)→ぼちぼち
そでなし→どんちゃ→でんち
そば(側)→ほてら→ほぼ
→ほてて→ねき
そねむ(妬)→しょねむ
そくび(素首)→すくび
ぞーり(草履)→じょーり
→じょり→どり
そっと(徐々)→そろっと
そそー(粗匆)→そそくさ
だ(語尾)→ぢゃ
たいそー→どえらい→ごつう
→どーらい→どすごい
→でーらい→どっさり
たくさん→たっぷり→たんと
→うんと→やっと→やーと
たばこ(煙草)→たぼこ
たにし(田螺)→たのし
だます(騙)→だまくらかす
たわむれる→ちょける

↓ちょばへる
だいどころ(台所)→おえ
だんご(団子)→おたま
たぬき(狸)→たのき
だちん(駄賃)→だっちん
たび(度)→たんび
たばこいれ(煙草入)
↓たぼこり→たばこえれ
たび(足袋)→たーび
だんだん(段々)→でんでん
たんぽぽ→たんぽこ
たんざく(短冊)→たんじゃく
だまる(黙)→だんまる
たご(擔桶)→たんご
たらい(盥)→たーらい
たをる(倒)→たをける
↓こける
ただ(唯)→たった
だして(出)→だいて
たかへい(高塀)→たかへ
たわら(俵)→たあら
だいどころ(台所)→だいどこ
だんなさん(旦那)→▽だんさ
たたむ(疊)→たとむ
だくしゅ(濁酒)→どぶさ
たくはふ(貯)→たぼう
たびたび→じょうしじょうし
たけうま(竹馬)→さんがせ
たけづつ(竹筒)→たけんづつ
たる(足)→たんのー
だめだ→あかん
だんぱん(談判)→らんぱん
た(田)→たんぼ
たい(形容)→上にくをつける
↓平くたい→荒くたい
ちょーちょう(蝶)→ちょーこ
ちゅーはん(中飯)→ちゅはん
ちさ(萵苣)→ちしゃ
ぢめん(地面)→ぢべた
ちっとも(少)→ちょっとも
ちいさい(小)→ちいしゃい→
ちっ(ちん)こい→ちっさい
→ちいちゃい→ちぼこい
ち(血)→ちー
ちょんがり→ちょんがれ
ちっとのあいだ→ちっとみな
→ちっともな→ちとむな
ちゃ(茶)→ちゃー→ちゃのこ
ちん(狆児)→ちんころ
ぢぎする(礼)→おじんつく
→おじぎつく
ちら→ちゃ→あっちゃ
→そっちゃ→こっちゃ
ちがって→ちごーて→ちごて
ちいさい雑木→あさき
ちくしょう→ちきしょう
ちょうしもの→ちょーさいぼ
ちち(父)→とん
ちぎ(秤)→ちんぎ
ちまき(粽)→ささまき
つめたい(冷)→ちめ(べ)たい
つぐみ(鶫)→つむぎ
つらら(氷柱)→つららん
つばめ(燕)→つばくろ
つつある→(行き)よった
つくづくし→つくつくぼうし
つつそで(筒袖)→つつっぽー
つごもり(晦)→つもごり
つよい(強)→つをい
つきあい(交際)→つきやい
つじうら(辻占)→つじぶら
つば(唾)→つわ
つけぎ(附木)→やいた
つつく(啄)→こづく
つばな(茅花)→つんばな
→づんばな
づきん(頭巾)→づっきん
つるべ(釣瓶)→つぶれ
つぶ(粒)→つぼ
つれだって(連)→つらって
つまらぬ→やか→やだくさ
→しやっちもない
つち(槌)→てんころ
ておらぬでは→とらへんわや
ていた→とった
です→だはー→じゃ(いな)
ですよ→じゃはな
であった→じ(ち)やった

てあげる→たげる
である→してや→ぢゃ
ておく→とく→とれ
てあった→たった→ちゃった
ておらん→とらん
ては→ちゃー
てお った→たったら
てまり(手球)→てんまり(る)
てっぺん(天辺)→てっぺい
できた(出来)→でけた
てしほ(手塩)→てっしょ
てんじょー(天井)→てんじょ
てんぷく(顚覆)→とんぼ
てだろ→とる
ですか→だすけ→だすか
→だっか→けや
てんてん(点々)→てぼてぼ
てぬぐひ(手拭)→てのごひ
てをけ(手桶)→てたご
て(手)→てー
てじなし(手品師)→てづまし
とだな(戸棚)→とな だ

とび(鳶)→とんび→とんびい
とくり(徳利)→とっくり
とんぼ(蜻蛉)→どんぼ
どちら→どっち→どっちゃ
とりい(鳥居)→とりえ
どて(土手)→どる
とーがらし→とんがらし
どーもならん→どむならん
とーしん(燈心)→とーすみ
ところ(所)→とこ
とーろー(燈籠)→とーろ
どうして→どして→なして
どうなりこうなり
→どーぞこーぞ
とーふ(豆腐)→とふ
とほひ(遠)→といひ
どひん(土瓶)→どびん
とーぐわ(唐鍬)→とんぐわ
どんなに→どのい
ともす(燈)→とぼす
どじょー→どぢょ→どーぢょ
→どんじょ→じょじょ

どろ(泥)→どべ
と(戸)→とー
どこかへ→どっきゃはんへ
どーらくもの→ひょっとくれ
という(言)→ちゅー
とんねる(墜道)→まんぼ
とりおとし→こぶし→こぶつ
なさい(行き)→(行き)ないな
なさる→なはる
なげる(投)→ほる→ほふる
→かつける→▽あっける
なかくぼ→へっ(ひっ)こむ
なくな(泣)→べそかくな
なぐる→どやす→どつく
なれあい→どれあい
→ずりこみ
なくものをあざける
→とこぼえる
なんてん(南天)→なりてん
ならび(並)→なろび
なこうど(媒)→なこぞ
なんじょう→なんじゃい

なにさま(何様)→なんしょー
なぞ(謎)→など
など(等)→なぞ
なはしろ(苗代)→のしろ
なまけもの→ごくどー
ながいあいだ→せんど
なつめ(棗)→なつんめ
ながたな(菜刀)→ながたん
なめくじ→なめくじら
なにですか→なんじゃろ
なにやかや→なやかや
→ないかい
なす(茄子)→なすび
なかまはづれ→はねのけ
なされ→なれ→な
なでる(撫)→なぜる
なぶる(弄)→せぶらかす
にんぎょー(人形)→にんよ
→にんきょ
にぎやか(賑)→にーやか
→にやか→にんやか
にじ(虹)→にんじん→にんじ

にじむ(煮染)→にじゅむ
にえる(煮)→ねえる
には(庭)→せんだい
に(荷)→にー
にがつ(二月)→にんがつ
にな(蜷)→にら
にきび(肉皰)→にきみ
にげる(逃)→ぬげる
にーさん(兄)→にーよ
　→あんやん→にーやん
にぎりめし→とん(り)のこ
にえたつ(煮立)→ねえたつ
ぬの(布)→のの
ぬすびと(盗)→ぬすっと
ぬし(主)→のし
ぬらくら(滑)→のらくら
ぬま(沼)→のま
ねばならん→んならん
ねうち(値打)→ねぶち
ねむる(眠)→ねぶる
ねだる(強請)→ぐずる
ねー(語尾)→な→なー→のー
の(例行くの)→(行く)ん
のど(咽喉)→のぞ
のみぐち→せちべん(びん)
のろし(狼烟)→のろせ
のこぎり(鋸)→がんど
のこらず(残)→ぐっすり
のぞき(覗)→のどき
のく・のけ(退)→どく→どけ
はいる(這入)→はえる
は(下駄の)→はま
はめる(嵌)→はげる
ばいばい(売買)→ばいがい
はん(判)→はんこ
はる(手で打つ)→はつる
はなを(下駄の)→はなご
ぱっち(股引)→ばっち→ばち
はい(蠅)→はいぽ
ばかり→ばっかり→ばっかし
はみ(蝮)→はめ→くちはめ
はし(端)→かば→かばち
はんてん(半纏)→はんちゃ
はさむ(挟)→はそむ
　→はだける
はは(母)→かん
はやく(早)→さっと
ひざがしら(膝頭)→ぼんぽこ
ひらたい(平)→ひらたくたい
　→へべたい→ひらべたい
ひし(菱)→へし
ひとへもの(単)→ひといもん
ひかた(日方)→やうず
ひきこむ(引込)→へっこむ
ひょー(雹)→とーせんぼー
ひさし(庇)→をだれ
びは(枇杷)→びや
ひも(紐)→ひぼ
ひたい(額)→したい
ひたす(浸)→したす
ひと(人)→しと
ひたたれ(直垂)→したたれ
ひさしく→せんど→ひーさ
　→ひーさん→ひっさん
ひふきだけ→ひゅーけんだけ
ひょーしぎ→ひょーしん
びくともせん(不動)
　→びくっともせん
ひとつ(一)→しとつ
ひおほひ(日覆)→ひおひ
ひるね(午睡)→ひんね
ひょーたん(瓢)→ひょったん
ひがん(彼岸)→ひんがん
ひかげかづら→狐のたすき
ふところ(懐)→ほところ
ふんどし→ほんどし
ぶらんこ→つらんこ
ふーか(富家)→ぶげんしゃ
ふみつぎ(踏継)→ふまへつぎ
ふつごう(不都合)→やだくさ
ふきん(布巾)→ふっきん
ふれる(觸)→つかへる
ぶちょーほー→ぶちほー
ふご(畚)→ふんご
ふち(縁)→へち
ふろしき(風呂敷)→ふるしき
ふるひ(篩)→すいのー
ふとん(蒲団)→ふっとん

ふたり(二人)→ふたーり
ふくろび(綻)→ふくろべ
ぶさいくな(不細工)→やだな
へど(反吐)→へぞ
へいきん(平均)→へいけん
べつじょうない→べちょない
　→べっちょない
ほんとーに→ほんまに
ほほ(頬)→ほたんぼ→ほべた
　→ほーべた→ほたんばち
　→ほーべちゃ→ほーだま
ほりあぐ(投上)→ほぶれ
ほいない(不本意)→ほえない
ほころびる→ふくろび(べ)る
ほんまか→ほんにゃ
ほしいひ(乾飯)→ほっしん
ぼくとつ(木訥)→どんころ
ほほじろ(鳥)→しとと
ほとけ(彿)→ほとき
ほーかむり→ほーかつぶり
ほたる(蛍)→ほ(ー)たろ
ぼーさん(坊)→ぼんさん
ほんぶく(本服)→ほんぼく
ます→(何々し)まあー
まぎれる(紛)→どまくれる
まれに(稀)→たんまに
まゆ(繭)→まい
まつやに(松脂)→まつやね
まくる(巻)→めくる
ままごと→あばごと
まへだれ(前垂)→まいだれ
まじっと(交)→まぜって
ますぐ「真直)→まっすん
まげ(髷)→わげ
まいど(毎度)→ねんない
まゆげ(眉毛)→まいげ
まるまげ(丸髷)→まろあげ
まづい→もみない→もむない
まで(迄)→まれ
みそ(味噌)→おむし
み(箕)→みー
みの(簑)→にの
みぞ(溝)→みどこ→みど
みみず(蚯蚓)→みみる
みがく(琢)→めがく
みけん(眉間)→めけん
みな(皆)→みんな
みなさい(見)→みいな
みないか(見)→みんか
みせる(見)→みしる→めせる
みにゆく(見)→みーにゆく
みぞれ(霙)→みそたれ
みえる(見)→めーる
みところ(三所)→みーとこ
みそささい→みそさんざい
むり(無理)→どくしょー
むさん→むさんこ
むだ(徒)→わや→げんすけ
むかで(百足)→むかぜ
むじな(貉)→うじな
むぐら(もぐら)→むくろ
むやみ→むちゃくちゃ
むこーがわ(側)→むこーべつ
むち(鞭)→ぶち
むせる(咽)→もせる
むぎめし(麥飯)→むいめし
むしろ(蓆)→▽みしろ
むつ(魚)→もと
めうし(牝牛)→をなめ
め(目・芽)→めー
めいめい(名々)→めんめん
めだか(目高)→みみんこ
　→みみんじゃこ
めったに(滅多)→めったん
もー(もーたくさん)→いも
もち(餅)→ばあ、あも
もる(漏)→ぼる
もみくちゃ→ももくちゃ
もぐ(捥)→ぼぐ
もえぎ(萠黄)→もよぎ
もぐさ(艾)→もむさ
もてあそぶ(弄)→いぢくる
　→いらふ
もの(物)→もん
もはや(最早)→もー
もつれる→むすぼれる
もくぎょ(木魚)→もくげ
やくはらひ→やっこはらひ

やっぱり→やっぱし
やえば(八重歯)→おにば
やはらか(柔)→やろこい
　→やりこい→やにこい
やまぎ(山気)→やまこ
やげん(薬研)→やぎん
やたい(屋台)→ずんでんどー
やきごめ(焼米)→やっこめ
やしろ(社)→みやさん
やがて→やんがて
やに(脂)→やね
やにはに→やにまに
やりそこない→けちくた
やつ(奴)→たれ→あいつ
やぶれる(破)→▽やぶける
ゆび(脂)→いび→いべ
ゆでる(茹)→いでる→ゆでる
ゆきま(女下帯)→いまき
　→いもじ
ゆうだち(夕立)→よだち
ゆげ(湯気)→いぎ→いげ
ゆうれい(幽霊)→ゆうれん
ゆびわ(脂環)→いびわ
ゆひ(結)→いわい
ゆっくり→ゆっくら
ゆ(湯)→ゆー
よはい(弱)→ちょろこい→ち
　よろい→にやこい→あかん
よもぎ(蓬)→よごみ→よむぎ
　→ゆむぎ→よもみ
よる(夜)→よさり
よつつじ(四辻)→よっすじ
よ(語尾)→よー
よこがわ(横側)→よこべち
よせて(寄)→よして
よいもの(良物)→えーもん
よーなもの→みたいなもん
よなべ(夜業)→よなび
よべ(昨夜)→よんべ
よほど(余程)→よっぽど
よはき(弱)もの→よはんたれ
よりか→よか
よいかげん→よいかげ
よいところ(良所)→よーとこ
ようよう(漸)→やっとのこと
よい(良・宜)→らく
らくらい(落雷)→よだちがあ
　まる
らっきょう→らっきょ
らんぷ(洋燈)→らんぽ
りゅうどすい(龍土水)→りょ
　ーどすい
りょーじ(療治)→りょーり
　→じょーり
りんしょく(吝嗇)→おしんぼ
りんびょう(淋病)→しんびょ
　う
りっぱ(立派)→▽ぎっぱ
りぼん→ぎぼん
りびょう(痢病)→じびょー
りれき(履歴)→じれき
りし(利子)→ひやい
るす(留守)→ずす
るすゐ(留守居)→ずすゐ
れんこん→れい(でん)こん
れーる(軌道)→れーろ
れんぎ(連木)→れんげ
わたくし(私)→うち→おら→
　わし→わい→わしん→わら
　ー→おたい
わきが(脇臭)→わしご
わんぱく(腕白)→わんざく
わづか→たった→ちょぼっと
わるあがき→わらがき
わけてもらふ(分配)
　→かたはってもらふ
わ(輪)→わー
わりき(割木)→わるき
わるい(悪)→わーるい
わがままもの(我侭)→どーら
　くもの→ごくどう
わざわざ(態々)→ゑざわざ
わたいれ(綿入)→わたえれ
わる(割)→めぐ
わるさ(悪作)→てんごー

（かなづかい、そのほか、すべて原文のままとした）

掲示板

氷上高女子、春高バレーを制す

氷上バレー後援会会長　臼井澄雄

チーム結成十二年、高見監督は、その宿望をみごとに果たした。

序戦の三試合を完勝したとの報告を受け、私は三月二十二日上京した。

その日の準々決勝に春日部共栄にストレート勝ちをし、前年の準優勝校・扇城や古豪旭川実業が姿を消していた。

二十三日の準決勝の日である。地元春日よりバスを仕立てて大挙応援に来てくれる。町長、議長も昨夜来の上京である。

準決勝の相手は、前回優勝の強豪、八王子実践である。試合が始まる。いきなり一点、二点、三点と先取りされる。一瞬ヒヤリ、しかしすぐに立ち直り、第一ゲームは好ゲームの展開、13―13とシーソーゲーム、だが勝利の女神は氷上に組した。第二セットに入ると焦りからか、八王子のミスが目立つ。氷上はつけ込んで楽な展開、15―7で連取した。第三セットものびのびとプレーする氷上はスキを見せず、必死で食い下がる相手をあっさりと退けた。15―6であった。

二十四日、優勝戦の相手は大阪女子短大附属である。

第一セット、氷上のサーブは大阪の守りを崩していった。サーブがほとんどまともに返らない大阪は、得意の速攻が使えず、なすすべもなかった。15―0、二十年ぶりといわれる快スコアであった。

第二セット、大阪はリズムを取り戻して11―12まで競り合った。しかし、基礎的なレシーブ力、好サーブと鍛えぬかれた氷上全選手の攻撃はもう止められなかった。四連続得点で15―12。続く第三セットも勢いに乗った氷上は15―6とあっさりストレートで押し切ったのである。

まさに春の初制覇、しかも予戦から全10試合を失セットなしの完全優勝を成しとげたのである。大阪のエース小林は悔し涙を流しながら「日本一って大へんなんですね」という。この涙こそ、わが愛すべき氷上の選手達が幾度となく流してきた涙なのだ。高見監督は偉大なロマンチストである。無心な選手達もまた―。

西崎祥さん　ふるさと無踊公演
――祥舞会氷上支部も設立――

中央で「舞踊会に新しい芽が吹き出た」と評された西崎祥さんは、かねてより念願の「ふるさと公演」を盛大に故郷柏原に花咲かせました。その模様が丹波新聞をはじめ、神戸新聞等でも大きくとりあげられています。

「この道四十年、あなたが極められた日本舞踊のすばらしさと、古典舞踊の心随を、この丹波の地に広めてください。そうしたあなたの出現を、心ある人たちは待ち望んでいたのです。私たちは、きっとあなたが新風をもたらしてくださるだろうと楽しみにしています。……」との記事は、西崎さんに対する多くの人々の期待を如実に表わしています。

また、恩師で前教育長の村上彰先生は祝辞の中で「いま日本の大都市には、文化・芸術が集中していますが、その地方への分散が必要なときと思います。時間・

▼平成２年３月24日付・神戸新聞記事

華麗さに酔い、拍手

柏原町出身 地元も裏方として協力

西崎祥さんふるさと公演

氷上郡民会館

氷上郡柏原町出身の舞踊家で西崎流名取の西崎祥さん＝本名・粮谷京子、東京在住＝の「ふるさと舞踊公演」（柏原町文化協会、神戸新聞社など後援）が、二十五日午後、氷上郡民会館で開かれた。

西崎さんは、昭和三十年、西崎流家元の初代西崎緑さん（故人）に師事するため上京した。以来三十五年間「道をきわめるまでは帰らない」との信念を持ってけいこに励んできた。この間、ふるさとの丹波では、ゲストに招かれて舞台に立つことはあったものの、自ら主催する公演を郷里で行うのは、今回が初めて。

昨年、ふるさとに開設した西崎祥舞踊研究所氷上支部の披露も兼ねた公演は、柏原町の劇研「椎の実」が、照明や音響、大道具などの裏方として協力。義太夫「寿式三番叟（にとぶきしきさんばそう）」で幕を開けた。

会場は、西崎さんの晴れの舞台をぜひ見たいという丹波各地のファンで埋まった。メーンの演目である新内「吉良の仁吉・お菊無情」では、哀調を帯びた語りと、お菊を演じた西崎さんの華やかな舞が交錯する展開に、観客から大きな拍手が送られていた。

この後、第二部は祥舞会と名づけた一門の人による発表会が繰り広げられた。いずれも西崎さんの振り付けで「恋し懐しはやり唄」のタイトルに沿い、民謡や愛唱歌、流行歌にのせたさまざまな踊りで、訪れた人々の目を楽しませていた。

35年ぶりのふるさと公演で、新内「吉良の仁吉」を舞う西崎祥さん＝氷上郡柏原町、氷上郡民会館

空間・人間関係、という三つの〝間〟が抜け、住みづらくなりつつある現在において、西崎さんの「ふるさと公演」は大きな意義をもつものと信じます。丹波はいま大きく変貌しようとしています。人々の文化・芸術への志向はますますのっていくことでしょう。この催しが地域の人々にインパクトを与え、豊かな人間性への契機となることを願います」と述べておられます。

柏原

磨いた芸鮮やかに披露

東京で活躍の舞踊家西崎祥さん

ふるさとの教室で新年会

東京で活躍中の舞踊家、西崎流名取、西崎祥（本名・粕谷京子）さん＝写真＝が、郷里柏原に持つ教室「祥舞会」の新年会を、このほど町内の料亭濱町で開き、自ら長唄「松の緑」などを鮮やかに舞った。

祥舞会は昨年春、西崎さんが柏原で〝ふるさと公演〟ともいうべき日舞リサイタルを開いたが、その舞いの魅力を慕う人たちによって誕生。毎月数日間、西崎さんに東京から帰ってもらい、柏原でおけいこをつけてもらっている。この日は新年のお祝いと会員の舞い初め。幼児から、上は〝若々しい〟七十八歳まで十数人が座敷のステージでそれぞれ得意の舞いを披露した。

西崎さんは、西倉志保ちゃん（四つ）＝氷上町成松＝が「やさしいお母さん」を舞う時、舞台の上で真剣そのものの介添え。「この子がこれから二十年精進してくれたら、大したものになりましょう。私もその二十年間一生懸命頑張ることになります」とかわいい弟子にいっぱい愛情を注いでいた。

また西崎さんは、一流舞踊家として磨いた芸を「松の緑」と「萬歳」で披露。柏原で少女時代に教えを受けた杵屋勝矢南師匠に三味線、姉弟子の奥畑あき子さんに長唄で花を添えてもらい、ふるさとならではのうるわしい光景だった。

「これからも故郷の人たちと心のふれ合いを深め、皆さまに愛され、喜んでいただける踊りをモットーに芸を活かし、社会のお役に立てれば」と語る西崎祥さんは、一生修業、一生青春を実践しつづける〝丹波の女（ひと）〟となることでしょう。

（宮野近記）

▲平成三年一月二七日付・神戸新聞記事

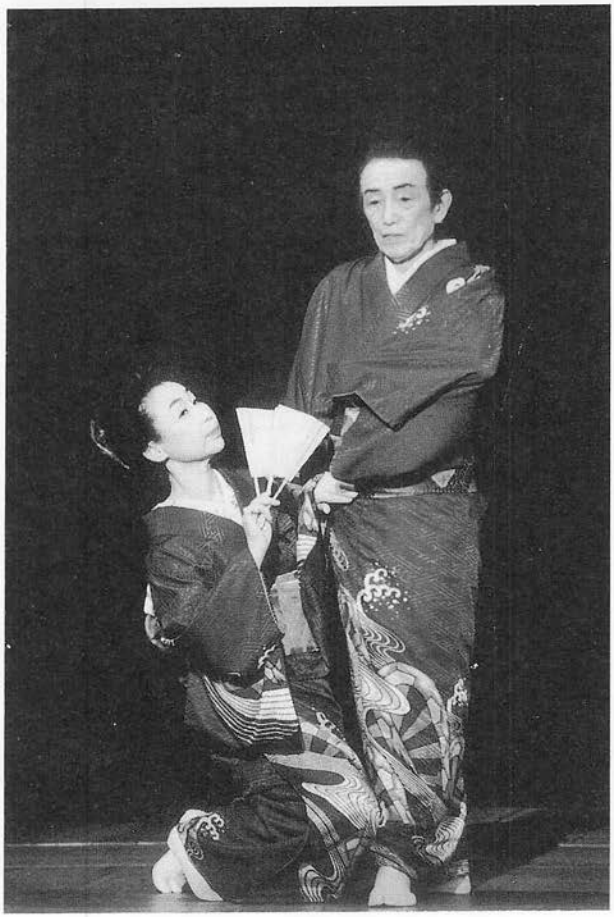
趣味は新舞踊・吉住自由造さん

吉住さんはスポーツウエアの総卸元・ノーブルスター㈱の会長で、当郷友会の副会長、皆さんご存知のとおりです。

文化活動に理解の深い吉住さんは、観賞だけに止まらず、三年前から新舞踊の習得に挑戦されております。

今年一月、産経新聞主催、フジテレビ・ニッポン放送後援の「第四回日本新舞踊フェスティバル」（中野サンプラザ大ホール）に出演されました。昨今ブームともいえる「新舞踊」の創造と研修発表の華やかな舞台です。

当日は全国から集まった五十グループによる舞踊の数々が、一部と二部に分けて披露されました。また幕合にはゲストコーナーとして、花柳界を今に偲ぶ端唄や俗曲の紹介、神楽坂ふみ栄さんの日本情緒ゆたかな踊りなど、実に艶をつくしたものでした。



第一部は「彩」。悲しい酒に始まり、淡路島エレジー、華の舞、仙寿鶴の舞、鶴麗の舞など、舞台を彩る華やかな舞踊の数々に目を見はりました。

第二部は「雅」。無法松の一生に始まり、我らが吉住さんの出番は四番目、題して「夫婦舟」。常磐木流三代目家元の常磐木扇珠師匠と吉住自由造さんのコンビが登場すると、満員の会場は大きな拍手が鳴り止みません。お二人の呼吸はぴったり、まるでほんとうの夫婦のような踊りでした。それもそのはず。この曲の歌詞は「惚れぬいた男のために、どんな辛苦にも耐えぬき、どこまでもついて行きます……」と、女心を切々と訴えるものだからです。身のこなし、舞う扇、舞台に咲く花二輪、まさに〝雅〟でした。

姿勢がよく、堂々とした踊りだった、とMさん。二人の扇はぴったり一つ、とSさん。短期間でよくもあれだけ会得できるものだ、とAさんの評。参会者は口々にほめ讃えておられました。

常磐木扇珠師匠は、すばらしい無踊家とお見受けしました。教える人と習う人の双方が渾然一体となって稽古に励まれた賜でしょう。まさに〝生き生き人生〟の見本です。

（宮野近記）

フランス刺繍展

篠原よね子（青垣町）

私はフランス刺繍の講座を各カルチャーセンターで開いておりますが、ほぼ二年に一度は教室全体で展示会を催しております。昨年は十月に新宿の京王百貨店

で第八回の展示会を開きました。花博の年にちなんで、メインテーマを〝花のアルファベット〟とし、AからZまで、それぞれを花でアレンジいたしました。それをいろいろに組合わせ、ご自分の好きな人のイニシアルを、またイメージフレイズを、額やテーブルセンター等に刺してみましたが、大変好評でした。また花のカレンダーなども喜ばれました。

一方、丹波の山々を想いながら日本画の山水を刺繍で表した作品は、私の教室のオリジナル作品として今回も数多く展示し、ほかの刺繍展では見られないものとのお声を頂載いたしました。そのほか花のいろいろな群像や風景、デザイン等広い範囲のモチーフを額、掛軸、衝立、屏風、クッション等にまとめ、二〇〇点に及ぶ展示品と約一〇〇〇点の即売品も用意し、四日間の会期を盛況裡に催すことができました。

今年は、アジア・アート・アソシエーション主催の「世界美術工芸展」が六月十三～四日、赤坂のドイツ文化会館で開かれますので、目下出展準備を進めているところです。この展示会は文字通り国際交流の場であり、日本の文化を世界に紹介することの一助となるよう張りきっております。郷友の皆さまも機会をつくってぜひご来場ください。

〈篠原刺繍教室のご案内〉

○三鷹自宅教室（京王線つつじヶ丘十分）
○調布教室　サンライズカルチャーセンター（京王線仙川三分）
○武蔵野教室　武蔵野商工会館（吉祥寺）
○多摩プラーザ教室　東急多摩プラザ店
○世田谷教室　共立信用組合（田園都市線用賀駅三分）
○町田教室　高尾建設（小田急町田五分）
○永山教室　毎日文化センター（京王・小田急線永山駅一分）
○大和教室　毎日カルチャースクール（小田急線大和駅三分）

お問合せは左記へ
サンライズカルチャーセンター（昼間）電話（〇三）三三〇八―四三六五
自宅（夜間）〇四二二―四五―二九〇五

なお、サンライズカルチャーセンターは、主人と共同経営で書道、水墨画、ペン習字、俳句、ソシアルダンス等、三十講座があります。ぜひご利用ください。

常岡幹彦さんの個展

○五月二十一日〜六月二日＝東京セントラル絵画館・「玄に向って」（其の参）
○平成四年上旬＝ギャラリー毎日、約二週間の予定

可部美智子さんの陶彫展

○五月十二日〜十九日＝日本陶彫会＝銀座アートホール
○六月三十日〜七月六日＝陶光会全国陶芸展＝東京都美術館
○八月二十九日〜九月二日＝可部美智子陶展＝銀座・松坂屋画廊
○十月十三日〜十九日＝女流陶芸展＝京都市立美術館

今年の演奏会予定

笹倉　強（西脇）

①「日本ハンガリー親善交流合唱音楽会」＝日本ハンガリー友好協会（会長・河野洋平）主催による音楽会は、四月二十九日、東京芸術劇場大ホールにて催されます。当日はハンガリーよりジェール女性合唱団と日本の少年少女合唱団、女声合唱団、混声合唱団等、十団体によりハンガリーや日本の合唱曲を演奏し、また全体の合同合唱でハンガリーの曲を歌うという会に「コーラス野ばら」を率いて出演し、バルトークの合唱曲やわが国を代表する作曲家・信時潔、高田三郎氏らの日本的傑作を発表する予定です。

②「城北オラトリオ合唱団・第12回演奏会」を十二月十八日、日本都市センターホールにて開催予定。本年は作曲家・モーツアルトの没後二〇〇年で、モーツアルトの作品が演奏される機会が非常に多い状況です。その中でも最も代表的な作品は「レクイエム」（鎮魂曲）です。他の多くの作曲家のレクイエム中でも最もすばらしい曲と評価されております。作曲者モーツアルトはこの作曲半ばにして他界、弟子のジェスマイヤーがモーツアルトの遺志をついで完成させた大曲です。

練習は毎火曜日の午後七時より、新大久保駅下車三分、辻コーラス・スタジオにて行っております。笹倉強が指導していますので、趣味をお持ちの方、またコーラスを趣味にしたい方、どうぞお越しください。いっしょに歌いましょう。

毎年十二月に行っておりますこの演奏会には、当郷友会より香り高い花束をお添えいただき、有難く存じております。

足立さつき・プロフィール

氷上郡春日町生まれ。柏原高校卒業後武蔵野音大、同大学院に学び、デジーレリゲティ、大谷冽子両氏に師事した。

二期会オペラスタジオ・第30期終了。一九八六年第三回ニッカ椿姫新人賞第一位の栄誉に輝き、翌八七年オペラ「椿姫」のヴィオレッタ役でオペラにデビュー。以後オペラ「リゴレット」「魔笛」「ドン・

ジョヴァンニ」「ボエーム」「フィガロの結婚」等に出演。いずれも好評を博し、オペラ以外ではオペレッタの「こうもり」「天国と地獄」「白雪姫」、ミュージカルの「マイ・フェアレディ」や「サウンド・オブ・ミュージック」「あづち」（沢田研二と共演）等に出演し、芸域の広さを披瀝した。またその美貌と演技力を買われ、オペラ歌手としては珍しくＴＶドラマ・東芝日曜劇場「冬の歌声」に出演し、オペラファン以外の人々にも興味と関心を高めた。今年の出演予定は左記の通り。

5月12日＝オペラ「椿姫」
（サンパール荒川）
6月12～29日＝オペラ「夏の夜の夢」
（渋谷シアターコクーン）
7月7日＝アンサンブル・ヴァルツェンコンサート
（新潟県燕市）
7月13日＝足立さつきリサイタル
（千駄谷・津田ホール）
7月23日＝夏の音楽祭＝（浅草ときわ座）
8月10日＝第三回・足立さつき・ソプラノ・リサイタル
（春日町文化ホール）
9月上旬＝お花と歌のコンサート（仮題）
9月28日＝「メリー・ウィドー」
（五反田ゆうぽうと）
9月29日＝カンマー・コレーゲン定演
（お茶の水カザルスホール）
10月2日＝アンサンブル・ヴァルツェン
（新潟）
10月28日～30日＝ミュージカル
「マイ・フェア・レディ」
（横須賀）
11月6日＝チャルダッシュの女王
（新宿文化センター）
11月11日＝婦人国際平和自由連盟
秋の夕べの集いコンサート
（椿山荘）
11月14日～18日・24日＝ミュージカル
「マイ・フェア・レディ」
（北海道）
☆十一月下旬から二年間、文化庁在外研修員としてイタリア・ミラノに留学。

足立さつき後援会からのお願い

クラシック音楽やオペラは苦手だと思っておられる方々にお願いがあります。足立さつきの出演する舞台を、ぜひ一度ご覧になっていただきたいのです。

七月十三日（土）、千駄ヶ谷・津田ホールで開催するソロ・コンサートとか、八月十日（土）、故郷春日町文化ホールで開催する「故郷ふれあいコンサート」などが初めてご覧になられる舞台としては最適です。彼女の舞台姿や歌の数々に、不幸にも魅了されてしまった方は、ぜひ、足立さつきをご吹聴頂きたいのです。

足立さつきが出演するオペラやコンサートの情報なら、何でも「足立さつき後援会」までお問い合せください。入場券の手配も、もちろん喜んでいたします。

氷上が生んだ美貌のオペラ歌手、オペラ界の妖精・足立さつきを、同郷の皆さまと力を合わせて、世界のプリマドンナにしようではありませんか。

皆さまの温いご声援とお力ぞえを、心からお願い申しあげます。

足立さつき後援会事務局＝市場暉子
（〇三）三八五八―一二一九

クラブ活動等アンケート報告

会員相互の交友のよすがとなるものを求めて、平成二年七月、会員の趣味、交友のありかたなどに関する、次のようなアンケートを行いました。

(1)サークルがあったら参加したいと思われるもの。

(2)総会のありかたについて。

(3)『山ざる誌』について

(4)氷上郡との繋がりについて

アンケート発送数＝一二一九通

同回答数＝一四一通（一一・五七％）

郷友会開催通知の通常返信率から推して三〇〇通ぐらいの回答を期待していたが、夏休みの最中でもあってか、反応がいささか鈍かった。しかし一割を越す方がたが投函の労を惜しまずご協力くださったことには、心から感謝申し上げたい。

クラブ活動関係の回答状況は別表の通りであるが、これを機に同郷人同趣味人の集まりが活性化することを願いたい。

また「総会」「山ざる誌」「郷土との繋がり」等には、多くの方がたから素直なご意見をいただいた。今後の山ざる誌や会の運営におおいに参考とさせていただくつもりである。

アンケートのなかから主な意見をひろって、以下に掲載しておく。（坂上）

〈総会のありかたについて〉

親父のあとを引継いだので、だんだん知った人が少なくなった。何回かに分けて自己紹介をしてはどうか（余田士郎）

昔のような親近感がない。（足立　治）

兵庫県人会や柏陵同窓会などと、日程調整して、同日の他の時間にやる方法はないのですか。（田中憲雄・富子）

毎年きまりきった総会でつまらないと思います。出来ましたら会員の中からでも外からでも話しをして下さる方をお呼びして、講演会のようなものを開かれると、もっと集まられると思います。今のままでは、一回出席するともう十分ということになります。（河本幸子）

高校の同級会をかねて参加させていただきまして、いつも町別の工夫をしていたゞきありがとうございます。ネームプレートも着用しては。（西川宣孝）

もっと気軽な場所で、若い人も多く出て来られるような会もあって良いと思います。（谷口　捷）

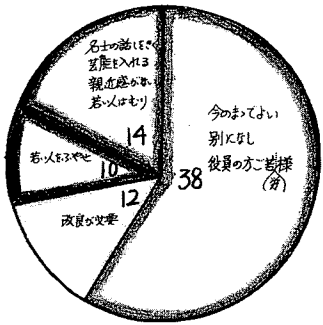
総会と懇親会を併せて年一回実施は賛成です。時には場所を変更するのも一案かと思います。（森田　宏）

総会の企画は理事様がご苦労されていることと思いますが、その他に三十代、四十代……等、年代別に何人かずつ委員を任命し、企画と呼びかけを行ったらいかがでしょうか。（飯田光雄）

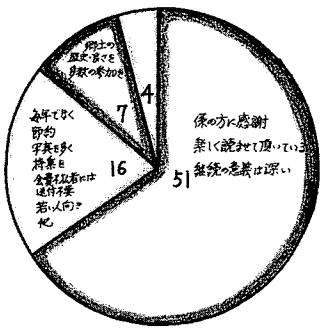
同年代（例えば昭和三十年代）の集まりなどがあると出かけられやすいのではないでしょうか。（北野参則・宏美）

固くるしくなく必要条件は満たされていて大変よいと思います。（佐藤菊子）

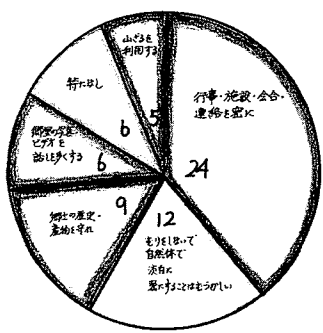
1 総会



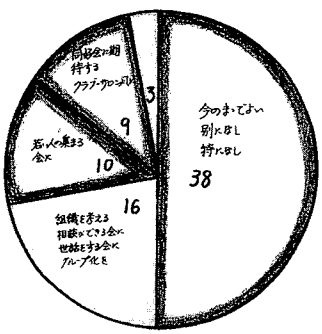
2 山ざる



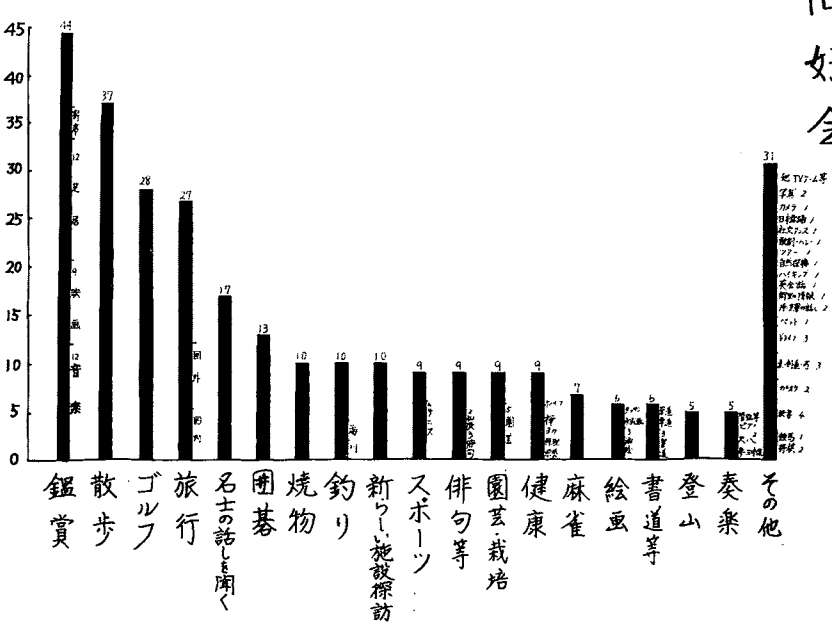
3 郷里



4 全般



同好会



最低でも年四回は開催してほしい。多忙なので毎回出張等と重なり、出席できないでいます。（藤原一義）

年一回で十一月のため仕事が多く重なることがあり、出席できなく残念です。月を変えては如何ですか。（祐安夏恵）

過日、同学年の集まりがあり、私はそれとなく出席を促す提案をいたしましたが、年に何回も出席することは不可能なので、ついつい気心のしれた集まりを選んでしまうということでした。まだまだ多忙な年代なのですね。（木呂場明子）

丹波出身の名士の講演会、座談会など工夫しては如何ですか。（谷垣邦夫）

同世代の方々が参加されているかどうか気になります。もう少し子供が大きくなりましたら一度出席させて頂きたいと思います。（佐野恵子）

人数の関係もあってやむを得ないと思いますが、知人友人との交流に終ってしまいます。もっと広く多く知り合える方法、参加した!!と思えるようなこと、何かないかしら？（高田美佐子）

従来の形でよいが、郷土の有名人、また若人の来会を願いたし。（足立順治）

現状で結構だと思います。結構たのしませて頂いております。限られた経費と時間ですから。（村上久夫）

ご年配の方が中心で（誤解かも？）私のような若いものが参加するには、少し抵抗があります。（荻野悦男）

この会が郷里のために何かお役に立っているという満足感がないと、どちらも（総会も「山ざる」も）虚しいのではないか？（徳田八郎衛）

節目の年に趣向をこらす程度でよい。郷友の方々にお会いすることで心強さを感じています。（鶴田　宏・ゆき子）

従来の要領で結構ですが、参加者のスピーチ、演芸をとり入れてはどうでしょうか。（臼井小五郎）

今まで、全く出席できていませんが、これからは積極的に参加したいと思っています。（徳舛紘逸）

参加呼びかけを重ねる以外に方法はないと思います。卒業年次のキーパーソンを決め、その人に呼びかけを依頼することです。（大野善三）

若い方々が多く参加するよう工夫が必要と思います。（仲　一聰）

年一回従来通り。懇親会は年二回とする。（春秋）、秋は総会と同時（従来通り春は四～五月頃に催す。おみやげに就いて、今迄は年一回だったせいか、派手にすぎた感なきにしも非ず。高価なもの取り止める。春秋共に一人一品宛渡るように。（些少ノモノにて可）（須原　清）

〈山ざる誌について〉

山ざるが毎年出るだけでも本会の存在意義はあると思う。（藤田正雄）

立派な本を大変だと思います。皆がもっと原稿を出すように、また出せるようにしてはと思いますが、まとめる方がまた大変になって困るのか？（余田士郎）

現在情報化社会、郷土の良さ、古さ、

歴史をもっと関知し、氷上郡の存在を誇るべきではないでしょうか。（田　敏夫）

編集の御苦労に感謝致しております。「ふる里の町並」写真のシリーズがあると面白いと思います。（坂上五朗）

編集の苦労は多とするも会費を呉れぬ人に送ることはない。（足立　治）

いつも隅から隅までたのしく読ませて頂いております。常岡画伯の表紙絵の素晴しいこと！二十一号の目次とその前後頁の写真は、きっと丹波の何処かなのでしょうね。大体どの辺りの写真なのか、一寸書いておいて頂けたら嬉しいです。（大地富美子）

常岡幹彦先生の立派な絵、保存版にしたいので、〝文芸春秋〟のように絵と文字を分離してほしい。（細見次郎）

編集の御苦労深謝し、併せて投稿の怠慢をお詫びします。（石田修三）

毎号充実した会誌が発行されて感謝しております。各号に氷上郡各町村、まわり持ちで紹介記事を載せて頂いたらどうでしょうか。（若森敏郎）

在郷の方々の投稿を希望します。（久下梅次・重子）

今の程度でよいと思いますが、四百字程度に限定した「短信」をもっと多くされたら如何。名簿は活用しています。（谷　達雄）

旧町村毎に今昔の映像入りのリポート等、親しみあるものではないかと思うのですが。（佐藤菊子）

大変なご苦労があると存じます。毎年載せられている住所録は不必要と思われます。異動、新規等で良いと思います。資源節約の折、紙質を落としては如何でしょう。（木呂場明子）

お世話下さる皆様ご苦労様です。もう少し生活に密着した楽しい投稿欄があってもいいのでは。（佐野恵子）

総会同様、係りの方のご苦心が伺われてありがたく思っております。郷土の文芸家の方々（上田三四二、細見綾子さん等）の特集などいかが。（澤田みさを）

今回より新連載の氷上政記、非常におもしろく興味をもって読ませていただいております。故郷の先輩に手渡しで贈りますので、二冊を小生宅迄ご送付願い度お願い申し上げます。その代償としては何ですが、三千円寄附用紙もご同封下さいますようお願いします。（井本義一）

山ざるが届くと近くの人や知っている人をさっそくさがしたものでした。地域別にも載せていただければ。（上田令子）

従来の編集大変結構也。原稿者のてらわぬ、かざらぬ自然体が欲しい。（足立順治）

故郷の古いお話等とても嬉しくうなずきながら読ませていたゞいています。目もうとくなり、耳もとおくなり、明治は遠くなりました。（山田淑子）

「山ざる」二十一号において氷上政記で祖父（代三郎）父（秀次）の名を見つけ、大変感激しました。ありがとうございました。（大塚秀弍）

毎年郷友会の報告は載りますが、次回

多数参加を呼びかける内容に乏しさを感じます。是非来年はと呼びかけるコーナーを作っては（特別企画で）どうでしょうか？　（本城英明）

故郷に対する思いが年を重ねるにつれて強くなり、大変嬉しく拝読させていただいています。　（青木　修・かよ子）

郡出身者には色々な階層、立場の人々がいます。肩書きや商売の宣伝につながる紹介、記載はなるべく控えた方が。　（杉上能章）

原稿依頼もさることながら、編集委員に取材記事をのせさせる努力をすべきだと思います。　（大野善三）

楽しく読ませて頂いております。もし出来ますなら氷上郡の町村長の御賛同を得て「町（村）だより」の頁を設けて頂ければ幸いに存じます。私はいつも柏原町の広報誌をなつかしく頂いていますが、それらとは別に簡単なものでも、皆さん喜んで頂けると思います。　（田　健一）

勿体ない程すばらしく拝見させていただいています。投稿できなくてすみません。　（瀬々妙子）

〈氷上郡との繋がりについて〉

コメの自由化、リゾート法等に反対し農村地帯としての郷土発展を助ける、つまり郷土の文化を守ることが、つながりを強めることになる。　（谷口明郎）

毎年帰っている。新しい出来事など誰かゞ話してくれると親しみがわくと思うけれど。　（吉田素子）

総論賛成、各論は個々の立場、氷上郡のどこにポイントをおくか難かしい。　（足立源治）

田舎もドンドン変化しています。帰れない人のためにヴィデオでもとって総会の時に見せて説明して上げれば、老人の方々感激なさるのでは。　（河本幸子）

お正月かお盆に郷里で懇親会を行うのはいかがでしょうか。（郷里の人も参加して）　（森田　宏）

氷上郡はもとより、関係ある方があれば、郷友会の協定ホテルやその他の施設を作ればいかがでしょうか。（飯田光雄）

年一度、ないし二年に一度帰省、福知山線沿線の松くい虫被害、何とか修復の大綱が立てられないかと痛切に感じます。　（稲次悌二）

新しい産業の紹介や、新設の学校、施設の紹介、物産の紹介や購買のしかたの紹介等はいかがでしょう？　（佐藤菊子）

名簿を見ていると氷上郡出身が圧倒的に多いようです。昔は多紀郡の方も居られたようですが、同郡としては又別の機関が存在するようにも思われます。「山ざる」は丹波篠山をすぐ思い浮かべます。素朴で山国の香がしますが、氷上が中心であるならば「ひかみ」という題名も面白いと思います。「ひ」は火・日・陽、「かみ」は神に通じ、丹波とも異なり、古代からの神の道のイメージが浮かび、いわゆる現在行政の氷上地区を指しているので、「山ざる」もよいですが、私個人としては「ひかみ」という言葉に非常にひか

れる処がありますので、私案として述べさせて頂きました。　（荘　正衛）

地元で集まる機会をつくること（盆・正月など）町長や芸術家の講演会、ゴルフコンペ。　（谷垣邦夫）

今は殆んど、この郷友会が綱です。一度郷里の柏原町にゆっくり訪れたいと思っています。　（伊比敏郎）

郷土史、郷土姓名史、遺蹟史の記事が欲しい。地域の同姓者会の催しや、千葉神奈川等々氷上会の開催も可なり。　（足立順治）

月に一度郷里へ帰っておりますが、その節は出来る限り、町長、助役等に会い色々話す機会を持つ様にしております。　（村上久夫）

前略いつもいろいろ御連絡、そして「山ざる」をお送りいただき、それだけで丹波とのつながりを強く感じております。私は、幼稚園、小学校、女学校と柏原で過ごし、その後は大阪、東京と離れておりますし、七年前、両親も他界し、柏原には誰も居りませんが、やはり思い出の多い丹波、私は大好きです。氷上郷友会の今後の御発展をお祈り申し上げております。何れ又、かしこ　（廣澤克江）

クラス会とまでは望みませんが、せめて同窓会くらいがここで開かれたらどんなに嬉しいでしょうね。若い日をつるし上げられても、過去を語れる一時が欲しいです。　（山田淑子）

年に数回帰省する毎に、関東地区（あるいは関西地区、海外等も同様）活躍している人々の消息を積極的に郷里の人々（町長等も含めて）に伝えています。失礼ながらいつまでも世界は丹波（あるいは柏原）を中心に廻っていると思っている人々には、何かの刺激になっていることを期待しながら……　（徳田八郎衛）

故里のシーズンの産物をよく知人に差し上げて喜ばれていますので、こちらにいても求めやすい所があれば、と思います。いつもは実家を通じて求めています。　（内田泰代）

「山ざる」で関東の方の住所はわかりますが、地元や又他所に住んでいる方のことがわかりません。数年に一度、合同で「山ざる」のような機関誌が出せればもっと身近かになるのですが。　（青木　修・かよ子）

郡内各所には新しい施設ができています。帰郷の際には訪ねてみては如何ですか？と「山ざる」に紹介ページを設ける。　（鶴田　宏・ゆき子）

私自身は帰らないので申し訳ないのですが、帰った方々の郡内の様子をもっと寄稿してほしいと思います。（杉上能章）

郷里の近況を収めたビデオ、写真等を総会時に紹介するのが良いと思います。　（臼井小五郎）

今郷土で何が行われているのか、どういう方向で進もうとしているのか、情報を交換する機会を多く持てば繋がりは強くなるのでは？　（仲　一聰）

郷里意識が淡白で申し訳なく思っています。歴史的な郷里に興味はあります。

（瀬々妙子）

町単位の会合を作り発展させていければ、（郡よりも町）　（安達健一郎）

正月かお盆の頃に郷里で集まる会を定期的に開催しては。　（林　孝男）

〈郷友会全般について〉

核となる事業も場所もない。親睦会団体である本会は今のまゝでよいと思う。

（藤田正雄）

どんどん代が替ってくると先細りになると思います。だから自己紹介でお互いを知り小グループの集まりによる大グループを作ること、田舎の名所でなく、出身地のＶＴＲをみせてほしいと思う。

（余田士郎）

バス又はドライブ旅行、年一回したい。

（田辺泰久）

若い人にも参加できる魅力あるものであってほしい。後継者を造ること。鮎は瀬に人は情の下に住む。　（足立　治）

将来は暇も出来てくるので、仲間次第では楽しみの一つになるように出来ればなあ～と願っています。　（吉田素子）

サロンを借りてそこへ行けば何時でも友人に会えるような案は如何。会費は特別徴収が必要と思うが。　（加賀山次郎）

丹波の名産を友人などを通じてとりよせたりしますが、なかなかよいものが手に入りません。栗、山の芋、松茸、黒豆など購入のお世話など、又紹介などしてほしいのですが。勝手なお願いですが、よろしく。　（稲次淑子）

会の人の中には仕事、健康、結婚等、色々と悩みを持っている人もあると思います。そういった人達が気軽に相談出来るような会になればと願っています。

（谷口　捷）

ボランティア的な仕事は、何かの趣味を通して心のふれ合いの中から統率力ある方の呼びかけがなければ、紙上だけではつい見落しがちなのでは…（私もその一人にすぎませんが）　（羽賀澄代）

いろいろな同じような会に出ますが、大体同じようなものですよ。あまり気張らないで長続きさせることと思います。

（谷　達雄）

自己紹介したい方のためのコーナーを設け、活躍の内容や宣伝したい方は有料で広告も含める等（一）とも関連づけていかがと思います。　（佐藤菊子）

定期的な総会を通さずとも、出身者の常に多く集まるパブ、飲み屋などがあれば、自然にパイプができて面白いと思います。　（藤原一義）

私達は氷上郡の地を母国として生れ育ったのであるから、一人一人は兄弟姉妹の関係であり、元をたゞせば恐らく同じ血の一統血統につらなっているのであるから、全員母国を讃美感謝したい。京都に在住していますと、古くから京都では丹波とは口丹波（亀岡）奥丹波（福知山）及び北部をいうのであって、兵庫県に属する丹波については全く考えていないようです。地元の京都新聞でも氷上の記事は皆無です。　（荘　正衛）

若年層の参加を！（青年女性を含む）

懇親会は全体として人数が多すぎるので年代別、町別に分科しては？（谷垣邦夫）

どうあっても存続されることを期待します。（一）にも関係することですが、社会の一線から引いた人たちとの定期的交流、サロン風なもので関ってみたいと思います。（高田美佐子）

今は何もお手伝い出来ず申訳ありません。いろいろな趣味の活動から参画を呼びかけることは仲間も入り易い気がします。私はぜひ囲碁に一度出席させて頂きたいと思っています。（伊比敏郎）

父の郷里の人々の集りとしてうらやましく思っています。残念ながら知人皆無でも二世三世のつどいがあって何か企画があれば参加もしてみたいと思います。（足立省一郎）

郷友の二世、三世を何とか考えては。郷里外で生まれ育った人は郷友にはどうもむずかしい難題なり。（足立順治）

いつも〃くじ引〃などで楽しませていたゞいております。〃ショータイム〃も結構ですが音のボリュームが大きすぎるのと長すぎるのとで、お互いのおしゃべりの時間が短かくなるので、もう少し考慮願いたいと思います。

せっかく参加しても（特に若い世代に多いのですが）もっと多くの知人同世代の人達に会えると思っていた人達は、それに該当する参加者が少ないために、次回からは参加しない方が多いようです。是非あなたもというような呼びかけ、何とか出来ないものでしょうか？名簿を充分活用して。（本城英明）

会員は、「現在の郡内がどう変っているか」が最大の関心事の一つと思います。例えば、駅、学校、神社、寺、町並など、難しいことではありますが、帰れる会員諸氏の報告がやはり身近さを育ててくれると思います。（杉上能章）

（若がえり法）常任理事　理事

明治時代……一～二名　若干名

大正時代……一～二名　〃

昭和シングル時代一～二名　〃

昭和十年代……一～二名　〃

昭和二十年代……一～二名　〃

昭和三十年代……一～二名　〃

昭和四十年代……一～二名　〃

のように常任理事・理事を各ジェネレーション別に出すことにし、他は現行通りとする。最初は各年代の誰かにターゲットしお願いするしかない。何かの行事（総会他イベント）の時の動員はしやすくなります。（足立和巳）

一部の人達の会にならないように、また若い人達の連絡の場となるようにしてほしい。（足立由宏）

各年次の卒業同窓会（小学校であれ、中・高校であれ）が活発に開かれることが全体の原点だと思います。その指導をすることが、郷友会の役目かと思います。（大野善三）

先輩を囲む会など会員の交流が有効かと思います。同窓会、同級会から一工夫必要だと思います。（仲　一聰）

かたよった考えとは思いますが、なつかしい方々と会うのみではなく、昔のよき時代（特に戦前）を語って下さる（各郷里の想出、事件）ような集りがほしいと思います。会費の払込、銀行振込機を利用したいのですが。　（瀬々妙子）

〝同好グループ〟が各々活発に活動するようになれば、会員相互の信頼も深まり、自ずと会全体に活力が生ずる。会誌「山ざる」の発送について、三～五年間連続発送しても、何の音沙汰も無い場合は、停止しては如何？　（須原　清）

都会に住む人間として、何か社会や世界、また次世代に向かって共同で行動を起せるようなものができればいいなと思います。例えばユニセフの基金に参加するとか……意志を持った行動集団とはいかなくても、年に一度ぐらい善きことが出来るような会でありたいものです。

（木呂場明子）

いつも楽しく拝見させていただきました。同級生の記事も「がんばっているんだな」の思いで…私達は八月二十四日で兵庫県三田市の方へ移転してしまいますが、これからもずっと続けていただきたいと思います。長らくお世話になりました。どうぞご自愛くださいませ。（北野公認会計事務所・北野参則・宏美）

文化同好会（仮称）へのおさそい

副会長　吉住重造

有志数名で発足した文化フォーラムもいつしか十数名の集まりとなり、ますますその輪が広がりつつあります。昨年実施したこのフォーラムの経過と今年の予定をお知らせしますので、多数のご参加をお待ちしております。

この文化同好会では、絵画、書道、彫刻、音楽、演劇、等々の鑑賞と、文化遺産、歴史的遺蹟、等の散策を行います。

昨年度第一回のフォーラムは四月八日「三溪園の散策」でスタートしました。広大な庭園の中には国宝級の建物が到るところに散在、家康から賜った春日局の茶庵や、織田有楽斎の茶室もあり、丹波とも関係の深いことを知りました。散策のあとは、横浜ベイブリッジを観光し、チャイナタウンに足をのばし、中華料理に舌づつみをうちながら、ふるさと談義に花が咲きました。

第二回＝「浅草散策と長命等の桜餅」

第三回＝足立誠一さんのお世話で「古都鎌倉の散策」でした。

第四回＝足立さつきさんのオペラ「椿姫」鑑賞会（サンパール荒川）。

第五回＝「西域美術展」（国立博物館）

次回は八月四日（日）「東京湾岸屋形船遊覧」、当日十七時浅草雷門前集合。

ついで十月六日（日）「ルーブル美術展」（国立西洋美術館）、当日十一時に上野駅公園口改札集合を予定しております。

肩のこらない楽しいフォーラムとして運営していきたいと思います。皆さまのご参加を心よりお待ちしています。

郷友・散策の会

木呂子恵美子（春日）

五十九年に義父を九十四歳で送り、その後五年もたたない昭和の終りとともに亭主もさっとあちらに行ってしまった。

思えば、義父のいちばん大変だったころ、人と出かける約束などとてもできない状態のときでも、ちょっとした時間を見つけては、一人で歌舞伎の一幕だけ見に行ったり、銀座通りを歩いてみたり、絵の展覧会があると次々に見てまわったり、意欲的に動いていたのに、一人になってからは気力もなくなり、すっかり出ぶしょうになってしまった。

そんなときに、郷友会の先輩のお誘いを受けて、思いきって出かけてみた。気もちのよい方たちばかりで、とても楽しい散策ができてよかったと思っている。

〈浅草〉 平成二年五月十三日（日）、上野駅に集合して国宝展を見る予定だったのが、日曜日で混み、二時間待ちの行列とかで予定を変更、浅草界わいの散歩になる。メンバーは吉住さん、宮野さんたち六名である。浅草橋にある何とも奇妙な建造物のビヤホールでお茶などを飲み、そのあと前会長・伴仲信次さんのお墓参りをする。ありし日のにこやかなお顔がしのばれる。有名な長命寺の桜もち（一つに葉が三枚も使ってある）を皆でおみやげに購入、昼食は近くですます。久しぶりに浅草の仲見世を歩く。浅草寺にもお参りして大提燈の下で記念撮影をして解散となった。

〈鎌倉〉 鎌倉山にお住いの足立誠一さんのご案内で、鎌倉めぐりの会。

平成二年六月二十四日（日）。北鎌倉の駅に十一時集合。足立さんが待っていてくださった。その日のメンバーは吉住ご夫妻、宮野、鶴田、中居、出町、伴野、足立の各氏と木呂子の九名である。

あじさい寺・明月院は、私はあじさいが好きなので期待しただけあって、やはり一見に値いするものだった。観光客の多さにも驚いたが、あじさいの色の美しさ、珍しい種類の多さに感嘆した。特にまっ白い花房の中心がピンクに染まっているのや、ブルーの花など、はじめて見るものだった。順序はちがっているかもしれないが、訪ねた所は、臨済宗・圓覚寺、国宝の舎利殿も山門も落ちつきのあるもので、心の安まるお寺だ。臨済宗・

建長寺はわが国最初の禅寺だそうだ。しんとした雰囲気に包まれて、屋根の線や柱のたたずまいに京都の建仁寺に通じるものがある。――子どものころ、ハルビンから引き揚げて、父の里、京都に住んだことがあった。近くの仏光寺の広い境内が遊び場で、弟妹をつれて紙芝居を見たっけ。実家の菩提寺である建仁寺ではいつもお坊さんが庭砂にほうき目の美しい模様をつけていくしぐさに見とれたものだった。神社仏閣は私の幼いころの想いをかき立てる――。

昼食は円覚寺前の門前という所でとった。鎌倉八幡宮では、だれかが、ここで修学旅行の写真をとったものだ、といい出した。一行の九人中に昭和30・31年卒業生が六人もいたので、皆それぞれに思い出した。あの階段に男女別々の旅行だったが、皆びっしりと並んで写真をとったなどと、昔に帰ったひとときだった。

ふだん運動不足の私は、一行の中でいちばん足がダメで、すぐにネをあげてしまい、皆に迷惑をかけてしまったようである。まだまだたくさん良い所のある鎌倉、住んで居られる人はいいなと思う。次の機会にそなえて足を鍛えておこう。足立さんには大変お世話になって、一同感謝したことだった。

氷上ゴルフ会報告

現在の会員五十二名、年四回の開催で毎回四～五組が参加しています。プレー費は各自負担。会費三〇〇〇円、但し年四回分前納の場合は一〇〇〇〇円、会費は賞品とパーティ費に充当します。

郷友新人のご参加を歓迎します。左記にご連絡いただければ毎回開催日などお知らせいたします。

横浜市西区岡野一―一三―一三
ミワ電気工事株式会社気付
氷上ゴルフ同好会事務局　足立謙悟
TEL　〇四五―三一二―五二九一
FAX　〇四五―三一二―五三一三

〈最近の成績〉

第四十回　東松山カントリークラブ
平成二年六月七日
優勝＝村上久美子　二位＝佐々木宏
三位＝岡　吉明　BB＝早瀬徳郎

第四十一回　嵐山カントリークラブ

平成二年六月七日
優勝＝佐々木宏　二位＝綾木　健
三位＝足立謙悟　ＢＢ＝村上久美子
第四十二回　京葉国際カントリー倶楽部
平成二年十二月五日
優勝＝佐々木宏　二位＝安達健一郎
三位＝村上　昇　ＢＢ＝近藤勇夫
第四十三回　ファイブハンドレッドＣ
平成三年三月一三日
優勝＝村上久美子　二位＝松岡恵美子
三位＝松岡昭宏　ＢＢ＝早瀬徳郎

氷上囲碁同好会報告

毎月第三土曜日の午後一時から、春日建設ビルの地下一階「かすがホール」で開催しています。

囲碁同好会は十数年の歴史を刻んでいますが、このところ参加者数は伸びなやみで、活気はいまいちです。

平成二年四月から三年三月までの成績はつぎの通りです。

藤田	20	19	勝
坂上	17	15	負
小日向	16	15	
増田	16	17	
上小沢	13	24	
谷口	7	0	
足立源	7	7	

なお、平成二年八月十八日～十九日には、箱根湯元の「おかだ」旅館にて合宿、蟬しぐれの中で烏鷺を戦わせました。

訃　報

足立石蔵殿（春日町）平成二年六月九日
足立静夫殿（氷上町）　〃　六月八日
葦田有功殿（氷上町）　〃　八月十八日
市原このゑ殿（市島町）　〃　四月十五日
富沢　章殿　〃　三月二十日
大木俊治殿（氷上町）昭和五十八年十月

心からご冥福をお祈り申しあげます。

八王子・青葉霊園に管理事務所

――七月末に完成予定――

郷友会々員で丹波石龕寺出身の堀井隆川さんが、八王子に新寺を建立された青葉山・真照寺のことは既報の通りです。

堀井さんの真摯な布教活動には、全く頭の下がる思いです。多くの檀信徒の願望であった霊園も平成元年に開苑され、第一期分譲五六一区画は既に三分の一の申込みがあり、第二期工事に先立って管理事務所が併設されます。場所は霊園第一区駐車場脇の二階建で、事務室、休憩室、湯茶室、ロッカー室のほか和室も二部屋あります。郷友会の皆さま、おついでの節にどうぞ！　（宮野　近）

青葉霊園＝八王子市川町四二七番地
総面積＝約三〇〇〇坪・五六一区画
宗旨・宗派不問（但し在来仏教各種）
お問合せは真照寺へ
電話＝〇四二六―六三―八四〇三番

'90丹波の動き

――丹波新聞の見出しから――

政治・行政

○平成二年の県施策　丹波の森の殿堂（仮称）の充実　並木道公園の整備　（1・7）

○市島町の森、表、石原の三地区で農業集落排水工事に着手　平成二年度から三年計画　（1・11）

○〝豊かな県づくり〟過疎地に青年を派遣　土曜ふれあい学級（仮称）を開設（兵庫県施策）　（1・18）

○丹波地方の新成人　氷上郡千二十三人　多紀郡五百六十九人　（1・18）

○民社が吉岡氏を応援　柏原町で選対会議（民社党五区連）　（1・21）

○総選挙いざ本番へ　現職谷氏追う四新人〝佐々木票〟に注目　（1・25）

○無投票か一騎打ちか　柏原町長選告示まであと二日　（1・28）

○無投票で安井氏再選　あっけなく柏原町長選　（2・1）

○衆議院選挙スタート　し烈な争い　兵庫五区は五氏が立つ　（2・4）

○中盤の〝正念場〟へ　どこへ行く〝佐々木票〟（衆院選兵庫五区）　（2・8）

○衆院選、さあ投票へ　審判待つ五候補　夜八時半ごろ大勢判明　（2・18）

○吉岡氏トップで当選に喜び爆発「責任の重さ感じる」　谷氏は貫録の六選前回の得票上回る「ふるさと創生」に全力　（2・22）

○丹南町住吉台の人口が一千人を突破　建売分譲で一気に増加　（2・15）

○県がゴルフ場開発を規制　新規受付は一市町一ヵ所　（2・22）

○市島町栢野に住友ゴム工業誘致　スポーツ総合研究所も　造成着手　（3・1）

○西紀町でふるさと創生事業に行政無線システムを町長に答申　地域づくりで基金も　（3・4）

○十年計画で公共下水道　終末処理場を山南町北和田で起工式　（3・4）

○予算町会始まる

山南町予算総額は五十六億に　山南中給食棟建築など　（3・8）

市島町の予算総額は四十九億円　地力増進施設を建設　（3・8）

青垣町の予算総額は三十九億九千万円　老人福祉施設建設へ　（3・8）

柏原町の予算総額は四十二億五千万円　福祉施設用地を取得　（3・11）

春日町の予算総額は五十三億五千万円　大路幼稚園舎を改築　（3・11）

○植田八郎県議が死去　土地改良事業などに尽力　補欠選挙へ動き活発（3・11）

○丹波の森に積極予算　篠山町総額は百七億円　（3・11）

○今田町の予算総額は十八億四千万円　ほ場整備事業推進へ　（3・11）

○丹南町の予算総額は四十八億八千万円　味間小の用地取得へ　（3・11）

○氷上町の予算総額八十二億三千万円　斎場建設に全力あげる　北幼稚園舎の改築なども　（3・15）
○丹波十町総額は五百七十八億円　前年当初比で七％増　（3・15）
○多紀郡の県議補選　藤井正一氏（前篠山町長）が出馬へ　（3・18）
○四月から神戸地・家裁の篠山支部を柏原支部と統合　簡易裁判所は存続　（3・22）
○酸性雨測定所を開設　県下第一号柏原保健所の屋上に自動測定機　（3・25）
○丹波の県職員異動　県民局長に村岡隆夫氏、柏原病院長に岡本良三氏、柏原財務所長に石橋義則氏、多紀福祉所長に村上克己氏　（4・1）
○丹波十町元年度の特別交付税の総額は十四億七千八百万円　平年度比大幅な伸び　（4・5）
○県議多紀郡補欠選挙スタート　藤井、梶川氏の対決　（4・15）
○多紀郡県議補選、藤井氏優勢に展開　低調ムードで終盤　（4・19）
○多紀郡県議補選　藤井氏が大差で当選　梶川氏予想以上の善戦　（4・26）
○さわやか、春の叙勲　丹波は四氏が栄誉に輝く
○消費税廃止など訴え総評、同盟系が各会場でメーデー集会　（5・3）
○ふれあいの祭典'90事業　三田・丹波実行委が計画　文化、スポーツ、健康、福祉、生きがい　統合イベントは八月に　（5・10）
○カラオケハウスなどの建築は〝町長の同意〟が必要　篠山町が「指導要項」定める　（5・13）
○春日中央地区ほ場整備　十年の歳月をかけ完成　棚原に記念碑建てる（5・13）
○自動車税前年度比で七・四％増　課税額は十三億七千余万円　保有台数は四万三千四百五十四台　（5・17）
○〝ふるさと創生〟で全集落にテレビとビデオデッキを設置（西紀町）（5・20）
○友政城跡に遊歩道！市島町の環境整備事業進む　（5・20）
○今田町長選　大上氏（前議長）と山本氏（現職）が対決　激しい舌戦で終盤へ　（5・24）
○今田町長選投票へ　町を二分する激戦　（5・27）
○今田町長選　山本氏再選を果す　大上氏の猛追振り切る　現職の強み発揮　（5・31）
○ようこそ柏原町へ！ダン市長（アメリカケント市）ら来訪　留学生慰問や記念植樹　友好親善深める　（6・17）
○土地利用の相談を受け付け　丹波県民局に窓口開設　線引きなど見直しも　地域適正へ検討委員会　（6・28）
○ゴルフ場開発に反対　自然破壊許さない　多紀郡の有志が「考える会」を結成し四町と県に申し入れ書提出　（6・28）
○柏原町は〝ふるさと創生〟で職員を国内外へ派遣　行政能力の向上はかる　（7・5）
○丹南町で初の都市計画道路　地価高騰

で遅れぎみ　（7・5）
○春日町は土地開発指導要項を施行　乱開発や公害防止へ　（7・5）
○氷上郡平成元年の人口動態　死因一位は心疾患で変わらず　出生七百八十四人死亡七百八十三人、婚姻三百三十三組、離婚五十組　（7・12）
○市島町で氷上郡民のつどい　暴力追放や健全育成　河野巡査部長に警察官賞　（7・18）
○丹南町が町づくり基本構想　十年後の人口一万六千五百人と予測　（7・18）
○丹南町〝ふるさと創生〟で観光開発　松尾山と白髪岳一帯の登山道整備で基礎調査　（7・22）
○福祉サービス望まぬお年寄り　介護者の大半に疲労感　氷上福祉事務所の寝たきり老人の実態調査　（7・29）
○春日町の丹波の森構想まとめる　黒井川沿いに河川公園　歴史的公園や歩道も　（7・29）
○町の未来図作成へ　経済、文化など多角的　市島町のふる里市島未来塾　（8・2）
○山南町に住み続けたい！八十四％　町勢振興計画で住民意識調査　（8・5）
○ＪＲ新三田―篠山口の複線化早期実現へ多紀郡大会　（8・5）
○篠山口駅西地区十八ヘクタールの良好な市街地形成を　橋上駅、広場などを提示　（8・9）
○春日町立「せせらぎ荘」閉鎖　施設の老朽化と利用減で　（8・26）
○篠山口までの複線化多紀郡民大会　一万人署名展開へ　（8・30）
○市島町に初のゴルフ場　氷上郡で四番目　丹波では八番目に　事前同意から五年半　話が持ち上がり十七年ぶり　（9・2）
○丹波十町平成二年度の普通交付税の総額は百十九億八千二百八万円　前年比十一・九％の増　（9・6）
○焼却灰をタイルに再生　全国初のプラント導入　柏原町が上小倉地区に建設　（9・6）
○市島町下竹田十郎野でゴルフ場起工式　完成は平成五年の春　（9・9）
○知事選貝原、小田氏の対決　前回と同じパターンに　（9・16）
○ゴルフ場建設に反対　塩津峠付近（市島町）の山林に立ち木トラスト（市島町）自然と水を守る会と環瀬戸内海会議　（9・27）
○丹波十町元年度決算の状況　十四年連続で全町黒字　経常収支率も好転（丹波県民局まとめ）　（10・4）
○丹南町長に杉本幸男町長が出馬表明　（10・4）
○知事選スタート　舌戦四氏が立候補　貝原、小田氏事実上の一騎打ち（10・11）
○貝原、小田候補相次ぎ丹波入り　投票率気にする各町　知事選、徐々に関心高まる　（10・14）
○八月末までの丹波の人口　十一万七千八五三人（丹波県民局調べ）　（10・14）
○青垣町営住宅岩本団地周辺の景観と調

和！県から優良賞受ける　（10・21）
○知事選、終盤撃戦へ　各町選管啓発運動に追い込み　（10・25）
○知事選、貝原氏大差で再選飾る〝史上最高得票〟で圧勝　（11・1）
○即位の礼と大嘗祭の「奉祝行事やらないで…」社会党氷上総支部など郡内各町に申し入れ　（11・4）
○篠山町選管が知事選で投票率上位を表彰　一位は大谷地区　（11・8）
○篠山口までの複線化早期実現へ三万人署名　多紀郡で県知事とJRに陳情　（11・15）
○篠山町の分譲宅地　二十五区画になんと三百八十人　（11・25）
○幼稚園を存続して！市島町幼児教育を考える父母の会が署名添えて町、議会へ陳情　（11・29）
○丹波の農家数五年前に比べ六・八％減十アール以上は一万四千戸台に（12・9）
○篠山町議会十一対十の僅差で定数削減案を否決　（12・13）
○篠山町本明谷で新鳳鳴カントリー着工丹波で九番目　二十七ホール　（12・16）
○市島町塩津峠付近のゴルフ場開発を断念　立ち木トラストに成果か　（12・20）
○市島町長荒木真次氏が引退表明「後進に道ゆずる」　（12・20）
○丹波の人口は十一万五千四六六人　増加著しい丹南町　今年の国勢調査　（12・20）
○丹波の新成人は千五百九十人（丹波県民局調べ）　（12・23）
○春日町の村上町長が再出馬表明　（12・27）

事業

○篠山統合井堰全面改修に着工　〝風船ダム〟へ一新　（1・14）
○北近畿豊岡自動車道の早期完成へ結束はかる　整備推進連絡協が発足（2・11）
○県道篠山―丹波線（般若寺―和田）でバイパス建設に着手　（2・11）
○県道朝坂―山南線は平成三年春に改修完成　（2・11）
○水不足解消の大工事　着工以来十八年の歳月　今田町の県営かんがい排水事業が完工　（3・1）
○篠山川の水量を監視　川代会館（山南町）を建設（近畿農政局）　（3・22）
○国道一七三号が全線改修　阪神都市圏へ最短距離　篠山町で完成祝賀会　（3・25）
○緑豊かな丹波演出　柏原駅前の〝修景事業〟第一期工事七百六十メートルが近く完成　（4・19）
○氷上町谷村の白山、五台山の登山道や遊歩道が完成　（4・22）
○国道三七二号今田バイパスが完成　（4・22）
○平成二年の公共土木の総事業費五十三億七千四百万円
北近畿豊岡自動車道は青垣から着手
柏原―山南の奥野々峠の改良も　（6・24）
○竹田川（市島町）に桜づつみ　建設省

モデル事業に認定　柏原土木が着手　（7・1）
○丹波少年自然の家の二期整備事業着工　施設能力の拡充図る　（8・5）
○鐘ヶ坂峠土砂崩れ　鉄骨フェンスで再発防ぐ　十月二十五日の完成めざし突貫工事進める　（8・19）
○改良工事が本格化　国道四二七号の播州峠の青垣町側二、三三〇メートル　（10・14）
○県道市島―和知線の戸平トンネルが完成　大型車運行可能に改修　（10・21）
○市島町戸平トンネル完成祝ってパレード　付近の公園には愛育の鐘と名水碑　（11・8）
○氷上町京橋架け替え工事着工で通行止　（11・11）

教育・学校

○柏原高校にシンガポールからチャン君が短期留学「日本語が勉強したい」　（1・11）
○氷上郡の今春の入学予定者数　小学校は九百九十七人で七十人増　中学校は千八十四人で三十三人の増加　（1・14）
○氷上郡教委の教職員の異動方針　注目の教委間交流　管内転入は難しい現状　（1・21）
○国語教育で郡教委指定校の新井小で取り組みの成果発表　（2・1）
○二年間の〝沈黙〟破りケント・メリディアン高校から柏原高校へ留学生（2・8）
○丹波の公立高校で千三百九十七人が巣立つ　（2・18）
○新井小児童がシイタケを栽培　地域の特産物を教材に　（2・22）
○勉強の教え方のうまい先生が好き　小学生の四割、中学生の五割が塾通い　口うるさい親は二十％（氷上郡教委のアンケート）　（2・25）
○春日部小で校長と児童が昼食を共に　六、七人づつ全校生徒と　（2・25）
○氷上中の障害児学級が婦人会の協力を得て紙すき　カードを作り卒業生にプレゼント　（3・1）
○丹波の公立高校各校の出願者確定　定員割れなくなる　最高競争率は氷上高校の営農科で一・六四倍　（3・4）
○吉見小が西日本金管バンド大会に初出場　（3・8）
○氷上郡教委が新年度の教育方針発表　一校一色運動を推進　全小学校で自然学校　（3・15）
○氷上郡関係校長異動者
　藤原健久下小校長、上野敏夫春日部小校長、常岡譲小川小校長、北山齋大路小校長、谷川昌明芦田小校長、芦田雅康船城小校長、三方彰一遠阪小校長、佐竹善雄東小校長、藤本務吉見小校長、田辺万四郎三輪小校長、大槻修一和田中校長、笹倉豊春日中校長、久下信生柏原中校長　（4・1）
○ベン君篠山鳳鳴高へ　八人目の交換留学生（米・ワシントン州）　（4・5）
○氷上町西小で給食室、特別教室棟が完成　ランチルームも設置　（4・5）

○登校拒否、丹波でも大きな問題に　中学校で二十六人と激増　（4・12）
○兵教組氷上支部に亀裂　四十一年目に二つの組合　連合加盟に反対派が新組合氷上教組を結成　（4・19）
○鳳鳴高校一年生が神鍋高原でオリエンテーション合宿　（5・13）
○学力向上阻む要因は　登校拒否の実態も言及「研究紀要」作り成果報告（氷上郡教委教育研究室）　（5・17）
○青垣中三年生に宿泊先のホテルから修学旅行でマナー賞　明朗な態度が好印象　（6・3）
○氷上西高校は中学校との連携密にし公開授業や意見交換　（6・10）
○若さが夏空にこだま　柏原高校の大ハッスル体育大会　（6・21）
○和田小で岩屋城の歴史を勉強　地域の財産を教育に　（7・15）
○柏高コーラス部が全国高校文化祭に出場　美術部員二人も彫塑、油絵を出品　（7・18）
○市島町前山小六年生　二ヵ月かかった堅穴式住居完成「原始生活」を体験　道具の変遷など学ぶ　（8・2）
○氷上高校で職業教育の体験学習　播丹からも中学生三百人がバイオテクノロジー実習　（9・2）
○篠山町八上小の木造校舎の大改修完成国庫補助の第一号　（9・9）
○同和教育推進の資料に近く意識調査を実施（氷上郡教委）　（10・7）
○来春中卒生二十八人減だが県立高校募集定員の現状維持を県教委に要望書（氷上郡地推協）　（10・11）
○柏原高校の五十二人民間企業への就職決まる　（10・18）
○氷上西高校の移転を　通学範囲の広い場所に　氷上郡ＰＴＡ連合会が地推協に要望書提出　（10・28）
○高校募集定員の現状維持を　多紀郡で署名運動　（11・1）
○市島町吉見小で国際教育実践を発表　（11・4）
○柏原高校で若い力ふりしぼり校内マラソン行う　（11・25）
○来年の高校募集定員　柏原高校で一学級減　多紀郡は変わらず　（12・9）
○春日町黒井小で空き教室を開放　ふれあいサロンを中心に学校と地域交流の場に　（12・9）
○西豪州のリーミング高校から丹有の高校に二十四人留学　一月下旬から十二日間　（12・16）

産　業

○今田町の陶の里に〝のぼり窯〟が完成　（1・11）
○「松茸おこわ」を開発　柏原町の村おこし委員会はヒット商品にも期待　（1・14）
○たばこ消費税額は前年比八・八％減販売数量も落ち込む　（1・18）
○激減！酒造就労者　最盛期の十分の一に　五十五歳以上は七十四％（多紀郡）　（1・18）

○春日町国領のホビーファーム内に農作業体験施設を建設　（1・21）
○菌床椎茸施設が完成　ブランド化へ前進（柏原町農協）　（1・28）
○時代のニーズ先取り　週休三日制の導入決める　チーム編成で交代に（神崎紙器氷上事業部）　（2・4）
○産地間競争に勝とう　安心して食べられる米を〝新兵庫米づくりで大会（丹波地区）　（2・8）
○市島町大杉を山椒の里に！五年計画で二千本植樹し、過疎地の〝村おこし〟　（2・15）
○間伐材を木工製品に　コンクールに業者などから八十点出品（丹波年輪の里）　（2・25）
○地元主導型の共同店舗「ゆめタウン氷上」を計画　氷上町本郷のバイパス周辺森公園や多目的ホールも　（3・1）
○〝春の訪れ〟急ピッチ　篠山で山の芋植え付け始まる　（3・25）
○平均反収百五十キロ目指す　青垣で丹波大納言小豆生産者大会　（3・29）
○明治ナショナル春日工場が新規事業着手へ！工場の増設工事が完成　月産十五億円目標に　（3・29）
○遊農園かすが開園式　もちつきや丸太切り　阪神間から四百人参加　（4・5）
○二百ボルト機器で料理実習　関電柏原にショールームできる　（4・5）
○牛フン処理で推肥　年間三千トンを生産　市島町喜多に地力増進センター建設　（4・12）
○大工業界で組合設立　組織化は県下初めて　研さんや後継者育成へ　（4・15）
○市島町友政工業団地に大和特殊硝子が進出　操業は平成六年度　（4・26）
○春日町の橋本電設が柏原町大新屋に健康づくりの殿堂　温水プールやアイススケート場　（5・3）
○柏原町田路に「なかしんコスミック」完成　研修やスポーツに　一般にも開放　（5・10）
○春日町国領のホビーファームで田植え歓声あげて初体験　阪神間から七十人が参加　（5・17）
○青垣で全国染織展　伝統工芸を展示即売　（5・24）
○平成元年四月の高卒者初任給　男子平均十二万七千円（柏原職安調べ）　（5・31）
○安全な農作物を供給　市島で全国農協交流集会　（6・3）
○新茶の香りに包まれて丹南町のお茶まつりに三万人　（6・7）
○地元志向さらに増す　来春丹波の高卒予定者の三十五・六％が就職希望（柏原職安調べ）　（6・10）
○中信がボーナスの意識調査　五十六％が増額を予想　年々高まる貯蓄志向　（6・14）
○本物の味を産地直送　青垣町と山梨県大和村が物産交流に力こぶ　（6・24）
○氷上郡六農協一本化へ　合併予備契約書に調印　合併予定日は十二月一日　（6・28）

○柏原町の「丹波悠遊の森」森林生態学舎が開館　自然学習の拠点に　（7・5）
○篠山町が二年がかりで〝カジカの里〟づくり　籠坊温泉に保護地　（7・8）
○春日町商工青年部主催のオフロード大会開く　炎天下で迫力競技！　京阪神からファンがどっと　（7・12）
○グリーンボールの需要急激な伸び　丹波地方の特産物に　柏原で苗つくり始まる　（7・15）
○平成元年度丹波への観光客好調！二百万人を突破　祭典で知名度上昇（7・15）
○春日町野上野に県下初の本格的なサーキット　好調に初試走　（7・26）
○名所をはり絵に　十一月の文化祭めざしお年寄りが取り組む（氷上町デイサービスセンター）　（7・29）
○青垣町市原のあまごの家　丸太小屋の休憩所作る　（8・9）
○百二十八人のUターン実現　柏原Uターンバンクが「バンクだより」発行　（8・12）
○平年作だが甘味十分　恵みの雨で回復に向う　ナシ、ブドウ狩りオープン（春日観光農園）　（8・19）
○六農協の合併を承認　名称は「丹波ひかみ農業協同組合」　（8・23）
○〝実りの秋〟一気に　多紀郡で順調に稲刈り始まる　（8・23）
○氷上町石生水分れ公園に水分れ茶屋できる　自然景観にマッチ　（8・30）
○「有機ぶどう」出荷へ　市島町特産めざし四年目　（8・26）
○人気がある市島有機ぶどう　品不足で贈答用お断りも　（9・2）
○丹波グリは豊作型　台風被害はかなり多い　（9・2）
○サクランボで活性化　転作田で観光と特産育成　野上野中央営農組合が山形で栽培研修　（9・9）
○春日観光園で雨による予約取消し相次ぐ　台風影響とダブルパンチ　（9・20）
○氷上町清住のコスモスまつり　おにぎりに人気　（9・27）
○七年ぶりに料金改正　国民宿舎ささやま荘　大人＝宿泊料三千百円　（9・30）
○遅れてすみません！丹波マツタケ顔見せ　（10・4）
○今年はもみじの名所重点　観光地スタンプめぐり（氷上郡観光連）　（10・7）
○ドリームカーニバル　松茸入り百メートル巻ずし　珍しい〝アメ細工〟も　多彩な催しでにぎわう（山南町商工会）　（10・11）
○西紀町シャクナゲ村民に〝ふるさとの味〟送る　新メニューに黒大豆の枝豆加え　（10・14）
○篠山町農協「特産館ささやま」入館者五十万人達成へ　郷土料理と特産物販売が大当たり　（10・18）
○干ばつで減収が心配　篠山町で〝山の芋〟収穫始まる　（10・25）
○装い新た！JR西日本は花博のSL「山の駅」を柏原駅舎に　柏原町活性化にと歓迎　（10・28）
○〝西洋わさび〟特産に　今田町で来春

から栽培始める　（11・11）
○来館者五十万人を突破　ハイペースで達成　販売高も十億円　篠山町農協の「特産館ささやま」　（11・15）
○高温、多雨、台風が影響　本年産米〝やや不良〟　（11・25）
○干ばつで収量減か　多紀郡で黒豆の収穫が本格化　（11・22）
○丹波ひかみ農協十二月一日に発足　県下一の組合員数　（11・29）
○丹波ひかみ農協初代組合長に荻野武氏　（12・2）
○氷上工業団地の分譲地が山村硝子の進出で完売　（12・2）
○北米からタマゴを購入、フ化させて成育　日本海へ　銀ザケ養殖に新ルート　（12・6）
○都会とふれあいを！〝季節の味〟を宅急便で　市島町前山地区の「ふれあい農園」　（12・16）

社会・文化

○青垣二〇〇一年日本画展　出品者の拡大はかり銀座で東京展計画　（1・7）
○山南町応地で子どもたちも参加して伝統の奇祭「蛇ない」大小のわらの蛇奉納　（1・18）
○柏原町母坪の和泉神社の修復終わる　氏子が浄財寄せ合う　（1・21）
○スピード違反するな!!県警が徹底取り締り　死亡事故抑止で強化策　（1・25）
○県立丹波文化会館今年で二十周年　「丹波の森の殿堂（仮称）」として整備充実　（1・25）
○高校生が非行の主流　大半が喫煙と柏原署が発表　（1・28）
○三たん一の厄除け大祭近づく　土、日曜で人出期待（柏原町）　（2・1）
○氷上町西小の全校児童のお年玉調査　一人平均二万二千円、昨年と同額でした　（2・1）
○柏原町北山の能勢さん　夫婦でひょうたんづくり　町内の名所など絵柄に　田捨女や木の根橋　（2・4）
○仏ニースの使節団に柏原町から二団体　柏声会と柏原太鼓　（2・11）
○市島町のあぜ道交流　七か国十一人が来町　初のブルガリア、ブータン、ドミニカからも　（2・15）
○クラシック低調だが…　たんば田園交響ホールの自主公演　喜劇や有名歌手は満席　（2・15）
○都市住民に農地開放　「クラインガルテン」（市民農園）住民主導で研究会　丹南町で　（2・18）
○お嫁さん、お婿さん探し　農家後継者の配偶者を　山南町で結婚相談特別月間　（2・22）
○好天に恵まれ十四万人〝柏原厄除祭大にぎわい　（2・22）
○幽玄の世界広がる　「安田虚心水墨画展」（丹波新聞社で）　（2・22）
○山南町南中の広内藤四郎さんが人生の節目に句集発刊　八十歳の記念で「傘寿」「古稀」「喜寿」に続き三句集目　（3・15）

○柏原町出身の西崎祥さん　ふるさとで初公演　（3・15）
○篠山ＡＢＣマラソン　一万五百二十七人がひた走る　（3・15）
○おサルさん　ごめんなさい！　約六十匹を一斉捕獲　西紀町栗柄の作物荒らしに幕　（3・18）
○集めた牛乳パック四十七トン　立木九百四十三本の〝命〟守る（丹波消費者団体連絡協議会）　（3・18）
○「日本の素顔は親切だ」市島町の第三回あぜ道交流で留学生八人が意見発表　（3・22）
○柏原町鐘ヶ坂公園でにぎやかにサクラ祭り　柏原藩陣太鼓出演など　（3・25）
○西紀町大師山古墳群で大量発掘　純金の金環を二個発見　銅鏡、勾玉、剣も　（3・29）
○記録的な早さで満開　暖冬、高温が拍車！丹波の名所では桜まつり　（4・1）
○柏原町母坪地区の歴史まとめ発刊　昔の姿知る貴重な文献　十年の歳月かけた労作　（4・1）
○精薄者授産施設「たんば園」を建設　ポプラの家の隣接地に　平成三年四月に開所予定　（4・5）
○師籍四十五年、古稀を祝い藤間勘有さんが「藤娘」披露　藤有会が盛大に発表会（春日町黒井で）　（4・12）
○ハングライダーのメッカに　カラフルな機体が大空に　青垣町で関西選手権　（4・12）
○柏原町歴史民俗資料館で柏原藩邸の模型など開館特別展　（4・15）
○開創百周年を迎える氷上郡の西国霊場札所　戦後衰退したが再興　開創者の子孫も出席し法会開く　（4・1）
○奇抜な仮面や彫刻！アメリカ原住民展日本で初公開（丹波年輪の里で）　（4・22）
○篠山町の山ゆりホームに痴呆性老人専用棟が完成　丹波で初の設置　（4・26）
○明治の写真が大量に　当時偲ぶ貴重な資料　山南町谷川の旧家から続々と　（4・29）
○多様な商法でトラブル　訪問販売など百八十四件　丹波生活科学センターの相談状況　（4・29）
○平成元年分の一千万以上の高額納税者丹波は五十二人　譲渡所得者が倍増（柏原税務署調べ）　（5・3）
○篠山の青山歴史村「古今集かるた」の見事な図録を発刊　（5・3）
○柏原町の下田正武先生の米寿の祝い兼ね旧満州奉天市の浪速高女十七回生卒後五十周年　各地から二十五人参加　（5・13）
○セキレイも住宅難？　柏原高校の生徒のゲタ箱に巣作り　卵三個　（5・20）
○柏原町鐘ヶ坂の国道土砂崩れで不通開通見込六月上旬　（5・24）
○舞鶴自動車道の春日Ｉ・Ｃ通行量記録を更新　鐘ヶ坂（柏原）の土砂崩れの影響　（5・27）
○非行は高校生が主役　一月以来不良行為で四十六人補導（柏原署）　（5・27）

○ホタルが乱舞する丹波に　生息分布調査を実施　テスト飼育、増殖も検討　柏原保健所と氷上郡公害防止対策推進協　（5・31）
○鐘ヶ坂の土砂崩れの国道の一七六号防護棚設け片側通行　全面復旧は年末に　（6・7）
○丹波の空気はきれい！水質も基準を満たす　柏原保健所の環境測定結果　（6・7）
○氷上郡友会がなごやかに総会開く　（6・14）
○氷上混声合唱団パストラールが結成二十周年祝う　力強く「希望」を合唱　風格持った合唱団に　（6・14）
○多量の鉛をタレ流し　排出基準の二十六倍も　県警と篠山署が丹南の兵庫ケーブルを強制捜査　（6・17）
○福知山の観音寺見事！あじさいこれからが見頃　（6・17）
○丹波初の銅鐸調査九年目で全貌明らかに　春日町が「野々間遺跡」を出版　（6・21）
○丹南町は開発ブームに対応し　三年がかりで遺跡の調査図の作成へ　（6・21）
○全国でただ一人〝竹くぎ〟を製造の石塚芳春さん（山南町梶）桧皮葺き文化財の屋根守る　文化庁長官がその功労をたたえ表彰　（6・24）
○氷上町で本場のフラメンコたっぷり七百人の観客を魅了！　（6・28）
○狙われる！高齢者　断りきれず購入が高率　訪問販売など調査　（7・1）
○華やいだ舞台で創立十周年を飾る　柏原町の中尾ダンススタジオ　（7・5）
○氷上町の円通寺で参禅会　無の境地にひたる　（7・8）
○前春日町長杉本喜八郎氏が死去　高速道建設に貢献　（7・12）
○「柏原藩の歴史と文化」常設展始まる　新発見の鬼瓦も展示（柏原歴史民俗資料館）　（7・12）
○山南町梶の平野正次郎さん　自筆の一千句集を発行　（7・22）
○子らにビッグな贈り物　播州峠のふもと広芝公園に間伐材でバックネット設ける（青垣町大名草地区有志）　（7・22）
○生活系汚水の影響大　多紀郡の水質検査（篠山保健所調べ）　（7・26）
○青垣町東芦田で平安時代後期の館跡　（7・29）
○丹波の森協会はウィーン森少年合唱団迎え友好記念植樹祭　篠山の交響ホール庭園で　（8・2）
○ようこそ青垣町へ！　オーストラリア、アメリカ、カナダの高校生がホームステイ　（8・2）
○猛暑に軒並み売り上げアップ　クーラー、ビール、かき氷、丹波地域小豆に日照りの被害　（8・9）
○農作物に干害のきざし　飲料水の節水呼びかけ　柏原町対策本部を設置　（8・12）
○自慢の緑がグッタリ　ドウダンツツジの一部が枯れる（丹波年輪の里）　（8・12）

○足元から光が出る　美観グーンとアップ　柏原町の並木道を演出　（8・19）
○タヌキと温かい交流　毎晩ノコノコと来訪　青垣町東芦田の芦田俊一さんが世話　（8・23）
○氷上町成松の愛宕祭り　花火、スカイアートに人気　造り物はアイデアで伝統の重み伝わる　（8・26）
○丹波の八十八歳以上老人は九百八十人百歳以上は七人、最高百四歳の中村さん　（8・30）
○柏原八幡神社で全面調査　絵図や王地山焼など歴史資料を数多く確認（9・6）
○篠山城趾に大手門　ドラマ撮影で設置撤去惜しむ声も　（9・9）
○「鉄斎と芋銭展」軸物や書簡など三十四点（丹波文化会館）　（9・16）
○台風十九号の影響　住宅浸水、農作物冠水、土砂崩れ、橋流失も　（9・23）
前山川荒れ片瀬橋流失（市島町）
井原橋付近は泥の海（山南町）
母坪のテナント浸水　上小倉の旧道通行止め（柏原町）
カヤカリ峠で倒木乗用車が接触事故（柏原町）
民家の裏山崩れる　河川の護岸の崩壊横田で二十戸床上浸水　大岡橋の橋脚沈下（氷上町）
農作物に大きな被害　和田貝橋が流失（春日町）
○クマ出没、注意！西紀町栗柄で栗園を荒らす
○「仏教絵画と工芸」篠山歴史美術館で特別展　（9・27）
○大公孫樹（樹齢八百年）を守ろう！　市島町梶原診断結果待って対応　（9・30）
○台風十九号の被害額　河川主体に二十三億円（柏原土木まとめ）　（9・30）
○ホタルの住む丹波に　人工飼育の幼虫放流（柏原保健所）　（9・30）
○百五人が感動レース　篠山町で全国車いすマラソン　（10・4）
○夜間に汚水タレ流す　篠山の畜産業者を検挙（篠山署）　（10・7）
○五十三年ぶり「御神楽」復活　篠山町の佐々婆神社の例祭　（10・11）
○丹波の秋を楽しむ　柏原町へツアー（大阪氷上郡友会）　（10・18）
○マツタケご飯ですよ　西紀町社協の給食サービスでお年寄り大喜び　（10・21）
○秋晴れの青垣路を二千四百十二人が力走　盛大にマラソン大会　（10・25）
○柏原病院に骨密度測定装置導入　骨粗しょう症診断に威力　（10・28）
○見事！日展に初入選　青垣町の佐伯幸胤さん（陶芸家）　多紀郡の三人も入選陶芸で西端、市野氏、竹工芸で箕浦氏　（11・1）
○民家の庭にマツタケ　植木屋さんもびっくり（柏原町柏原で）　（11・4）
○〝環境浄化〟を優先！春日町で風船上げ大会を中止　（11・8）
○青垣町高源寺で山開き　もみじの見頃は十日頃　（11・8）
○青垣二〇〇一年日本画展　各地から鑑賞相次ぐ　（11・11）

○柏原八幡神社で「即位の礼」の奉祝祭記帳所に多くの人　（11・15）
○山南町はすばらしい　アメリカ人留学生が伝統芸能の神楽にびっくり（11・15）
○事故防止と地域色PR　青垣と篠山丹南の国道沿いフェンスに〝絵模様〟　（11・18）
○NHK「ちょっといい旅」で山南町を紹介　（11・18）
○山南町岩屋で勇壮に武者行列　華麗石がん寺もみじ祭り　（11・22）
○氷上町清住の「ときめ樹」で仏像彫刻展オープン　目を見張る力作　（11・22）
○柏原町の依田さん　水引き細工の苦心作展示　（11・29）
○スラビッキーチェコスロバキア大統領補佐官が春日町の文化ホールで講演（氷上郡統一青年会主催）　（12・6）
○立杭焼の地雷容器　今田町の窯跡から発見　太平洋戦争末期に生産　（12・6）
○春日町文化ホール三年目で十三万人入場　町民の文化向上に貢献　（12・13）
○県指定文化財慧日寺（山南町太田）の仏殿の屋根修理　鎌倉時代の唐様式に　（12・16）
○鐘ヶ坂峠が七ヵ月ぶりに全面開通　（12・27）
○丹波で暖かいお正月を　短期里親　氷上郡で五世帯が受入れ　（12・27）
○「ピュアスポーツ柏原」でスケート場オープン　（12・27）

平成三年一月一日特集号

○'91丹波十町の課題
氷上郡―下水道の整備は急務
快適な住環境めざす
多紀郡―悲願のJR福知山線の複線化
北近畿豊岡自動車道の早期着工も
○〝統一地方選の年〟幕明け
○GO！新生「丹波ひかみ農協」
○'91の新年スタート
信念と情熱をもって
谷　洋一氏（衆議院議員）
農とは、工とは何か
中西一郎氏（参議院議員）
丹波が情報の発信源に
吉岡賢治氏（衆議院議員）
地域経済発展のために
足立良平氏（参議院議員）
複線化実現へ頑張る
梶原　清氏（参議院議員）
〝21世紀に熱き思い〟
藤原三郎氏（県議会議員）
丹波の森の創造めざし
藤井正一氏（県議会議員）
「曙光を見る」
村上　旭氏（県議会議員）
「丹波の森」づくりに
村岡隆夫氏（丹波県民局長）
信頼される病院を
岡本良三氏（県立柏原病院長）
○山積する丹波の課題（紙上座談会）
福知山線複線化　北近畿自動車道
郡一本化　氷上西校移転問題

丹波の森構想　芸術村構想
下水道整備　丹波文化会館改築
○NHK大河ドラマ「太平記」で脚光を浴びる足利氏ゆかりの石がん寺（山南町）
尊氏寄進の教書や鰐口
尊氏守って奮戦の武将を弔う十三塚

寄付者芳名録

（平成三年一月末現在）

◉岡田一雄殿	三〇〇〇〇円
◉小谷正雄殿	三〇〇〇〇円
◉千種倫幸殿	二二〇〇〇円
◉片山日幹殿	二〇〇〇〇円
◉足立誠一殿	一〇〇〇〇円
◉氷上高校・上井寛之殿	一〇〇〇〇円
◉栗原殿	一〇〇〇〇円
◉常岡　昭殿	一〇〇〇〇円
◉北山素純殿	七〇〇〇円
◉村上末吉殿	七〇〇〇円
◉足立かをる殿	六〇〇〇円
◉足立勲平殿	五〇〇〇円
◉磯畑　修殿	五〇〇〇円
◉岡原裕康殿	五〇〇〇円
◉神野妙子殿	五〇〇〇円
◉木村つた江殿	五〇〇〇円
◉古倉克實殿	五〇〇〇円
◉坂上　明殿	五〇〇〇円
◉坂上五朗殿	五〇〇〇円
◉坂上勝朗殿	五〇〇〇円
◉田中篤郎殿	五〇〇〇円
◉中村美子殿	五〇〇〇円
◉広沢克江殿	五〇〇〇円
◉山本清士殿	五〇〇〇円
◉西安二三夫殿	四〇〇〇円
◉福島輝子殿	三〇〇〇円
◉井本義一殿	二〇〇〇円
◉石田勝彦殿	一〇〇〇円
◉久保知義殿	一〇〇〇円
◉高桑良弥殿	一〇〇〇円
◉中井　延殿	一〇〇〇円
◉林田孝子殿	一〇〇〇円

有難うございました。

〈事務局より〉

⊙当会の年会費は一〇〇〇円と定められておりますが、強制的なものではありません。会の通信費や「山ざる」誌の郵送料などに当てますので、どうかご協力のほどをお願いします。年会費等の領収は来年度23号の名簿中に記載いたします。

⊙「山ざる」誌の資金源は、上記のような会員篤志家の寄付金および協賛広告料によってまかなわれています。来年もまたどうかよろしくお願い申しあげます。

⊙「山ざる」誌は、隔年掲載の会員名簿の全員と、郷里の学校や役場等にも送って回覧していただいております。

⊙当郷友会は、入会、退会規定など特に定めておりませんので、昨年21号に記載もれの方、物故者等、ぜひおしらせください。また記載された方でも、生年、出身町、旧姓、勤務先、趣味など、不明な方がまだ多くあります。振替用紙の通信欄などで事務局までどうかおしらせくださいますようお願いいたします。

平成２年11月17日

会　計　報　告　書

（平成元年10月１日～平成２年９月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・足立和巳

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	321,641	現金62,135円　郵便貯金86,750円 振替貯金39,640円　普通預金133,116円	出版費	989,178	「山ざる」21号製作費及び発送費
年会費収入	412,000	延232名	通信・印刷費	150,423	総会案内、役員会案内，アンケート他
総会費収入	385,000	77名	総会費	511,489	総会関係支払
役員会費収入	129,000	延36名	長寿祝費	33,372	長寿者記念品
編集会費収入	0		会議費	93,585	新春役員会
寄付金	245,000	延26名	慶弔費	0	
広告料収入	1,042,000	延78名	支払手数料	16,068	郵便振替手数料及び送金料
受取利息	5,124		消耗品費他	1,548	葉書購入代他
雑収入	26,980		繰越金	771,082	現金139,581円　郵便貯金497,392円 振替貯金０　普通預金134,109円
合計	2,566,745		合計	2,566,745	

建築材料販売工事

建設大臣許可 第1834号

中央建材工業株式会社

専務取締役
東京支店長　**荻　野　　武**

（市島町出身）

本　　社　名古屋市千種区高見1－6－1
電話　052（761）6181（代表）

東京支店　東京都中央区銀座7－14－3
電話　03（3543）8106（代表）

大阪営業所　大阪市西区江戸堀1－8－15
電話　06（443）6665

豊田営業所　愛知県西加茂郡三好町大字三始西田3－4
電話　05613（4）3121

仙台出張所　仙台市青葉区高松2－11－15
電話　022（273）5724

札幌出張所　札幌市中央区南一条西7－12
電話　011（271）3961

新潟出張所　新潟市米山5－1－25
電話　0252（45）1705

松本出張所　松本市野溝木工1－6－58
電話　0263（25）0351

広島出張所　広島市西区中広町1－4－16
電話　082（291）3780

能力とは知識を

行動に置き換えること

≪ヒュウマンアドバンス　コンサルタント≫

人生を楽しくするために

人材育成研究所

三井海上火災保険株式会社　講　　師
安田火災海上保険株式会社　講　　師
全国自動車保険整備工場協会　講　　師
日動火災海上保険株式会社　講　　師
学校法人　ホンダ学園　非常勤講師
労働基準管理協会　会員　労務管理士

所　長　坂　上　五　朗

（氷上町下新庄出身）

〒349-01　埼玉県蓮田市西新宿２丁目32番21

TEL & FAX 0 4 8 7 6 9-6 8 8 5

日刊自動車新聞

坂上五朗氏を講師に

A I R 静岡支部　経営セミナーを開催

【静岡】AIR静岡支部は、この日、静岡上原校で、人材育成研究所長の坂上五朗氏を講師に「これからの整備工場経営と計数管理」と題する整備工場経営セミナーを開催した。＝写真

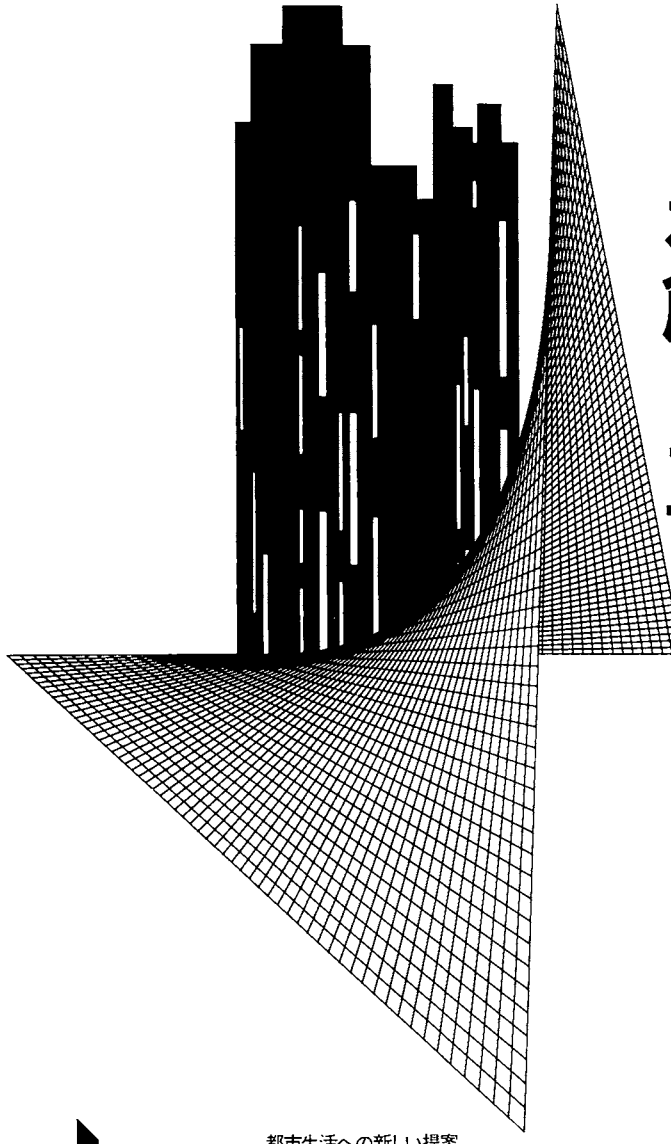
ミニサロン

いま最も重要な問題は雇用問題

人材育成研究所　坂上五朗所長

「仕事柄、全国の整備工場のトップの皆さんと接する機会がおいのですが、現在、最も重大な問題となっているのは、やはり人が集まらないという雇用問題のようですね。転職する際、職工場の第一の原因も後継者問題と聞いていますし、今後、業界あげて人材確保に取り組む必要があると思います。と、整備業界が抱える問題を指摘するのは、人材育成研究所長として全国を歩いている坂上五朗氏＝写真。さきの、AIR三重支部が開いた講演会でも、人材確保の重要性を力説していた。「ともすれば、経営数字から、攻撃する姿勢への転換が叫ばれて久しい整備業界だが、とにかく行動することが急務と熱っぽく語って、……

都会の森と、くらしを創ります。



都市生活への新しい提案

株式会社 江南シードコーポレーション

取締役社長　千種倫幸（山南町出身）

〒106 東京都港区東麻布1丁目7番3号　電話：(03)35561-0388（代表）

田　　英　夫

東京都千代田区永田町2-1-1 参議院議員会館229号室
電話 (3581)3111 内線5229

財団法人 東洋療法研修試験財団 理　事
社団法人 日本鍼灸師会 常任相談役
鍼専門 杏林堂 院　長

小川　晴通

新宿杏林堂 〒163 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル5F
電話 03-3348-0721
FAX 03-3348-0722

(株) 大　　洋

松　下　文　雄

〒351　朝霞市膝折町　3－7－5

同好会：日本のおどり　端唄と三味線

土曜日　午後１時～５時
老若男女　初心者　歓迎

日舞指導　西　崎　　祥　(柏原町出身)
端唄指導　根　岸　　妙

〒141 東京都品川区西五反田8-10-14-201 電話(03)3491-8962

REWARD®
Onaji Mai Mai®

あらゆるスポーツウェアーのご相談は当社へ

Noble ノーブルスター株式会社

取締役会長　吉　住　重　造　(春日町中山出身)

〒101 東京都千代田区東神田2-4-7 電話(03)3866-9121(代)

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税理士　船　越　祥　郎
(春日町多田出身)

〒196 東京都昭島市郷地町2－17－9 電話(0425)44－5997

株式会社 **三　葉　水　道**

代表取締役　橋　爪　　忠

（氷上町黒田出身）

〒276　　千葉県八千代市八千代台西 7—5—29

電話　0474—84—7121番　FAX 0474-82-9626番

門と塀と庭　ブロック　門扉　車庫

プレハブ　サンルーム　ベランダ　温室

株式会社　**大**ダイ　**樹**キ

代表取締役　岡　　吉　明

（柏原町出身）

〒351　和光市南1-11-40　電話（0484）63-4420（代表）

大菱印刷有限会社

田中　寛　（山南町出身）

〒110 東京都台東区台東1－27－5　大塚ビル

☎03－3833－1595

激動の時代と共に綴るあなたの昭和史

記入式・自分史年表 昭和メモリー

■B5判 192頁／定価 2,000円・送料無料

〖大船調映画〗の盛衰を描くドキュメント

撮影所のある街 大船物語

升本喜年 著■四六判 242頁／定価 1,500円・送料無料

株式会社 ホンゴー出版　東京都中央区日本橋茅場町3-3-4 坪井ビル

〒103　☎03(3666)1922(代表)

代表取締役　池田　忍

郵便振替　東京 3-144071

高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

代表取締役会長　足　立　三　治

東京店　品川区西五反田7—22—17
東京卸売センター12階
電　話　(03)3494-3285～7

本　社　川崎市中原区新丸子701
電　話　(044) 722—6371(代表)
会長室直通　711—3324

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士(電気部門)登録証　第15810号
エネルギー管理士(電気)免状　第2857号
エネルギー管理士(熱)免状　第5191号

若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302　茨城県取手市白山5—4—13
TEL　0297(72)0907

社会福祉法人
調布市社会福祉協議会

理事　木村つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2—39—5
電話（03）3300-6895

株式会社　**近藤写真製版所**

取締役社長　近藤勇夫（国領出身）

東京都新宿区下宮比町2番17号　電話 03-3260-6281(代表)
FAX 03-3260-6527

東急建設株式会社
専務取締役　芦田重秋
〒150　東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号
渋谷地下鉄ビル内
電話　東京〇三(三四〇六)五一一一(大代表)

足立かをる
〒232　横浜市南区大岡四―十九　上大岡ハイツA414
電話　〇四五―七一五―五三八七番

足立和巳
自宅　府中市栄町一―一五―二七
電話　(〇四二三)六四―七二二七

足立勲平
〒251　藤沢市鵠沼藤ヶ谷一―七―四
電話　〇四六六(二七)二六四六
(二二)六四六一

(株)ミワシステムズコンサルティング
代表取締役　足立謙悟
〒220　横浜市西区岡野一―十三―十三
TEL　(〇四五)三一二―五四一八
FAX　(〇四五)三一二―三八〇一

交通毎日新聞編集局
次長　足立静雄
東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一(白亜ビル)
電話　六四二―三四一四　番　〒107

安達陽一

〒340 草加市八幡町一二八五—五

日本損害保険協会
特級（一般）資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所
飯田光雄

自宅 四街道市旭ヶ丘 三—九—二
〒284 電話〇四三四（二二）二二八〇

新明和オートエンジニアリング株式會社
取締役社長 生田清弘

〒230 横浜市鶴見区尻手三丁目二番四三号
電話 （〇四五）五八二—一五二二（代）

上山顯

〒106 東京都港区元麻布二ノ一一ノ三六ノ五〇三

日本製薬団体連合会
理事長 江間時彦

103 東京都中央区日本橋本町二の一の五（薬業会館）
電話 （〇三）三二七〇 〇五八一番（代表）〇五八三番（直通）

日製産業株式会社
取締役会長 大木正徳

〒105 東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話（〇三）三五〇四—七一一一番

大野善三

自宅 〒228 相模原市相模台七―二五―八
（〇四二七―四六―八七九〇）

（株）パンオーディオシステム
代表取締役 岡林逸男
〒330 大宮市盆栽町五一四（押田ビル）
TEL（〇四八）六六五―三六九四（代表）
FAX（〇四八）六六六―四一二七

小田富士夫

木呂子恵美子

小糸イキ

坂上勝朗

静岡大学教授
坂本重雄
自宅〒422 静岡市小鹿三丁目四—五
公務員住宅八—二六
電話 〇五四二(八二)八〇五八番

佐々木盛雄
〒161 東京都新宿区中井二—十一—十八

笹倉強
〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
電話 〇四八四—七七—五六四〇

澤田みさを

須原清
〒164 東京都中野区南台五の三〇の六
電話 (〇三)三三八一—一六二一番

正呂地群治
〒105 東京都港区芝大門二—六—十二
(正呂地ビル)
電話 (〇三) 三四三一—二六五三

勢川武彦

〒164 東京都中野区東中野二ノ一七ノ二〇
電話 (〇三)三三六一—八六七六番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話 (三九五六)〇六〇〇番

田中篤郎

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一—二四—一七
電話 (三三三一)一〇七六番

常岡幹彦

鶴田　宏

波多洋三
〒112 文京区春日二―一七―二
電話（〇三）三八一一―二八六〇番

畑　義則

藤田正雄

宗教法人 青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑 管理
（都営八王子霊園となり 新規墓地分譲案内中）
住職 堀井隆川
〒193 東京都八王子市元八王子町三―一三九七
電話（〇四二六）六三―八四〇三

瑞豊産業株式会社
代表取締役社長 水船隆昌
〒102 東京都千代田区六番町六 勝永六番町ビル3F
電話（〇三）三二二一一七三五

宮野　近

ウェディングドレス専門創作卸
(株)シャルム商会
常務取締役
東京店店長　村上　昇
東京店　〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話(〇三)三三七四—〇一一一五(代)
本社　〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話(〇七五)二二一二—〇二一一五(代)

村上久夫
〒168 東京都杉並区高井戸東三—四—十二
電話(〇三)三三三二—七一三四番

大七(だいなな)証券株式会社銀座支店
第一営業部
首席　安田　功
〒104 東京都中央区銀座四丁目一〇番三号
電話(〇三)三五四五—九一一一(代)

安原三智子

渡邊隆男

編集後記

☆気象庁によると、今年の東京の開花は3月28日という。その日は朝から冷たい雨が降り続いて、蕾はガードを固くしていた。翌29日に開花したというのだが、上野はまだ一分咲きだったとか。どうも日本は花を気にし過ぎる国ではある。……昨年は、いつの間にやら花が開いたと思ったら、いつの間にかさっさと散ってしまった、とこの編集後記に書いた覚えがある。

☆「三月尽」「九月尽」という季語があるが、春・秋を惜しむ意が込められている。今日はその三月尽なのであるが、花の盛りはまだ先のことらしい。

☆丹波からの便りに〝今年我が家は米作をやめて小豆を作ることになりました。今年は米を買わねばなりません。日本の農政はどうなっているのでしょうか〟といってきました。私が生まれて七十余年わが田に稲が実らぬ秋などは想像できません。幾百年も続いた農家が初めて米を買うという心境は察するに余りがあります。いかに上意下達でも「米を作るな」にはかなりの抵抗があったと思います。これは、一農民のお米さんに寄せる心情のみならず、農村に育った者たちの心でもあります。

☆私事ばかり並べて申しわけないのですが、私は二月初旬から入院生活を送っていて、編集のお手伝いもできなければ、約束の「氷上政記・後篇」も残念ですが一年先送りにせざるを得ません。心からお詫びいたします。

☆原稿は力作がたくさん集まっているようですから、結構なことと喜び、立派な「山ざる」の出る日を期待しています。元気になって退院すれば、またお世話になります。平成三年三月。（足立源治）

☆

☆編集長の足立源治さんが一昨年胆嚢と肝臓の大手術を受けられ、今春また肺炎を予防のため再入院されました。至って順調のよし、どうかご安心ください。五～六月ごろにはまた、お元気なお顔が見られることでしょう。どうかお大事に。

☆会員名簿は一年おきに掲載しております。住所変更などお知らせください。そして来年もまたたくさんのご寄稿をお待ちしています。資金源の広告もまたぜひお寄せくださいますようお願いします。郷友のご健勝ご発展を祈ります。（玄）

山ざる　第22号

平成三年五月三十日発行

〈編集委員〉足立源治　木呂子恵美子
足立和巳　大野善三　小田富士夫
坂上勝朗　田中篤郎　常岡幹彦
鶴田ゆき子　宮野　近　渡辺隆男

発行者　関東氷上郷友会会長・村上末吉

〒102　東京都千代田区神田小川町1ノ11
DMSビル内・関東氷上郷友会・事務局
☎〇三（二九三）二九五五
振替・東京一―一二三一三〇
製作　株式会社二玄社

おもわず新しい

NEXTA

“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッピイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
大阪工場	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

設計・施工　桂建築計画工房